

# ロバート・オーエンと現代

——ロバート・オーエン生誕 200 年記念によせて——

今 井 義 夫

## 目 次

はじめに

### I. ニュー・ラナーク、1970年9月

——ロバート・オーエンの協同の村をたずねて——

### II. ロバート・オーエンと現代のイギリス

#### 1. 大英博物館のロバート・オーエン文献

#### 2. フェイビアン協会員とロバート・オーエン研究

——三人の伝記作者をめぐる——

#### 3. ロバート・オーエンと協同組合および労働組合運動

——ウェールズの協同組合員・建築労働者モウルス氏——

#### 4. “危険なメッセージをもった親切な男”

——イギリス上院におけるオーエン生誕 200 年記念をめぐる討議から——

### III. イギリスにおけるロバート・オーエン生誕 200 年記念

### IV. ソ連の出版物におけるロバート・オーエン

——1918 年から 1971 年の概況——

### V. 日本におけるロバート・オーエン生誕 200 年記念

むすび

〔付録〕 日本にあるロバート・オーエンの自筆文書(写真版)

## Robert Owen Today

—A Report on the Bi-Centenary of Robert Owen—

Yoshio IMAL.

### CONTENTS

#### Preface

#### I. New Lanark, September 1970.

—A Report from the Village of Robert Owen—

#### II. Robert Owen and Great Britain Today.

1. Some Documents concerning Robert Owen in B.M.

2. The Fabians and Their Studies on Robert Owen.

—Three Biographers—

3. Robert Owen and the Movements of the Co-operation and the Trade Unions.—A Co-operator and a Member of the Builder's Trade Union of S. Wales, Mr.A. Moulds.

4. "The Kindly Man with a Dangerous Message"

—The Debates about Robert Owen in the House of Lords on the 5th of May, 1971.

#### III. The Bi-Centenary of Robert Owen in Great Britain.

#### IV. Robert Owen in the Publications of USSR.

—1918~1971—

#### V. The Bi-Centenary of Robert Owen in Japan.

Conclusion.

Appendix. Robert Owen's Autographies in Japan. (Photo-copies)





(図 No.1) ロバート・オーエン肖像

by J. Comerford. (一橋大学・外池文庫の copy から)

### はじめに

1971年はイギリスの協同組合運動や社会主義の先駆者として知られるロバート・オーエン(Robert Owen, 1771—1858)の生誕 200 年に当たる。その当日 5 月 14 日を中心に本国のイギリスはもとより日本をふくめた世界各地でオーエンにちなんだ記念行事や記念出版が行なわれ、この先駆者の業績を回想し、彼の思想と実践がもつ現代的意義についての世人の再考をうながした。

私は社会思想史研究の一学徒として早くからオーエンの人と思想について関心をもっていたが、たまたま 1968 年 9 月から 1970 年 10 月にかけての 2 年間にわたって英露比較文化史研究をめざしてオックスフォード大学のセント・アントニーズ・カレッジ(St. Antony's College, Oxford)に研究生として留学の機会を本学からあたえられた。この期間に私はかねてから意図していたイギリス社会思想史の勉強の一つとしてオーエンについての調査を試みることができた。

当時すでにイギリスでは 1971 年 5 月に予定されていた記念事業にそなえて、ローバ

ト・オーエン生誕200年記念協会 (Robert Owen Bi-Centenary Association) が組織されていたので私もそこに入会し、自らオーエンのゆかりの地であるスコットランドのニュー・ラナーク (New Lanark) を訪れた。またオックスフォードやロンドンの図書館でオーエン関係の文献をしらべることもできた。この報告は同協会員としてのオーエン顕彰活動の一端としても意味があろうかと考えている。

イギリスから帰国後の1970年度および1971年度の本学での社会思想史講義を担当した私はその一部にオーエンをとりあげて学生諸君とともにオーエンの著作を読み、イギリスでの見聞を報告し、私なりにオーエン生誕 200 年を記念しようと心がけた。この報告ははじめそれらの講義のためにまとめた記録や資料にもとづいている。この報告の文体が（とくにⅠ・Ⅱにおいて）論文としてはやや異例なスタイルをとっているのはそのためである。

もともとオーエンの専門研究者ではなく、また今回はじめてイギリスでの勉学の機会に恵まれた私にとって、この報告はオーエンやイギリスについての自らの研究の出発点を意味するものであって多くの点で私は自らの力量と準備の不足を痛感している。またそれ故に、この報告をまとめるに当たって、私は多くの人々からの好意ある助力を得なければならなかったし、これを機会に今後いろいろと識者や先学諸氏のご教示を得たいとねがっている。

とりわけ今回のイギリスでの勉強にあたっては一橋大学の先輩である都築忠七博士御夫妻のひとかたならぬお世話になったが、オーエンやイギリス労働運動史をめぐる私の調査のためにこの領域で今日国際的な名声のたかい同氏のご教示を得たことと、オックスフォードでの学友たちからのさまざまな助言を得たことは私にとってまったく幸運なことであった。

オーエンの生誕 200 年記念日である1971年 5 月14日以前にイギリスを去らねばならなかった私にとって、記念日をめぐるイギリスでの各種の情報や資料の入手を自ら行うことは困難であった。そのためそれらの入手を、ロンドンに在住してすでに数年間にわたり近代イギリス社会思想史の研究をつづけておられる先学の佐藤共子さんにおねがいした。後輩のこのあつかましい依頼にこたえて彼女は多忙ななかを 5 月14日にロンドンの TUC の Congress House で催されたオーエン生誕 200 年記念集会や Loughborough の Co-operative College におけるオーエン記念 Summer School にも出かけて資料の入手に努められ、東京の筆者に郵送する労をとられた。従って、私のこの調査報告のうち第Ⅱ部の4と第Ⅲ部の大部分の資料は佐藤共子さんの収集の努力に負うている。

今 井 義 夫

在英中にオーエン研究の文献については St. Antony's College Library の Miss. A. Abley にいろいろとお世話になったし、スコットランドでの調査に当たっては Lady M. Nelson と Mr. W.J. Gibson および、今井けいの協力を得た。東京ではこの報告書の中に収録したオーエンの自筆の手紙をはじめ貴重なオーエンの資料を所蔵している一橋大学図書館の外池文庫の利用について同館の大橋渉氏と清水末寿氏のご助力を得た。

以上のほか、工学院大学図書館の方々やその他お世話になった多くの方々にここで厚くお礼を申し上げたい。

1971年11月末日

I. ニュー・ラナーク 1970年 9 月

——ロバート・オーエンの協同の村を訪れて——

〔調査報告〕

(1) オックスフォードからニュー・ラナークへの旅

私がニュー・ラナーク (New Lanark) のオーエンの協同の村 (The Village of Co-operation) の跡を訪れようと思いついたのは日本への帰国も迫った1970年の9月はじめであった。2年間のイギリス留学中ほとんどオックスフォードに引きこもっていた私もこの国の近代社会思想史上の巨星たち——たとえば Adam Smith, David Hume, Walter Scott など——を生み出したスコットランドの風物はぜひ自分の目で確かめておきたかった。ニュー・ラナークはそのスコットランドの入口ともいふべき位置にある。私は往路も帰路も幹道からややはずれたクライド川 (The Clyde) の谷間のかつて「奇蹟の村」とも呼ばれた小天地を訪れ、オーエンの百数十年前の輝かしい社会的実験をしのんだのであった。

オックスフォードから車を運転して国道第6号 (M6) に出てスコットランドに向かうと、途中 Liverpool を経て Manchester を通る。この Manchester の町はオーエンが1787年から1798年まで、すなわち彼の16才から27才までを過した工業都市である。オーエンはこの町で呉服商の店員をふり出しに、後には500人の紡績工を雇用する Drinkwater 氏の紡績工場の経営を任せられ、最後には20才の若さで他の二人の出資者とともにコールトン紡績工場 (Chorlton Twist Company) の共同経営者となつて、当時のイギリスでの最も有能な綿紡績工場経営者としての地位を築きつつあった。

同時にこの町でオーエンは9才で終えた彼の独学者としての学歴を補ってあまりあるすぐれた知的交際の機会に恵まれた。当時この町に住んで Unitarian New College (今日の Manchester College, Oxford) の数学教師となっていた化学的原子論の創始者 John Dalton のサロンに加わったオーエンは彼らから科学や社会の最新の理論を聞く機会をもったほかすぐれた友人たちを得た。当時進行中のフランス革命への共鳴者であった Samuel Coleridge はこのサロンに出入りしていて、オーエンはこの詩人とししばしば討論する機会にも恵まれた。<sup>1)</sup>

その後オーエンは Manchester の社会的活動家として知られる物理学者の Dr. Percival を会長とするこの町の“文学と哲学の会”(The Manchester Literary and Philosophical Society) に1793年に会員として推挙されて、より広汎な知識人と接することになる。この会員には詩人で哲学者の James Beattie, フランス革命の支持者であった化学者 Joseph Priestley や古典学者の Gilbert Wakefield などが名を連ねていた。蒸気船の発明者 Robert Fulton もその一人であった。<sup>2)</sup>

もともとオーエンは読書家ではなかったようであり、自らの読書についてほとんど記録を残していないが、この“文学と哲学の会”を通じて彼がフランスの啓蒙思想家 Helvétius, Rousseau や Morelly およびイギリスの思想家 Hobbes や Locke などの思想について学んだことはかなり確実なものと推測されている。そのほか、彼が読んだと思われる書物としては同時代のイギリスの思想家 Bentham やアメリカ独立運動につながる Thomas Paine の著作や、イギリスの婦人解放思想の先駆者 Mary Wollstonecraft の著作を挙げることができるし、とりわけ、オーエンがこの会に入会した年に出版されて大きな反響を呼んだ William Godwin の“*Political Justice*”(1793年)からの影響を受けたであろうということは研究者たちの一致して指摘するところである。<sup>3)</sup> 後年のオーエンの著作にあらわれる思想は彼が自らの独創と唱えていたものをふくめてこの期間に彼が得た教養に負うものが多く、その意味では Manchester でのオーエンの思想の基礎はでき上っていたと見ることができるようである。それは基本的には18世紀の啓蒙思想につながる「理性」と「人間性」への確信に支えられた楽天主義であった。

Manchester は当時進行中の産業革命の一大中心地であった。オーエンがこの町に住んだ10年余の間にも綿紡績業を中心とした工業の発展で町の相貌は急激に変化した。オーエンが産業の発展がもたらす人間生活への影響の深刻さをつぶさに観察してこれに強い関心をもったのもこの町であった。オーエンが後年の社会改革案の中でも都市計画の問題を重視して自らコミュニティー建設の構想を示して、今日都市計画問題で

も先駆者とみなされるにいたったのはこの Manchester での体験と思索にもとづくものと思われるのである。<sup>4)</sup>

いずれにせよオーエンは経営者としての成長の過程で単なる企業家としての関心をこえる人間的関心と世界史的な視野とをこの期間に身につけたといえる。それはアメリカ独立戦争につづくフランス革命と産業革命という世界史の一大転換期を背景とした新しい人間と思想の誕生を意味していた。Manchester や Liverpool はいずれも 1830—1840 年代にオーエンの影響がもっとも強かった地域で、1840 年代のはじめにはこの二つの都市には他の地方に先立ってオーエン主義者たちによる彼らの布教センターともいふべき Hall of Science と呼ばれる集会場が建てられたところでもある。

Manchester を経て私は Lake District に入った。ここは周知のようにイングランドにおける最も美しい景観で知られている山々の間に散在する湖沼地帯である。しかし、私のこの地への訪問の目的はまずオーエンの同時代人で 1970 年に生誕 200 年記念を迎えた詩人 William Wordsworth の旧居 Dove Cottage を Grasmere の湖畔に訪れることと、同じ地域の Coniston Water のほとりにある William Linton の旧アトリエを訪れることであった。

オーエンと交際のあった詩人 Coleridge と Wordsworth の親交については英文学を学ぶ人々ならば知っていることであろう。Coleridge も一時この地域の Keswick の町の Greta Hall に住んでいて Dove Cottage にはしばしば訪れている。社会思想史上の問題としても Coleridge の影響は大きなものがあったし、Wordsworth の詩が J.S. Mill の思想的転機に重要な意味をもったことはその自叙伝のなかでも語られている。<sup>5)</sup> 私は Dove Cottage の壁にかつてこの Cottage の主を訪れた著名なイギリスの詩人、作家、政治家、科学者などの肖像画が数多く掲げられているのを見て、いまさらながらオーエンの時代のこの国における文化史的背景の多彩さについても考えさせられたのであった。

William Linton はオーエン時代の社会的活動家としても知られる画家で、私ははじめロシアの亡命思想家アレクサンダー・ゲルツェン (А.Герцен) との彼の交友からこの画家の名を知ったのである。<sup>6)</sup> 1852 年にオーエンと会ったこともあるゲルツェンがロンドンに設立した自由ロシア出版所 (Вольная Русская Типография в Лондоне) から 1855 年から 1869 年にわたって発行されたロシア語の雑誌 “北極星 (Полярная Звезда)” の表紙にはニコライ一世によって処刑されたデカブリストの指導者五人の肖像と断頭台がデザインされていて、ゲルツェンが彼らの遺業を継いでロシアの自由のた

めに闘う決意を象徴している。この力強い表紙の版画の製作者こそ Linton であり、私が訪れた Coniston Water の美しい湖畔のアトリエは彼が当時版画や印刷にとり組んだ歴史的な場所である。訪れてみると Linton のアトリエは今では Linton の後にそこに住んだ John Ruskin を記念する小博物館となっていた。

翌日は A6, A7 道路を通過してスコットランドに入り Edinburgh の近郊の村 Dalkeith にある知人の家に泊った。この家の主人 Dr. Hogg は社会医師 (Social Doctor) という肩書をもつ主としてこの地区の老人医療を担当する医者で、私はこの人からイギリスにおける社会保障の一つとしての老人医療について聞くことができた。私たちの話題は自然とロバート・オーエンのニュー・ラナークにおける協同村の医療制度のことにまで及んだ。スコットランドでオーエンが協同組合の一つの事業としてとり入れた村人のための医療制度の伝統は今日のイギリスにおける医療保健制度にひきつがれているといえるであろう。今日ではいろいろな難点を見せはじめているとはいえイギリスの社会保障としての医療制度は外国からの留学生やその家族にまで適用されていて、その恩恵に浴した私には自国でのみじめな体験にひきくらべて、はるかに民衆に根ざしたゆきとどいた制度として感じられた。

その翌日の午後 A702 道路を南下し Dolphinton, Carnwath を経てラナークの町に向かった。途中の景観はイングランドには感じられなかった高原の趣が濃い。道路を往き交う車の数は極めて少なく、道の両側にはなだらかな高原の起伏がひろがり、耕地や黒々とした森や原野に放牧されている牛や羊の群が見える。人影はほとんど見られないが、点在する村落や農家はこの地方一帯に見られる青灰色の石材を壁に使った、屋根の低いこじんまりとしたものが多い。イングランドやウェールズの農村にくらべて、スコットランドの農民の家は概してつつましく見える。この附近は地図の上では北緯55度、樺太の北端に当り、冬の大寒さが思いやられる。秋のせい空は雲の動きが激しく時々大粒の雨が地平に叩きつけるように降って路面でしぶきを上げる。と思うと突然雲が切れてはるかな山影を背景に高原の上に虹があらわれたりする。私はこのような道に車を走らせながら、かつてオーエンがその自伝の中に描いた彼のハイランド地方の旅行記の情景を思い出していた。

ラナーク州の首都ラナークはオーエンの不朽の論文 “Report to the Country of Lanark” (1820) でその名を知られているが現在では極く平凡な地方都市である。教会、公会堂、ホテル、商店などが建ち並ぶ町の中央広場も狭く、建物は16～19世紀の古い様式をとどめているものが多い。

オーエンが1800年から1825年までの4分の1世紀にわたって紡績工業のすぐれた経

営者として、また人間と社会の根本的な変革を目ざす博愛主義的な指導者として活躍したニュー・ラナークの村はこのラナークの町の中央広場から1マイルほど南東にある。広場からそこに向かう裏通りの両側には往年の労働者街をしのばせるような黒づんだ粗末な家々が並んでいてその間に大衆向きの簡易食堂が“Fish & Chips”の看板を下げている。イギリスの大都市の裏通りのどこにも見られるこのような庶民の食堂からは今日のイギリスの労働者たちの生活水準をすぐには推測することはできない。しかしこのような食堂に入って一皿の鱈のフライとポテト・チップスに一杯の安いミルク・コーヒーをとっていると産業革命期以来のイギリスの労働者階級の生活の飾らぬ実態にふれるような想いがするのである。私はそこに来あわせていたいかにも労働者の家族らしい朴訥な人々を見ながら、数年前にロンドン・イングランドの裏街に泊ったときに立寄った同じようなわびしい簡易食堂を連想していた。そこで食事をしている人々はいずれも多くを語らないが、私には働く人々のもつ国籍を越えた何か共通のものが感じられた。

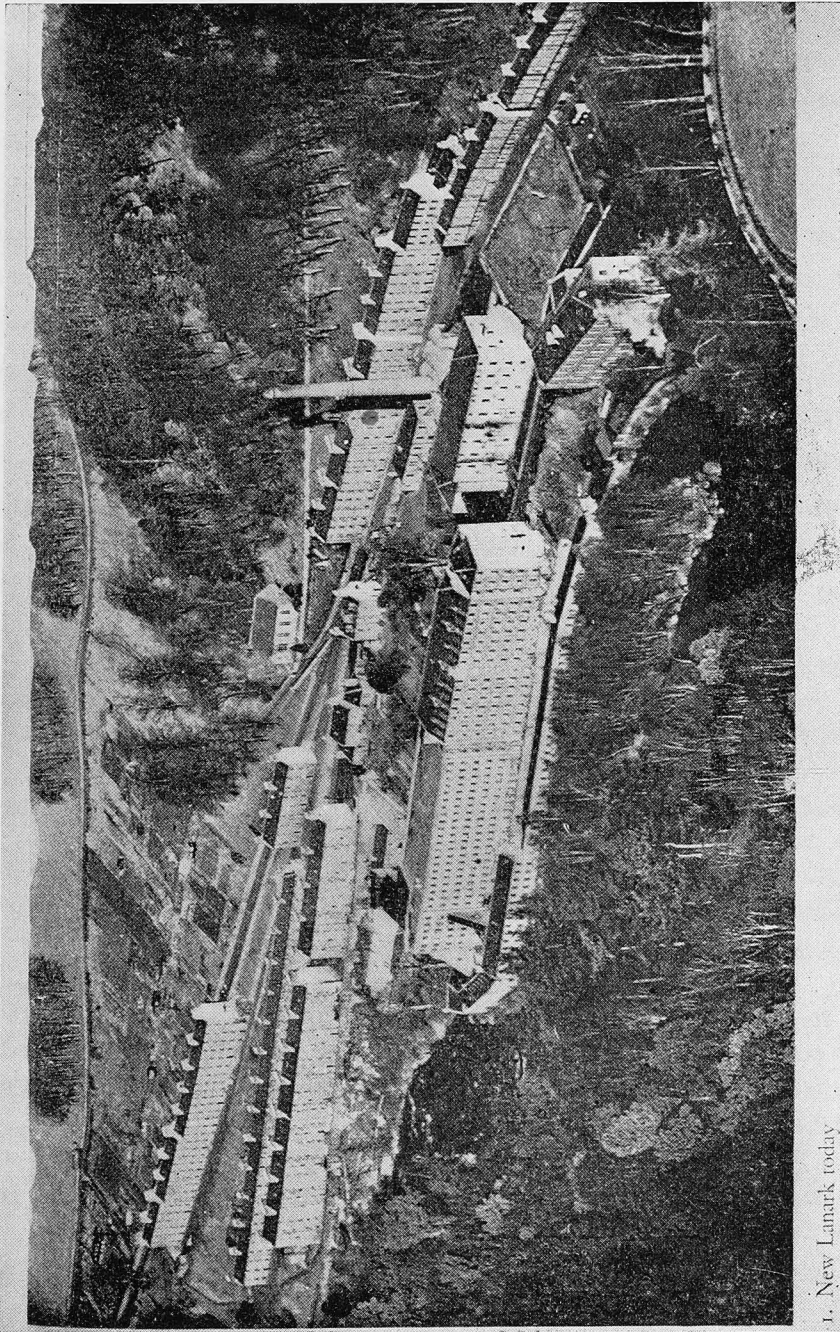
〔注〕

1. *Life of Robert Owen, Written By Himself*. vol. I. London, 1857. p. 36, 以下 Life と略記する。
2. この会には通信会員としてフランスの化学者 Lavosier, アメリカ独立運動の立役者 Benjamin Franklin や同じく Benjamin Rush など名を連ねている。cf. M. Cole. *Robert Owen of New Lanark*. 1953. pp. 17~19.
3. H. Podmore, *Robert Owen, A Biography*, 1906, vol. I. (Reprint by A.M. Kelley. New York. 1968) p.119. pp.120~121.  
M. Cole, *op. cit.* p.27.  
白井厚「ウィリアム・ゴドウィンとロバート・オウエン」(ロバート・オウエン協会編、ロバート・オウエン論集、東京、1971、所収) 参照。
4. J.F.C. Harrison, *Robert Owen and the Owenites in Britain and America, The Quest for the New Moral World*, London, 1969, pp.152~153.
5. J.S. Mill, *Autobiography*, London. 1969, pp.124~125.
6. W.J. Linton, *Memories*, London, 1895. その Ch. XX ではオーエンについて、Ch. XVIII ではゲルツェンとバクナーンとの交際の思い出が記されている。ゲルツェンの著作のうち英訳されたものの幾つかはこの Linton によって出版されている。  
cf. M. Partridge, “Alexander Herzen and English Press”, *The Slavonic and the East European Review*, vol. XXXVI, No.8. June 1958. p.454.

## (2) ニュー・ラナークの広場と協同組合売店と会計所

ラナークを出て、ニュー・ラナークにいたる道はカーブの多い下り坂の道で、村の入口の急な坂の上からはすでにクライド川 (The Clyde) の右岸に沿って細長いコン



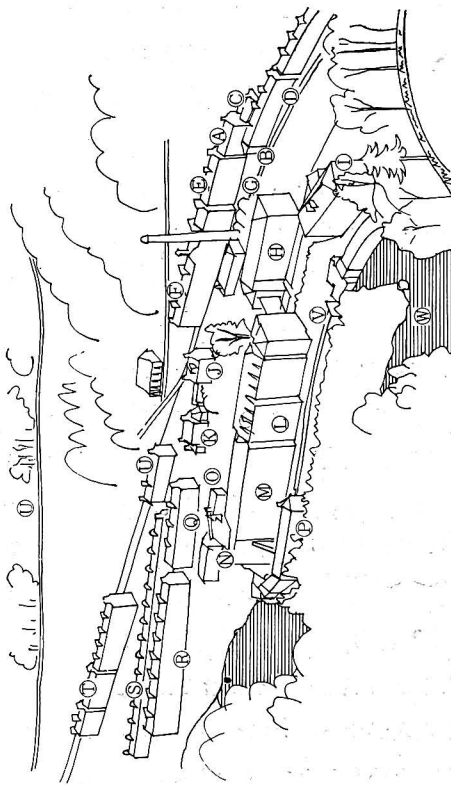


1. New Lanark today

(図 No.2) ニュー・ラナークの近況 (空中写真)

from J.F.C. Harrison, *Robert Owen and the Owenites in Britain and America*, p.21.





New Lanark 案内  
(写真説明)

- |                         |                       |
|-------------------------|-----------------------|
| ① 小学校                   | ④ 労働者住宅 (Brood Row)   |
| ② 管理者棟 (Owen の住んだ家)     | ⑤ 同 上 (同 上)           |
| ③ Dale の家               | ⑥ 同 上 (Long Row)      |
| ④ 第 4 工場                | ⑦ 同 上 (Braxfield Row) |
| ⑤ 第 3 工場                | ⑧ Lanark への道路         |
| ⑥ 第 2 工場                | ⑨ 水路                  |
| ⑦ 第 1 工場                | ⑩ クライド川               |
| ⑧ 綿花貯蔵倉および準備室           |                       |
| ⑨ 協同組合売店と郵便局            |                       |
| ⑩ 経理事務室                 |                       |
| ⑪ パン焼所                  |                       |
| ⑫ 労働者住宅 (Caithness Row) |                       |
| ⑬ 児童寮                   |                       |
| ⑭ New Buildings         |                       |
| ⑮ 広場                    |                       |
| ⑯ 性格形成学院                |                       |

クリートの建物群が眺められる。それは1784年に、この豊富な水量と滝の落差に着目し、自分の発明した水力紡績機の運転に利用しようと考えた Arkwright がグラスゴーの実業家 David Dale にすすめて共同経営のために建設した紡績工場と付属労働者住宅の今日の姿である。<sup>1)</sup> 今そこで灰色にくすんで静まりかえっている建物群は当時であってスコットランドで最新にして最大の綿紡績工場として活況を呈していたのである。

坂を下りきったところにこのニュー・ラナークの中心の広場がある。今ではここがバスの終点で、わずかな数のバスがラナークやグラスゴーと結んでいるだけで人々や車の影は少ない。それは170年前にこの工場村の経営をひきうけた若いオーエンが彼の Village of Co-operation の建設に情熱を注ぐにふさわしい、閉ざされた谷間の別天地であった。(図 No.2)

オーエンがここで経営者として活躍した最盛期には四つの工場で働く労働者の数は1,500~1,600人(そのうち3分の2は女工)で、その家族たちを合わせると総数2,000人を越えていたという。<sup>2)</sup> しかしつい1968年までは部分的にレース紡織に利用されていたという工場も私が訪れたときにはその機能をすでに停止していて往時の活況をしのぶべくもない。

1780年代に建てられた四階建の労働者住宅群は今日の日本の住宅公団のアパート群を連想させるような陰うつな四階建てのコンクリートもしくはレンガ造りの建物であるが、そのうちの約8分の1が1963年以降この地の The New Lanark Association Limited の手で内部が改造され住居として再生されている。<sup>3)</sup>

広場の入口から左手には谷間への傾斜面に沿って広場に面する四階と三階の三棟の建物が並んでいる。そのうちの一番手前の四階建の建物の屋上には古風な鐘楼がついている。そのうちの三階建の建物一番奥の一階には広場に面して雑貨屋と郵便局を兼ねた協同組合の店があってドアを開けて呼鈴を振ると奥から店番らしい若い婦人があらわれる。この村での唯一の売店らしいこの店にもオーエン関係の資料はとくに置いていない。わずかにニュー・ラナークの建物のかなり前の姿を写したと思われる絵はがきが数種類置いてあるだけである。(図 No.3, 7)

この店の婦人の話では村には特別な案内人もないがすぐ軒つづきの部屋に住んでいるギブスンさん (Mr. W.J. Gibson) という老人がオーエンについてもこの村についても随一の物知りで頼めば案内もしてくれようということであった。

町に出かけていたギブスンさんを待つ間、再び広場に立って気がついたことは、この売店のある建物の中央の入口の上に銅板がはめてあって、その表面に、ここがロバ

ート・オーエンが最初に協同組合の店 (Co-operative Store) を開いた場所であり、イギリスの協同組合運動の発祥の地である旨が刻まれていた。

Manchester 時代のフランス啓蒙思想や Locke, Bentham などからの影響と自らの体験と思索によってオーエンは人間の性格は自らのためにつくるのではなく環境によってつくられると信じていたから、彼はこのニュー・ラナークの工場村の経営をひきうけると鋭意住民の環境の改善にとりかかっている。その成功に支えられて彼の確信はますます強まりオーエンのこの見解はやがて1813年～1814年に彼の論文“A New View of Society; Essays on the Principle of the Formation of the Human Character, and the Application of the Principle to Practice” のなかで定式化される。オーエンの協同組合小売店の創設はその具体化の一つであった。

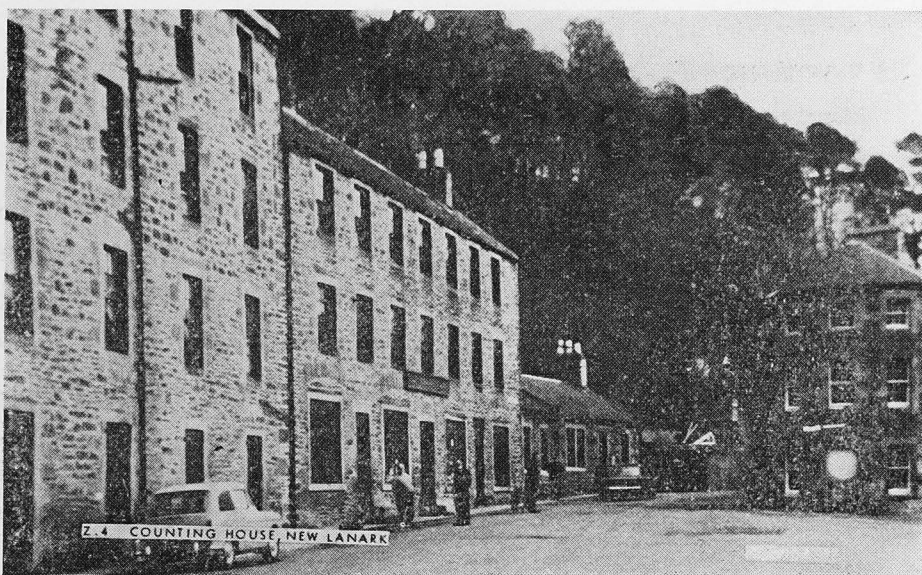
オーエンがその自伝の中で記しているように、この工場村の創始者 Dale が工場の操業のために集めた労働者はその多くが教区から送られた救貧院の収容者やその児童やハイランド地方の農村からの移住者たちであって、生活上の規律や自律性に乏しく、それに加えて悪徳商人による暴利や粗悪品によって労働者やその家族たちの生活は貧しく、不潔で借金や飲酒、窃盗などの犯罪や性的な退廃が支配していたという。オーエンは彼らに呼びかけて彼らの労働と生活の規律再建をめざしたが、当初オーエンの呼びかけにすぐに応ずる村人はほとんどなかったという。彼らは従来の体験から疑い深くなっていて、このよそ者（オーエンはウェールズの出身であった）で新来の経営者が単に目新しい方法で彼らを搾取しようと企んでいるのであろうと不信の目を向けるだけであった。

オーエンがこの村につくった協同組合とその売店はこのような当初の状況を打開するのにまことに効果的であった。彼はその経験を自伝の中で誇らし気に記している。

「私は立派な店を設け、そこから彼らに必要な食物、衣類等々一切の商品を供給することにした。私はすべての物品を第一級市場で現金で買い、薪炭、牛乳等々を大規模に契約し、最良の品質のこれらの商品の全部をば原価で人びとに供給した。この変革の結果は、彼らが従来それよりほか得られなかった最も粗悪な物品の代りに、すべてのもののうちで最も良い質の物を彼らに与えた上に、彼らの経費を25パーセントたっぷり節約させることとなった。

その効果はじきに目に見え、彼らの健康は改良され、衣類もよくなってき、彼らの家々は一般に住みよくなった。この方法はまた私に対する彼らの偏見を弱めるのに力があった」<sup>4)</sup>

オーエンが厳密な意味でこのような協同組合方式の売店のイギリスでの創始者とい



(図 No.3) ニュー・ラナークの広場。(筆者がニュー・ラナークで1970年9月12に購入した絵はがき) 右が Counting House, 左は手前から Nursery Buildings, Co-operative Store, 奥が Bakehouse, (Copy Right Smith). 下の写真は改修された近況.

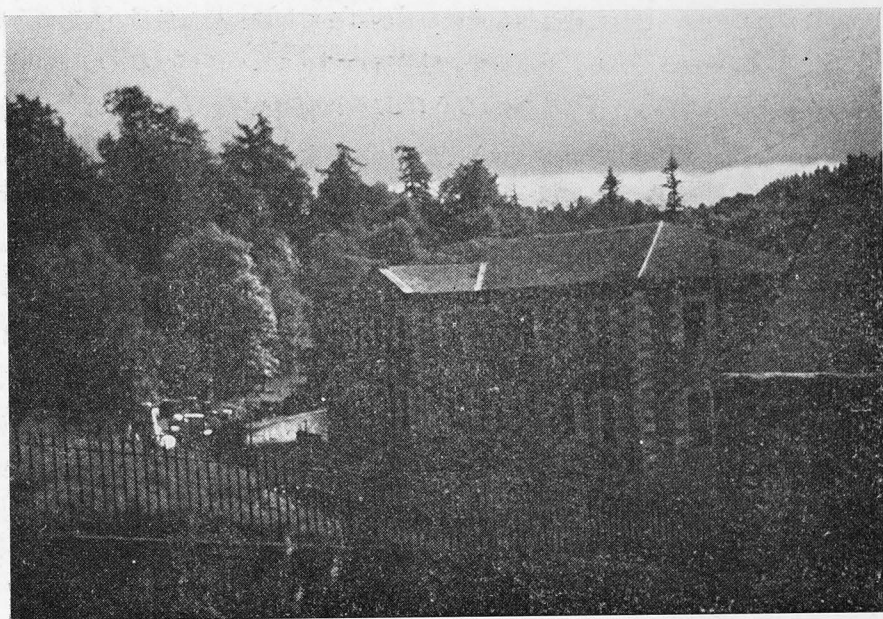


(図 No.4) ニュー・ラナークの広場と住宅

手前の建物入口が協同組合売店の入口。その上にロバート・オーエンがここで協同組合運動をはじめたという記念銘がかかげられている。(1970年9月7日筆者撮影)



(図 No.5) ニュー・ラナークの旧労働者街から広場の方向を望む。  
(1970年9月7日筆者撮影)



(図 No.6) ニュー・ラナークの学校の建物  
(1970年9月7日筆者撮影)





(図 No.7) ニュー・ラナーク労働者住宅と工場

(筆者が1970年9月、ニュー・ラナークで購入した絵はがき。Copy Right Smith)

えるかどうかについては今日異論がある。しかし、彼がこのような協同組合の試みを新しい社会のための原理として社会的な運動の目的にまで発展させた最初の人物であることはひろく認められている。ナポレオン戦争後のイギリスの深刻の不況のなかで、1817年3月に彼が議会の救貧委員会宛に提出したかの有名な『オーエン氏のプラン』はこの協同村 (Village of Co-operation) を全国に創設すべしという提案であった。<sup>5)</sup>

しばらく待つうちにバスが着いて目ざすギブスンさんが現われた。彼はいかにも職人あがりといった感じの小柄な老人であった。来意を告げて案内を乞うと彼ははじめ紹介状も持たないこの意外な来訪者に戸惑っている様子だったが、オーエンの研究のために日本から訪れた学生だと聞くと快くひきうけてくれた。ギブスンさんの話では彼自身は目下退職して年金生活者としてこのニュー・ラナークに住んでいるが、もともとは工場労働者で若い頃にオーエンの著作を読んでその思想に心酔し、それ以来働きながらオーエンについて学び、資料を集めてきたのだという。そして、退職後は老後の生活の場をわざわざこのニュー・ラナークにもとめて、改造された建物のなかに住んでいるとのことであった (改造された部屋は昔と違って三部屋を単位としてフラットとして使っているという)。私は今ではすっかりしずまり返っているこのオーエンの村になおオーエンをしのんで生きているこの老人に会ってなになにつかしい思いがしたのである。

ギブスンさんは先刻私が訪れた Co-operative Store のいわれについて説明してくれたあと、その建物につながる平屋がかつての Co-operative のパン焼場であり、その右側の奥の斜面に離れてある石造の小屋は食肉用の屠殺場であったと話してくれた。

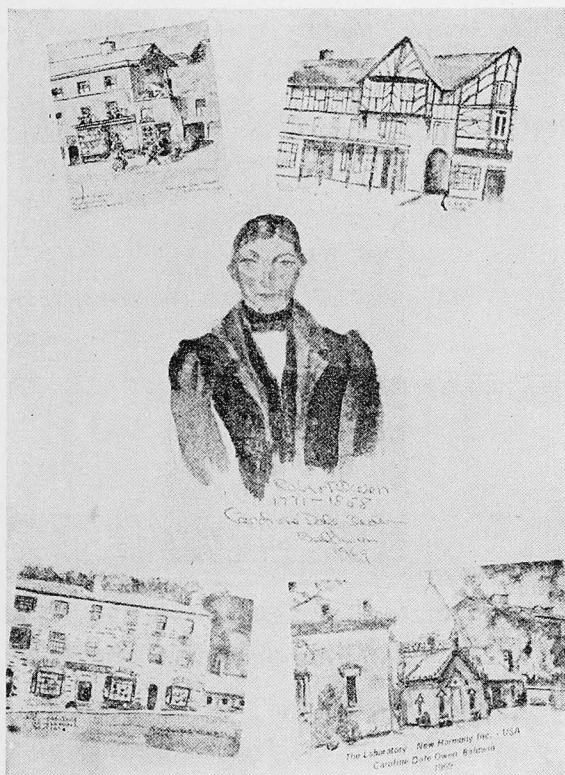
村の入口から広場に入った時に正面に広場を見下すように突き出しているやや丸みをもった三階建のレンガ造りの建物が見える。それは谷と平行してさらに奥に連なる建物の一端であった。ケイスネス・ロー (Caithness Row) と呼ばれるこの長屋はハイランドからの移住労働者を収容した建物で、広場に面した丸みのある部分がかつての計理事務所 (Counting house) となっていてオーエンの執務室として使われたところだという。そこに案内されて二階の窓から眺めると、正面の広場はもちろん、そのまわりの建物や工場などが手にとるように見える。(図 No.3~No.6)

その形からいっても司令室といった感じのするこの執務室でオーエンは約20年にわたってこの村の管理事務をとったのである。それはオーエン自身の言葉を借りるならば管理というより“統治”(government)と呼んだ方が適切なものであった。<sup>6)</sup> 事実、オーエンのこの工場村での管理は多くの点で上からの指導と改革の事業であった。彼は工場の施設や運営の方式のみならずここに住み働く人々の生活環境とその意識までを自己の信念に従って大きく変革しようと試みたのである。

私にはオーエンの執務室はせいぜい12畳くらいの広さに思われた。最近、壁などを塗り変えた以外に補修も加えたのでオーエンの時代とは多少様子は変わっているとのことではあったが、それでもオーエンが使った暖炉は残されていたし、古風な窓や天井の造りは往時をしのばせるものがあった。壁際には幾つかの黒塗りの椅子が無造作に並べてあったが、そのうちの塗りのない古風な椅子がオーエン自身が使っていた椅子だということであった。それはいかにも社会改革家・実務家オーエンにふさわしい飾り気のない実用的な椅子であった。

ギブスンさんの話では、彼をはじめこの村の New Lanark Association Limited の人々によって、この部屋を将来オーエンの記念室にしようという試みがあり、目下準備中なのだが資金不足ではかばかしく進行していないとのことであった。部屋の中央のテーブルの上にはオーエン生誕 200 年記念協会の準備委員会による入会案内や記念祭に備えて全国を遊説中のオーエンの玄孫の Mrs. Baldwin によるオーエンの肖像とそのゆかりの地を描いたほほえましいスケッチの複製プリント(図 No. 8)などが New Lanark Association の募金用の鉛筆やボールペンといっしょに並べられていた。

テーブルと並んで立っている掲示板形式のガラス・ケースにはオーエンにちなんだ幾つかの絵図や品物が展示されていた。その一つは、ケースの横に無造作にひもで下



(図 No.8) ロバート・オーエンの玄孫、Mrs. Baldwin が描いたオーエンの肖像とゆかりの地。左上、ウェールズの Newtown にあるオーエンの生家。右上、Newtown の Bear Hotel, オーエンが1858年に死去した場所。左下、New Lanark の Co-operative Store. 右下、アメリカ、インディアナ州の New Harmony の実験室

げられている木製の三角錐で白と青の二色にペンキで塗り分けられている。これがオーエンがニュー・ラナークの工場で労働者の勤務評定に当って用いた彼の自慢の「口きかぬ評定者 (silent monitor)」<sup>7)</sup> の模型であった。オーエンの自伝の中ではそれは四つの側面をもっていてそれぞれが黒、青、黄、白の四色に塗り分けられており、職場の各労働者の近くに下げられていて監督者がそれぞれの労働者のその日の勤務状況をその色で表示するようになっていたはずであった。ギブスンさんの模型は資金不足で四面を青と白の二色で塗り分けるにとどまっているのだという。オーエンによればこの silent monitor の

採用によって各職場の労働者が自己評定の訓練を受けることができたし（監督の表示する評定に不満がある時は労働者には上訴する権利がある）生産の向上に役立ったという。オーエンは各労働者の色彩別の勤務評定を毎日記録し、その記録を2ヵ月毎にまとめて保存して労務管理の参考にしたという。それは従来とは違った労働規律を工場の中にもたらした。

暖炉の右側の横の壁にははめ込み式の戸棚があって、扉をひらくと中は板で区分けされた書類棚になっている。多分、当時の帳簿類も労働者の勤務評定資料もこの棚の中に収められていたのであろう。社会改革の事業に半生を捧げながら、オーエンはこの New Lanark においてはなによりもまず有能な工場経営者でなければならなかつ



た。事実彼はここでさまざまな改革や実験をくりかえしながら一方では終始経営者としての確実な利益をあげて、出費者たちに配当を実現していた。それ故にこそ経済学者の D. Ricardo はじめ政治家や資本家たちもオーエンの発言には当時まじめに耳を傾けざるを得なかったのである。オーエンのここでの経営の実績を示す帳簿類は今日ほとんど散逸していて極くわずかな資料しか利用できないとのことであるが、それでも最近の研究者たちによってその経営ぶりが推測されている。<sup>8)</sup> もともと一介の年奉公者として育ち、自力でこのスコットランドで最大の紡績工場の経営者にのし上ったオーエンは実務家としてなかなか抜目ない人物であったことが明らかになっている。彼は工場経営のために必要な資金の調達にはかなり強引と思われる方法をとって共同出資者たちと争ったりしたが、その際の彼の立場は必ずしも彼の自叙伝で描かれているような常に正しいものではなかったようである。<sup>9)</sup>

一方で博愛主義的な経営者として労働者たちに臨みながら、他方では産業革命期の激しい経営競争の中での成功を目指すオーエンには常に矛盾する二つの側面があったといえよう。またその矛盾を背負いながら彼が新しい人間や社会の在り方を示そうと苦闘したニュー・ラナークでの1815年から1824年の間の労作が彼のぼう大な著作のなかでも最も実り豊かな内容をもっているといわれるのである。

〔注〕

1. cf. J.R.Hume, "The Industrial Archaeology of New Lanark," in J. Butt, ed. *Robert Owen, Prince of Cotton Spinners*, Newton Abbot 1971, pp.215~218.
2. J. Butt は最近の研究ではニュー・ラナークでの1810年6月9日現在、雇用者総数1,386人でそのうち男479人、女907人。1811年6月29日の国勢調査では村の総家族数380家族、総人口2,177人そのうち男864人、女1,313人となっている。1816年にはオーエンの会社で働いていた人員は1,500~1,600人という。  
J. Butt, "Robert Owen as a Businessman," in J. Butt, ed. *op. cit.* p.192.
3. Ch. Harvice, "Decay at New Lanark" *Tribune*, May 7. 1971. p.7.
4. R. Owen, *Life*, p. 63.  
五島茂訳「ロバート・オーエン自叙伝」p.121.
5. R. Owen, "Report to the Committee for the Relief of the Manufacturing Poor." 1817, in G.D.H. Cole ed. *op. cit.* pp.156~169.  
渡辺義晴訳、「社会変革と教育」pp.72~87. 所収  
オーエンの「プラン」に対する "Radicals" の反応は否定的であったという。cf. E.P. Thompson, *The Making of the English Working Class*, 1968, p.861.  
オーエンのコミュニティ計画については工学院大学二部学科連合機関誌「学科連合」1971年第3号所収の拙稿「ロバート・オーエンとコミュニティ計画」参照。
6. オーエンはその自叙伝のなかでニュー・ラナークの経営にあたった当初の抱負を次のように述べている。そこにオーエンのニュー・ラナークにおける博愛主義的経営者としての労働者

にたいする姿勢がよくあらわれている。

「敢えて“統治”という。——けだし私の意向は、紡績工場の単なる一支配人として、一般にこの種の工場が管理されていたようにそれをやってゆこうとするのではない。むしろすでに私がドリンクウォーター工場ではじめて工員たちに試みて成功したあの諸原理を、この人人にもみちびきいれようとするものである。

私のみるところでは、ニュー・ラナーク全体の人々の性格の上に有害な影響を与えるごとき境遇に包まれている人々の状態を一変させようとするにあったのだから。」 R. Owen, *Life*, p. 56-57. 五島茂訳 p.110.

7. R. Owen, *Life*, p. 80.

このオーエンの silent monitor は A.J. Robertson の最近の指摘によればオーエンの発明とはいえず、すでに1740年頃から他の経営者たちによって同種のものが使われていたという。A.J. Robertson “Robert Owen, Cotton Spinner: New Lanark”, in S. Pollard & J. Salt ed. *Robert Owen, Prophet of the Poor*. Bristol, 1971, p.153.

M. Cole 女史はそのオーエン伝のなかでこの勤務評定方式からソ連における第一次五ヵ年計画期の工場における労務管理方式を連想している。M. Cole, *op. cit.* p.57.

8. J. Butt, *op. cit.* pp.208~213.

9. J. Butt 教授の上掲の最近の論文“ビジネス・マンとしてのロバート・オーエン”はこのようなオーエンの経営の内容を明らかにして、従来の博愛主義者もしくは社会主義者としてのオーエンとは違った彼の一面を提示している。そのなかでオーエンと出費者 A. Campbell との金銭的なトラブルやオーエンが解雇した工場監督の R. Humphreys との不払い給与をめぐる争いと敗訴などに当時のニュー・ラナークにおけるオーエンの経営者としてのリアルな姿をうかがうことができる。

cf. J. Butt, *op. cit.* pp.169~187.

前出の A.J. Robertson の論文“ロバート・オーエン綿紡績業者：ニュー・ラナーク，1800—1825”も経営者としてのオーエンの側面を描き出した新しい研究である。

### (3) ニュー・ラナークと児童労働

オーエンの旧執務室の壁にはオーエンの肖像画とともにこのニュー・ラナーク工場村の創始者であり、オーエンの岳父であった David Dale の肖像がかかっていた。オーエンがこの工場の買い取りを交渉するために当時グラスゴウの市長であった Dale に会ったのは1798年でオーエンがまだ27才の時であった。オーエンはこの工場村の買いとりに成功したばかりでなく、Daleの長女 Anne Carolinneの心をとらえて、翌年には Daleの邸で盛大な結婚式を挙げている。

広場から労働者住宅街に向かう道に沿って建っている二軒の石造りの二階家のうちの手前の一つは工場のマネージャー用の家で奥の一軒の家は Dale や家族が夏期を過ごすために来村するときに使ったものだという。いずれもごく普通の大きさの独立家屋で、オーエンは家族が増えて手ぜまになり近くの Braxfield Houseに移転するまで8

年間このマネジャー用の家に住んでいたという。今でもその前に立つと結婚当初から村の中心の広場の近くこの建物に新居を構え、それと向かい合った執務室に陣取って新らしいコミュニティーの経営にうち込んだオーエンの意気込みが感らじれる。

ギブスンさんの説明でさきほど見た広場に面した鐘楼つきの建物の隣りの四階建の建物はかつてこの工場で働かされていた幼児たちを収容したり、あるいは初期の保育所として使われたのであろう Nursery Building と呼ばれていることも知った<sup>1)</sup>。この鐘楼つきの建物は、Daleが宗教上のあつまりなどに用いたということである。当時その鐘の音はこの谷間の村に鳴りわたったのであろう。

もともとオーエンの岳父 Dale はこの地方では信仰心の厚い慈善家として知られる実業家でこのニュー・ラナークにおける経営でも他の紡績工場にくらべて労働者の待遇にはかなり人道的な配慮をしていたといわれる。当時の記録のなかにはオーエン自身の証言をふくめてそれを裏づけるものがある<sup>2)</sup>。しかし、それはあくまで産業革命期のイギリスの綿紡績工業における苛酷を極めた労働条件の中で比較的ましであったということにすぎないようである。

先刻ギブスンさんが案内してくれたオーエンの執務室の片隅には二、三個のひどく錆びた鉄製ランプが置かれていたが、ギブスンさんはそれを手にしながら、それらが昔この村の工場でつかわれていたランプであると説明した。最近、ここの学校の屋根の修理の際に屋根裏から発見されたものだという。このランプは当時綿紡績工場の中でひろく照明のために使われていたということであるが、ギブスンさんの説明によると、これは燃焼に当ってガスと熱を発生して、それがたださえ作業のために閉めきって高温を保っている工場で、綿ぼこりとあいまって働く人々、とりわけ児童の呼吸器を侵した。そのため、当時のイギリスにおける綿紡績業での就業児童たちの死亡率は信じ難い程高率であったという。

イギリスの産業革命がもたらした幼児労働という悲惨な現象についての実態は当時の記録や資料によって確められる<sup>3)</sup>。オーエン自身はこの産業革命期の経営者でありながらこのような犠牲にもっとも心をいため、彼らの救済のために児童労働の禁止の立法化のために先駆的な努力を重ねたのである。今日、オーエンの生地であるウェールズの Newtownの町にあるオーエンの記念像（1956年除幕。本稿、III. 5 および図 No. 18を参照）はオーエンの当時のこの業績を讃えて、彼が破衣をまとった一人の幼児労働者にやさしく手をさしのべた姿をかたどっている。

オーエンが Dale からニュー・ラナークの経営をひきついだ当時のこの村での児童

労働の実情はその後オーエン自身が議会での証言のなかで述べている。その証言によれば、主として Edinburgh の貧困家庭から集められた 5,6才から 7,8才までの子供たち500人ほどが教区徒弟として収容されていて、彼らには 1 時間半の食事時間を含めて 1 日13時間の工場での労働が課せられていた。その結果、表面的な観察では気づかれないが、彼らの心も体もひどく成長を阻害されていたという。そのうえ Dale の慈善家の配慮で子供たちには 6 時からの夕食後、夜の 9 時までの学習時間が設けられていた。昼間の労働で疲労している児童にとっては主として牧師によるその旧式の教育法とあいまって学習効果はあがらないのみか彼らにとってかえって苦痛の種であったという<sup>4)</sup>。

オーエンはニュー・ラナークの経営をひきつぐと、そこでの人々の生活の一新をはかってさまざまな改革にとりくんだが、とくに12才以下の児童の就業の廃止を目ざし、1816年からはとりあえず、10才以下の児童についてこれを実施した。同時にこの児童たちに従来の激しい労働に代えて就学の義務を課し彼らの健康と知識の増進をはかったのであった。また彼の工場での全労働時間を 1 日10時間45分に短縮した。それは当時において前例のない画期的な改革であった。

オーエンはこのような労働条件の改善をニュー・ラナークにおける実験にとどめるつもりはなかった。彼はそれをさらにイギリス全体におしひろげる改革の手はじめと考えていた。

1815年 Glasgow でひらかれたスコットランドの綿糸製造業者の大会でオーエンは政府にたいする原料棉花輸入税の免除に関する請願とともに綿紡績工業における労働者の労働時間を 1 日12時間以内に短縮することをふくめた労働条件の改善、とりわけ就業児童の年齢を12才以上に制限することや彼らに国庫の負担で教育を与えることなどについての立法要請の決議案をとりあげるように提案した。しかし、大会に集っていた綿業者たちはオーエンの提案のうち輸入原棉への免税要請決議案には熱狂的に賛同しながら、労働者の救済に関する第二の決議案にはほとんど関心を示さなかった。

労働者の就業条件や生活の改善が単に労働者にとってのみならず、同時に経営者たちにとっても好結果を生むことをオーエンは自らの経営者としての体験を通じて確信していた。彼はそれを「生ける機械 living machine」への配慮にさえたとしてその必要を説き、それが確実な利潤の増大に結びつくことを保障することも忘れなかった。しかし、この時期からのオーエンの工場法改正のための活動にはそのような経営者的な配慮をしのぐ戦闘的なヒューマニストとしての性格が目立ちはじめている。綿業者たちに労働者の労働条件の改善についての立法要請決議案を提案するに当ってオーエ

ンはその決意を次のように語っている。

「私はわが国の綿業や政治的優越性とがそれらを支える手段である人々の生命にとって価値あるすべてのものの犠牲によって維持さるべきであるというくらいならば、むしろ綿工業やわが国の政治的優越ささえも滅ぼせというのをためらいません。」<sup>5)</sup>

オーエンは彼のこの提案が多数によって否決された後に、綿業者たちにむかって「自分はどちらの件についても諸君とは独自に自分自身のコースをとるであろう」<sup>6)</sup>と語ったという。

〔注〕

1. J.R.Humeの最近の研究によれば、このニュー・ラナークでの就業児童は Daleの時代には主として第三工場の建物の中に収容されて生活していたようでその収容人数だけで275人におよんでいる。その後、オーエンはこの広場に面した四階建の建物を建て、Nursery Building (児童館)と呼んだようであるが、実際どのくらいの数の子どもたちがここに住んだのかははっきりした数はあきらかではない。  
cf. J. R. Hume, "The Industrial Archaeology of New Lanarke." in J. Butt, ed. *Robert Owen, Prince of Cotton Spinners*, 1971.
2. "Mr. Dale's Apprentices" in E.Royston Pike, *Human Documents of the Industrial Revolution in Britain*. London, 1966. pp.90~91.
3. オーエン自身が1817年の彼の公開論文 "Observations on the Effect of the Manufacturing System" のなかで彼がイングランドとスコットランドで視察した綿紡績工場における児童労働の実状について報告している。(渡辺義晴訳、「社会変革と教育」の中にその邦訳が収められている)。

オーエンのこの視察旅行に同道した長男の Robert Dale Owenはその自叙伝のなかでこの時の自分の観察について記録している。

「予備的な処理として(オーエン自身がこの問題を議会に訴えるための……訳者)われわれはグレイト・ブリテンにある主な工場をすべて訪れた。われわれがあつめた諸事実は私にはほとんど信じ難いほどに怖ろしくおもわれた。例外としてではなく、一般に10才の子供が工場のなかでとる昼食のためのわずか半時間の休憩をふくんで正規に1日14時間も働いているのを見た。(傍点,R.D.Owen)

(1ポンドあたり120から300束を生産する)細綿糸工場では、彼らは通常75度を越える温度のなかでの労働に従事させられていた。そして、すべての綿紡績工場で、そこに充満しているほろりとこまかい綿の繊維のために彼らは多かれ少なかれ肺に悪い空気を吸っていた。ある場合など、われわれは利得への強慾が工場主たちを文明国にとって実に恥すべき一層すさまじい非人間性の極致にまで追いやっているのを見た。彼らの工場では1人が1日15時間、例外的な場合には16時間も働かされていた。そして、彼らは良心にはじることもなく8才からの男女児童を雇っていた。われわれは実際にはそれ以下の児童をかなり見つけた。

そのような制度が管刑なしに維持できないことはいうまでもない。ほとんどの監督が太い革製の鞭を公然ともち歩いていたし、われわれは一番幼い児童までがひどく打たれているのを見れば見た。

.....

幾つかの大工場では過度の苦役と時には野暮な取り扱いによって児童の4分の1から5分の1が不具かもしくは奇形、またはいつも負傷していた。比較的幼い児童でしばしば死にいたるようなひどい病気をしないで3,4年以上も過ごせているものはまれであった。」

R.D. Owen, *Threading My Way. Twenty-Seven years of Autobiography*. London, 1874. pp.101~102.

なお、前掲の E.R.Pikeの資料集には“Child Labour”(pp.75~218)の章に産業革命期のイギリスの工場や鉱山における児童労働の実態についての当時の記録が収録されている。

4. E.R.Pike, *op.cit.* pp.108~110.
5. M. Cole, *Robert Owen of Lanark*, p.96.
6. R. Owen. *Life*, p. 114.

#### (4) ニュー・ラナークの性格形成学院とオーエンの教育活動

ニュー・ラナークの広場をはさんで児童館の建物と向かい合ってクライド川の側に建っている古典的スタイルの三階建の建物がオーエンの創立した有名な性格形成学院 The Institute for the Formation of Character であった。苛酷な長時間労働から解放された10才以下の児童は新しい希望と不安をもって彼らの宿舎からこの性格形成学院やその左側の奥に見える小学校に通ったのであろう。

オーエンはこの村ではやくから幼児教育を計画して満1才から5才までの幼児を收容して教育したといわれる。それはイギリスにおける幼児教育運動のはじまりと考えられている。当時、村の工場で働いている両親にとってそれは一種の託児所としての役割をも果たしたのである<sup>1)</sup>。オーエンにとってはそれは工場に必要な婦人労働力を増加させる方法であるだけでなく、できるだけ早い時期に幼児にたいして彼の性格形成論にもとづいて新しい素質と能力をもった人間形成を試みる実験の場であった。

彼が幼児教育をふくめた本格的な教育施設としての性格形成学院の建設を計画したのは1809年だといわれる。その意図に沿って村の中央の広場に面して3階建ての学院の建物が完成したのは1816年であった。当時それは村人の新しい共同生活のセンターとしての意味をもっていて、建物の中には売店や共同炊事場や教室や礼拝室なども含み、その一階の一室が幼児教育のために当てられていた。しかも、その運営は協同組合売店の利益でまかなわれた。

1816年1月1日、この性格形成学院の開院式に当たってオーエンが1200人の聴衆を前に行った有名な演説“An Address to the Inhabitants of New Lanark”の冒頭で彼はこの学院の創立の目的について次のように述べている。

「第一の目的は、この地方の全住民の直接的な幸福と利益を、第二の目的は、近隣の地方に住む人びとの福祉と利益を、第三の目的は、英国の領土全体にわたる広汎な改良を、最後の目的は世界中のあらゆる国民の漸次的改善をめざしている」<sup>2)</sup>

オーエンがこの学院を中心に行った教育活動は幼児教育から夕方の成人教育をふくめて当時としては極めて革新的なアイデアに充ちていた。イギリスでの伝統的な宗教教育や家庭教育からの影響を極力排して、それに代って、彼が人間の正しい本性とみなしていた友愛と協同の原理を教育の基礎に導入することが試みられた。そこでは一切の伝統的体罰や強制が廃止されて、教師は児童たちの自己体験や創意や相互扶助の精神を尊重し、学童たちに接するに当ってはその表情や言葉づかいにいたるまで親切さを徹底させるように求められた。

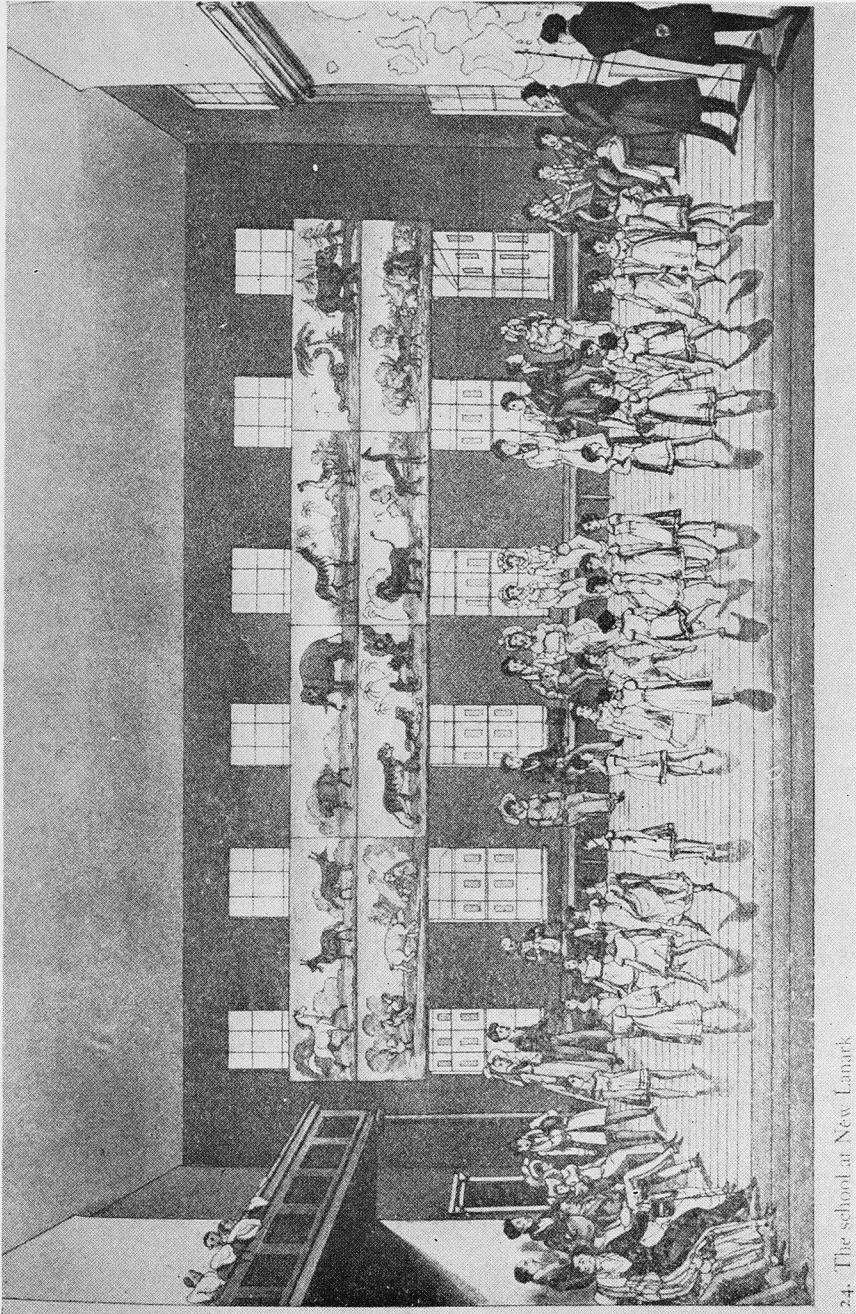
オーエン自身が巧みであったダンスをはじめ音楽や演劇や教練などが学校教育のなかで重要な役割をもつようになった。そのため学童の服装なども従来のしきたりから解放されて、彼らは伝統的なスコットランドの Kilts や古代ローマ風の Tunics をはいたいかにも身軽な姿で歌ったり、ダンスを楽しむように配慮された。このように、オーエンが当時採用した教育方法は驚くほど伝統的教育から自由で、合理主義的教育理念になかったものであった。たとえば彼は実物教育を重視して各種の標本や模型や絵図を利用した。それは今日の教育方法の先駆ともいうべきものであった。

先にギブスンさんが案内してくれたオーエンの執務室のショー・ケースの中にはかつてこの村での教育活動に熱心に参加したオーエンの妻 Anne Caroline が自ら織った幼児教育用の壁かけがあった。その表面には草花や家屋や自然の景観がししゅうさされていて、その縁にはアルファベットや数字が縫いとられていた（そのうち9の数字は省かれていて、ギブスンさんの説明では6の数字をさかさにして代用したのだということであった）。

これらの新らしい教育方法によってオーエンは学童に合理的に思考し、行動することを教えようと意図していた。そして、彼自身が誇っているように、このスコットランドの一村落に当時としてはイギリスのみならず、世界でもっとも進んだ初等教育体系を実現することに成功したのであった<sup>3)</sup>。

オーエンの工場経営や学校の名声がひろがるにつれて、このニュー・ラナークにはヨーロッパ各国からの来訪者たちが相次いで、その数は10年間に20,000人にも達したと記録されている。これらの内外の名士たちの前でオーエンの学校の学童たちはいかにも自然に彼らのダンスや合唱や演奏を披露して見学者たちを感服させたという。(図





24. The school at New Lanark

(図 No. 9) ニュー・ラナークのロバート・オーエンの学校における学童のダンスと見学する人々。  
壁面には教育用の絵図や地図が見える(当時のスケッチによる)。From J.F.C. Harrison, *op. cit.* p.181.



No.9)

性格形成学院の建物の正面には石柱の並んだ玄関の突出があり、その前は小さなブレイ・グラウンドになっている。ギブスンさんはそのグラウンドを指して、かつてロシアの皇帝ニコライ一世がこの村を訪れた時に、オーエンはその玄関に席を設けて学童たちのダンスを披露したものだと言った。正確には、当時のニコライはまだ皇帝ではなくて大公の位にあったのだが、いずれにせよその彼までがこの地に来訪したということは当時いかにオーエンの活動が有名になっていたかを物語っている<sup>4)</sup>。

この未来のロシアの専制君主はこの村でもいろいろなエピソードを残している。その一つは彼がオーエンにむかってイギリスの過剰人口 200 万人を移民として率いてロシアに渡り、そこで紡績工業を起こすようにとすすめたという話である<sup>5)</sup>。このニコライの来訪の件についてはオーエン自身がその自伝のなかでふれているが、それは 1852 年、Sevenoaks に晩年のオーエンを訪れたゲルツェンとの間でも話題にのぼったことであった。オーエンはその頃でもまだニコライの申し出を彼の事業へのロシアの皇帝の共鳴の証しとして信じている様子だったが、ゲルツェンはニコライがおよそオーエンの事業の意義を理解できるような人物ではなかったと答えている<sup>6)</sup>。ロシアにおけるオーエンへの真の理解者はむしろ、ニコライ一世の圧制下に育ったこのゲルツェンやドブロリューボフなどの急進的な民主主義者たちであったといえる<sup>7)</sup>。

オーエンの性格形成学院を中心とする革新的な教育活動は多くの識者の注目を集め、その影響がひろがった反面、伝統的な教会の教育方法に反するものとして宗教家を中心とした人々からの根強い反対も呼び起した。とりわけオーエンの教育方針について反対したのは有力な共同出資者の一人、クエーカー教徒の William Allen であった。彼はダンスと音楽と軍事教練を児童の教育にとり入れることが彼の宗教的見地からして認め難いとその廃止を強硬に要求した。オーエンはニュー・ラナークの経営に関しては経営を任された一出費者にすぎなかったから結局は Allen の要求に屈して、やがて性格学院の運営からも、また工場の経営からも身をひかざるを得なくなるのである。1824 年にオーエンはニュー・ラナークを去り、翌年自分の理想をより完全な形で実現すべく New Harmony の共産制コロニーの建設のためにアメリカ合衆国に渡っている。

オーエンが去ったあとのニュー・ラナークはその偉大な指導者を失って急速に相貌を変えられていったが、この性格形成学院の建物は 1968 年に閉鎖されるまで、村人の売店やレクリエーション・センターとして利用されていたという<sup>8)</sup>。またオーエンの影響はかなり後までこの村の小学校のなかには残っていたという。性格形成学院の

裏手から川沿いの上手に向かう道端にあるレンガ造りの3階建の小学校(The School for Children)の建物は今ではすっかり荒廃して、危険なために立入りも禁止されていた。かつて村人たちが共同食堂として使ったという1階も、今日なお残っているという学童のダンスにあわせて楽器を鳴らした楽士たちの席のある2階のホールも見るすべもなかった。とくに屋根の傷みがひどく、私が訪れたあと9月の末にはその一部が大きく陥没した、と報ぜられている<sup>9)</sup>。(図 No.6)

〔注〕

1. 狭い谷間の村ニュー・ラナークでは限られた人口のなかからできる限り多くの働き手を得るために家庭の主婦を育児の束縛から解放することが必要であった。オーエンのニュー・ラナークにおける幼児院や小学校の開設がそのような経営上の利益につながっていたことを指摘したのは、J. Buttの前掲論文“Robert Owen as a businessman”(1971)、である。彼の研究によれば、この結果、ニュー・ラナークにおける労働者の賃金は資本の額にたいする一人当たりの賃金率としては同時代の他の工場における平均より低かったにもかかわらず、家族収入としては平均より高いという結果があらわれている。(ibid, p.190)
2. R. Owen, *A New View of Society and other writings*, G.D.H. Cole, ed. Everyman's Library, p.93.  
渡辺義晴訳、前掲書 p.9.
3. オーエンの性格形成学院における教育実践についての研究は少なくないが、M. Coleの *Robert Owen of New Lanark* (1953)の Ch.X “Owen at New Lanark” の3. Principles of Education, 4. The Schools in Practice および Ch.XII, ‘Address to New Lanark’ に詳しい。最新の研究としては次の論文が実証的な研究として有益である。M. Browning, “Owen as an educator” in J. Butt ed. *Robert Owen, Prince of Cotton Spinners*. (1971) pp.52-75.
4. ニコライ大公のニュー・ラナーク訪問についてはオーエンの息子の Robert Dale Owen もその回想記のなかで生々と描いている。  
R.D.Owen, *Threading My Way*, pp.115~120.  
当時のロシアは対ナポレオン戦争でのイギリスとの同盟国であり、ニコライは戦勝の年1815年からイギリスを訪問し、ニュー・ラナークには1816年に来訪した。オーエンもその家族たちもこの珍客のもてなしにはかなり気をつかったらしい。このニコライとの交流が役立ったのか、ニュー・ラナークの紡績工場の製品にとってロシアはよい市場となっている。今日、資料的に明らかになっている1819年から1823年までのこの工場からのロシアへの輸出のうち最盛期は1820年で、その総額は £92,205. 10s. 3dとなっている。(J. Butt, *op. cit.* p.210)
5. R. Owen, *Life*, p.46. 五島訳、pp.259~260.
6. A. Герцен, Полн. Собр. Соц. Том XI, стр.208.  
金子幸彦訳、ゲルツェン “過去と思索” II. p.351.
7. Н. Добролюбов, Роберт Оуэн и его попытки общественных реформ. 1859.  
19世紀ロシアの革命的民主主義者と呼ばれるドブロリューボフ(1836~1861)はオーエンの没した年にその追悼論文として上掲の論文を書き、翌年1859年に自らの編集する『Современник』誌に発表した。その中で彼はオーエンの社会改革への貢身的努力に深い敬意を表しているが、検閲を考慮して、その論調を柔げ、とくにニコライ一世のニュー・ラナーク訪問に

もふれている。論文の最後にオーエンの “Manifesto of Robert Owen, the Discoverer and Founder of the Rational System of Society, and of the Rational Religion, London, 1840. のロシア語訳を収めている。ドブロリユーボフの同志であったチェルヌィシエフスキー (Н. Г. чернышевский, 1828-1889) もその著作のなかでオーエンについてしばしば言及している。

8. J.R. Hume, “The Industrial Archaeology of New Lanark,” in Butt, *op. cit.*, p.226.
9. *Bulletin of the Robert Owen Bi-Centenary Association*, No.2, Dec. 1970, p.11.

#### (5) オーエンの「工場法案」と「衡平労働交換所」

オーエンの学校の建物と同じ川沿いには当時の4つの綿紡績工場が並んでいる。いずれも日本でいえば大ビルディングといえそうな6階建の建物であり産業革命という巨大な技術変革の象徴といった威容をとどめている。それは Dale が建設し、オーエンが継いでその名をたかめたが、オーエンの亡きあとも近年まで改造されて100年以上も働きつづけていたのである。クレイド川の水をひいてかつて9つの水車をまわした工場用の水路の水は今日でもなお豊富だが工場の活動は1968年以来止っている。私のがぞいた第三工場の中は往年のアークライトの水力紡績機はもちろんのこと、それに代った蒸気機関付きの機械もすでになく、うす暗く空虚な建物の中はラナークのある民間会社の製品の置場として倉庫代りに使用されていた。川下の方に伸びている労働者の住宅街の多くも廃屋になっていて、わずかに2、3の窓に住人の気配を感じるだけであった。(図 No.5)

たとえ spiritualism に傾いた晩年のオーエンのように過去の人々の声を聴くことはできないにせよ、今日なお往時の姿をとどめているこの谷間の工場村にたたずむ時にはかつてこの地で遂行されたオーエンのさまざまな活動を思い浮かべることができる。イギリスにおける工場法の発達のために果たした彼の努力はそのうちでも特記するべきものの一つであった。イギリスは工場法についてもヨーロッパにおける先駆的な国であるがオーエンの名は1819年の工場法の改正に直接結びついている。<sup>1)</sup>

1815年の Glasgow での綿紡績業者大会での紡績工場での労働条件の改善についての立法要請決議案が否決された後、オーエンはこの提案の内容をさらに練り上げて独自の「工場法案」をつくり、同じ年の6月に下院議員 Sir Robert Peel に託して議会に提出している。それは12才以下の児童の雇用禁止、18才以下の実務労働時間を10時間半に制限すること、未成年者の夜間就業禁止、雇用主の負担による就業後4年間の少年工への教育義務、工場監督官制度の創設などを内容とするものであった。<sup>2)</sup>

一方、オーエンはこの問題に関してひろく世論に訴えるために、その手はじめとし

てイングランドとスコットランドにおける主な綿紡績工場の実態調査に赴き、そのおそれるべき労働条件の実態について「工場制度の影響にかんする考察 (Observation on the Effect of the Manufacturing System)」<sup>3)</sup>と題する報告書をまとめて公表している。この時の自らの視察の結論として後にオーエンは当時の綿紡績工場での実情を「イギリスの工場の白人奴隷制」<sup>4)</sup>と呼び、それがアメリカや西印度諸島で彼が見た黒人の家庭奴隷よりもはるかにひどいものであったと記している。

オーエンのこの「工場法案」は議員たちのひきのばしにあって、結局その後4年間も空しく待たされたあげく、修正によって骨抜きにされたかたちで1819年に成立する。この法案の成立を待つ間にオーエンがいかにいらだたしい思いを重ね、議会にたいする失望をふかめたか、彼の自叙伝はその間の事情を刻明に記している。Glasgowの綿業者大会で経験した業者たちの反対に加えて、議会では古い社会体制と特権に固執するマルサス主義者や保守的な宗教界の指導者たちからのあくどい抵抗や妨害にあって、彼はあらためてこの問題についての自らのたたかいの決意をかためている。

オーエンはこの法案の成立を待つ間に直接世論に訴える試みとして1817年の夏にロンドンの中心地にある大ホール The City of London Tavern で大公開演説会を開いた。そこで彼は工場法の必要のみならず、イギリスの戦後の不況を克服し当面の社会問題の根本的解決をはかる方法として彼の有名な「プラン」——協同組合の村 (Village of Co-operation) の全国的設置——を提案した。また、第二回の演説ではこのような彼の解決策の実現にとっての最大の障害として既存の宗教制度をあげ、教会人がはたしている社会的害悪を厳しく非難した。

この公開演説会はオーエン自身が認めているように彼の生涯における最も重大な行為の一つであり、彼の社会改革家としての重要な転換期というべきものであった。オーエンの伝記者でもある G.D.H. Cole 教授はこの年を「工場改革者ならびに教育上の先駆者としてのオーエンから社会主義と協同組合の祖としてのオーエンへの移行」の年とみなしている。<sup>5)</sup>

それまでオーエンには支配階級の中に多くの支持者があり、彼自身も専らそれらの有力者たちの協力を通じて自分の社会的理想を実現しようと計ってきた。しかし、この公開演説会における大胆な提案と教会批判は従来の支持者たちに衝撃を与え、オーエンは彼らの信頼と支持を失うようになった。それまでオーエンの見解に同情的であった有力紙 *The Times* もその態度を一変して、以後オーエンに関して一切とりあげようとはしなかった。しかし、この時期からオーエンは従来彼が期待もしていなかった中小資産階級や労働階級の指導者たちの間にあらたな共鳴者を見出すことにもな

り、ようやくたかまりつつあった彼らの運動に少なからぬ影響をおよぼしはじめるのである。オーエン自身がこのあたらしい支持者たちに注目しはじめ、これに働きかけようとしたことは彼が1819年に「労働者階級へのよびかけ (An Address to the Working Classes)」と題する論文を発表していることにもあらわれている。そのなかで、オーエンは自らの社会観や人間観を説明し、新しい社会制度の必要についての労働者の自覚と支配階級との窮局的な利益の一致を説いている。<sup>6)</sup>

1817年の公開演説会によってオーエンは支配階級の間で危険視されるようになったが、しかし、彼がその有力者たちの間での支持を決定的に失うようになるのは1820年に「ラナーク州への報告 (Report to the County of Lanark)」によって既存の社会体制への徹底的な批判者としての見解を示してからであったといわれる。そのなかの一節で彼は次のように産業革命期の社会的弊害の原因を生産機構の少数者による私的独占と結びつけて告発している。

「蒸気機関と紡績機械の導入は人間の力を非常に増大させました。これらの機械によって半世紀のあいだに、わが国の住民の生産力あるいは富をつくりだす手段は12倍以上になり、ひいては他国民の富をつくりだす手段も非常に増大させてやることになりました。

しかしながら、蒸気機関と紡績機械およびこれにさそわれてできた無数の発明は、社会にさまざまな害悪をおよぼしました。この害悪は圧倒的な大規模であり、いまでは機械の発明であげられた利益をまったく帳消しにしています。機械は富の一大集塊を創造し、これを少数者の手に専有させました。少数者はこんどはこの富の集塊を所有しているおかげで多数の勤労によってつくられた富を収奪しつつあるわけです。こんなわけで大衆はこれら独占家の無知と気まぐれの単なる奴隷となってしまう、ワットとアークライトが現われる以前よりもはるかにさげな惨めな状態になりました」<sup>7)</sup>

この短い引用のなかでもわかるように、オーエンは産業革命がもたらした人類の生産力の驚くべき増大について注目し、その点では貧困を不可避的な現象としてとらえるマルサス的なペシミズムには常に反対の立場をとりつつけていた。オーエンにとっては不況とそれにとまなう失業や貧困の問題はマルサスが説くような生産力の発展と人口増加の間のアンバランスがもたらす自然法則的な帰結ではなく、現存する強大な生産力が私的な独占のもとにあるために生ずる社会的な結果であった。したがって、

彼によれば問題の解決は生産を支配している現存の私的利益の追求のための機構を改めて共同の利益にかなった合理的な共有機構に移行することによって実現されるはずであった。

オーエンは彼のかかげたそのような合理的社会制度の実現の方法として政治的な運動や革命を好まなかった。彼はその方法としてなによりも啓蒙活動による平和的な方法を主張した。その意味ではオーエンは18世紀のフランス啓蒙主義の忠実な後継者といえる。彼は新しい合理的社会制度としてニュー・ラナークで自ら試みた協同の村の方式や、さらにそれを徹底させたニュー・ハーモニーにおける共産制コミュニティをすべての階級の人々に示して、これにもとづく啓蒙運動の拡大によって遠からぬ将来に地上に搾取もなく、犯罪もない「千年王国」の実現を目ざしたのである。

ひととおり、村の中を歩いて広場にもどると、ギブスンさんが自室から彼の自慢のオーエンのコレクションの一部を持ち出して来て見せてくれた。それは1832～33年にロンドンとバーミンガムでオーエンが開設した衡平労働交換所(the Equitable Labour Exchange)の発行した労働交換券(Labour Note)の一枚であった。<sup>8)</sup>

この頃、オーエンは資本主義体制下の悪の根源の一つを貨幣制度のなかに見出して、従来の人工的通貨に代る労働の直接的表示としての労働交換券制度の実施を試みたのであった。それは労働価値説のあまりに素朴な社会的適用として、その寿命は極めて短いものであった。それだけにまた当時発行された労働交換券は今日では貴重なものとなっている。ギブスンさんの所持するその労働交換券はオーエン自筆のサインの入った珍しいものであった。最近、アメリカのある学者がこの地へ来て、そのオーエン資料のコレクションを高価で譲ってほしいと申し出たということだが、彼はすぐにそれを断ったと幾分誇らし気な顔で語っていた。オーエン主義者のギブスンさんにとってはオーエンの記念品は貨幣でははかりきれない大切な意義をもっているのであった。

クライド川の谷間の秋の陽は速く、ギブスンさんの話を聞く間にも広場の向こうの建物にはすでに夕日の影がおちはじめていた。スコットランドの秋風は冷い。私はこの老いたオーエン主義者の懇切な案内に深く感謝したあとかつて「幸福の村」「奇蹟の谷」とも呼ばれたこのオーエンゆかりの地に名残りを惜しみながら Edinburgh に向かった。

スコットランドの各地をめぐる後にオックスフォードへの帰途に私は Glasgow を経た後ひき寄せられるように再びオーエンの村を訪れた。村は以前と同じように寂

寞としていた。最初の訪問の時にはこの村の現状をしらべるのに夢中であった私も、二度目に訪れたゆとりからか村の広場に立ってなつかしい建物を眺めながらかつてオーエンがここで行った社会的実験とその思想が今日のイギリス人やわれわれにとっていかなる意味をもち得るのであろうかなどと考えていた。

〔注〕

1. イギリスで最初の工場法は1802年にはじまる。《徒弟の道德・健康法》と呼ばれたこの最初の法律はオーエンの頃は実質的な意味をなくしていた。オーエンは1815年に Sir Robert Peel (最初の工場法の制定者の息子) を通じて工場法の改正案を提出し、それが1819年に成立した工場法のもとになった。しかし、その内容は多くの修正の結果オーエンにとっては「無価値」に等しいものになっていた。彼が提案した10時間労働が法制化されるのは約30年後の1847年の工場法による10時間法である。これらの法律によって工場の児童と婦人労働者の保護が進んだが、これら初期の工場法を推進した政治家 (R. Peel, M. Sadler, A. Shaftesbury etc.) の多くは地主出身の貴族たちであった。
2. オーエンのこの工場法案の内容と提案の趣旨については前掲の “Observations” 以外にはオーエンの次の論文に詳しい。  
“On the Employment of Chidren in manufactories,—To the Right Honourable the Earl of Liverpool” 1818.
3. 本稿、3の注3参照
4. R. Owen, *Life*, p.112. 五島訳、p.206.
5. G.D.H. Cole, *The Life of Robert Owen*, 1965, p.177.
6. R. Owen, “An Address to the Working Classes” in G.D.H. Cole, ed. *A New View of Society and Other Writings*. 1966. pp.148~155.
7. *ibid.* p.258. 渡辺訳、p.125.
8. cf. F. Podmore, *Robert Owen, A Biography*, 1906. p.419., G.D.H. Cole, *op.cit.* p.196.

## Ⅱ. ロバート・オーエンと現代のイギリス

「イギリスで労働者の利益のためにおこなわれたあらゆる社会運動、  
あらゆる実際上の進歩はオーエンの名にむすびついている」<sup>1)</sup>  
(エンゲルス)

私自身の狭い見聞でも現代のイギリスの社会のいろいろな面でオーエンとのつながりを考えさせる現象にめぐり会った。この章は今日のイギリスでのオーエンにかかわりのある事象や人物についての私なりの調査報告である。

### (1) 大英博物館のロバート・オーエン文献

ロンドンの大英博物館 (British Museum—B.M. と略称される) の読書室が世界有数の文献や資料を所蔵していることはあまねく知られている。在英中、私はオックスフォードから鉄道で一時間半ほどのロンドンにたびたび出張して、この B.M. に所蔵されている文献を利用した。

B.M. での私の主な目的はここに集められているゲルツェンのロシア自由出版所の出版物をしらべることであった。ゲルツェンはロンドンに亡命中にロシア国外での無検閲の政治的印刷物を出版すべく1853年にこの地に彼の出版所を設けたのだが、そこで印刷された文書の多くはこの B.M. の文書保存官の T. Watts (1811—1869) の努力によって収集されて、おそらくソ連以外では最良のコレクションとなっているのである。<sup>2)</sup> ゲルツェンに関連して私はオーエン関係の文献にも目を通そうと心がけていた。オーエンはゲルツェンが直接面談したことのあるイギリス人の一人であり、その有名な回想録の中でとくに1章を設けている人物でもあるからである。<sup>3)</sup>

B.M. の大読書室に備えられている general catalogue に表示されたオーエン文献に関する限りではすでにオックスフォードの中央図書館・ボードリアン・ライブラリー (Bodleian Library, Oxford) や故 G.D.H. Cole 教授の収集したオーエン資料を所蔵するナフィールド・カレッジ (Nuffield College) の図書館の蔵書を見た後ではとくにめずらしいものは見当たらないように思われた。

オーエンについての貴重な資料がこの B.M. のなか深くに未発見のままに所蔵されていたという新知識を得たのはたまたま B.M. の大読書室で会った都築忠七博士からであった。同氏は Sheffield 大学に滞在して John Burns についての著作の準備をしていたが、B.M. のマニエスクリプト部に所蔵されている Burns の蔵書コレクションのなかでオーエンの自筆の書簡124通を発見したのである。従来オーエンの私信は同時代の協同組合の指導者 G.J. Holyoake によって Manchester の Co-operative Union に保管されていた手稿類の中に約450通がふくまれていて F. Podmore によって彼のオーエン伝 (1906年) の執筆に利用されている。しかし、その後オーエンについてこのように大量の未公表の私信が発見されたのははじめてであった。しかもこれらの私信のなかには従来のオーエン研究の空白部分といえる1848年革命の頃のヨーロッパ大陸でのオーエンの動向を明らかにするパリからの彼の書簡をふくんでいる。都築氏のこの発見がオーエン研究史上の画期的な意義をもつことについては、その後の同氏の研究発表によってわれわれにも次第に明らかになってきた。<sup>4)</sup> しかし、B.M. の地下食堂で同氏と会ってその発見について聞いた時は、general catalogue にのっている資料についてすら目を通しかねていた私にとって B.M. でのオーエン研究とは



そのような未整理のまま所蔵されているマニュスクリプトにまでおよばなければならないということを教えられて大きな刺激であった。

しかも、他に調査目標のあった私にとって B.M. でのオーエン文献調査は極めて限られたものにならざるを得なかった。従って私は調査の対象を自ら限定した。まずオーエンのロシアにおける影響を示す文献を見つけることであった。帝制時代のロシアでは厳しい検閲制度があったにもかかわらずロバート・オーエンの著作はかなり広く読まれたはずである。それはニコライ一世自身が1816年の大公時代にニュー・ラナークを訪れてオーエンにロシアへ紡績工をともなって移住をすすめたことなどによって彼の名が知られていたことにもよるであろう。オーエンの死の翌年1859年にはドブロリューボフが当時広く読まれていた彼の進歩的な雑誌『ソヴレメンニク』誌上でオーエンについての長文の追悼論文を書いているのである。そのような意味で私にとっては手はじめに 1893年（明治26年）にモスクワで出版されたオーエンの“The New View of Society”のロシア語訳第三版が見つかったことはささやかながら一つの「発見」に思われた。

そのロシア語訳のタイトルは『ロバート・オーエン、人間の性格形成について（新社会観）、英語からの翻訳、モスクワ、第三版（完訳）、イー・イー・ビリービン。1893年。180頁。検閲認可、モスクワ1892年10月27日』<sup>5)</sup>とあった。

B.M. のオーエン資料のなかで私が次に関心をもったのはすでに半世紀近くも前に五島茂博士がしらべつくしたオーエン自身の著作よりも、オーエンの当時イギリス社会に与えた影響を示す資料を見たいということであった。その意味では同館のNorth Library で借り出して読んだ次の小冊子は興味深いものであった。

それは1830—40年代にオーエン主義の社会的伝導師 (social missionary) の一人で、その後も協同組合運動の指導者、ジャーナリストとして活躍し、オーエンについての伝記も書き残しているアイルランド出身の社会主義者ロイド・ジョーンズ (Lloyd Jones) が1840年に Liverpool で地元の牧師ジョン・パウズ (John Bowes) との間で行ったオーエンの結婚論をめぐる公開討論会の記録であった。<sup>6)</sup>

すでにオーエンの思想は1817年の彼の反宗教的発言から既存の社会秩序をおびやかす危険思想と目されはじめていたが、その後もオーエンの教会・結婚制度・私有財産制度への批判はますます尖鋭なものとなっていっていった。<sup>7)</sup> とくに彼の見解は1836年以降に印刷された『新道徳世界の書』(The Book of the New Moral World, London, Pt. I, 1836. Pts. II, III, 1842. Pts. IV—VIII, 1844) の中で公然と表明され、教会



(図 No.10) 1840年の諷刺画、ロバート・オーエンに対する教会の攻撃を宗教裁判や魔女狩りに見立てている。「プロテスタンチズム対社会主義、あるいはよき古き時代の復活」と題している。From J.F.C. Harrison, *op. cit.* p.261.

側を刺戟して、議会においてこれにたいする弾圧を求める声が公然化する。その口火を切ったのがエクセターの僧正 (Bishop of Exeter) である。彼は Birmingham の教会派の4000名の請願署名を背景に1840年1月上院でオーエンとオーエン主義者への激しい非難を行い、社会主義取締法の制定を要求した。それは多分に時の Whig 党内閣への政治的な攻撃の口実に使われたきらいがあるにせよ、これをきっかけに各地で教会を中心とした人々によるオーエン主義者たちへの解雇や暴行をふくむ攻撃が激化し、Manchester では完成間もないオーエン主義者たちの集会場 (Hall of Science) への放火未遂事件すら発生したという。(図 No.10)

オーエンの側でもこれに対抗して議会に請願書署名を送ったり、オーエン自身をふくめてその同調者が各地で公開講演や討議をひらいて民衆の支持の獲得をはかっている。<sup>8)</sup>

ジョーンズの Liverpool における1840年の公開討論会もこのような状況のもとで行われたオーエン主義者とこれに反対する教会関係者との対決の一つの例であった。

私が B.M. で見たこの公開討論会の記録は次のようなタイトルがついている。

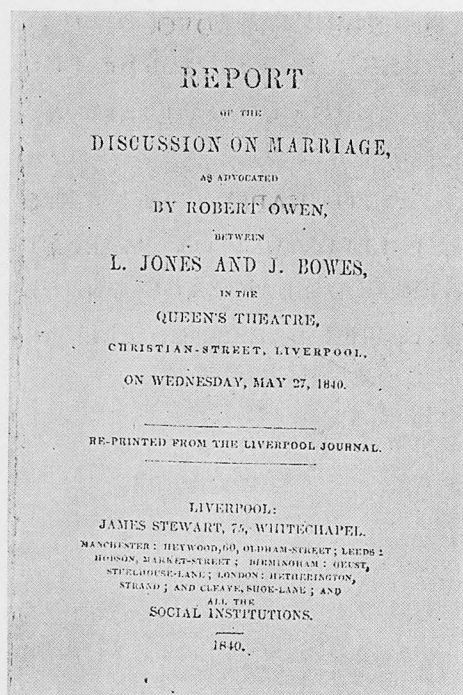
REPORT OF THE DISCUSSION ON MARRIAGE, AS ADVOCATED BY ROBERT OWEN, BETWEEN L. JONES AND J. BOWES, IN THE QUEEN'S THEATRE, CHRISTIAN-STREET, LIVERPOOL, ON WEDNESDAY, MAY 27. 1840—RE-PRINTED FROM THE LIVERPOOL JOURNAL.—LIVERPOOL; JAMES STEWART, 75, WHITECHAPEL.—MANCHESTER: HEYWOOD, 60, OLDHAM-STREET; LEEDS: HOBSON, MARKET-STREET; BIRMINGHAM: GEUST, STEELHOUSELANE; LONDON: HETHERINGTON, STRAND; AND CLEAVE, SHOE-LANE; AND ALL THE SOCIAL INSTITUTIONS.—1840.

大きさは縦 14.3cm, 横 9.5cm の小さなもので製本上では32頁であるがはじめの16頁だけが印刷されあとの16頁は白紙のままであり、しかも各頁によって印刷されている行数が一致していない、いかにも素人的な印刷・製本である。タイトルが示しているように、この Report は1840年5月27日水曜日にリバプールのクイーンズ劇場で行われた討論についてリバプール ジャーナルに印刷されたものをリプリントしたものである。発行者の筆頭はリバプールのジェームス・ステュワートになっているが、その他マンチェスターのヘイウッド、リーズのホブスン、バーミンガムのゲスト、ロンドンのヘザーリントンなどいずれも当時オーエン主義の出版活動に力のあった各地の急進的な出版業者の名が印されている。(図 No.11)

私はいずれこの小冊子に盛られている討論の全容を紹介する機会を得たいと考えているが、ここでは、その概要を記すにとどめる。

当日の会場はかなり満員でこの討論会が多くの人々の関心を集めたことを物語っていた。とくに身なりのよい婦人たちが多数来聴して前列の席を占めており、討論者たちが登壇する時には、それぞれの支持者たちからのさかんな叫びがあったと記されている。はじめ議長が討論の題目を述べ、討論に当っての条件をあらかじめ決めて、その後円滑に討論を進めさせているのはいかにもイギリス風である。この日の討論はすでに同地で両者の間で行われた Socialism をめぐる討論にひきつづくもので、この回ではとくにオーエンの結婚論をめぐる行われている。それは一言で要約すれば、結婚制度をめぐる伝統的な教会の人間観とオーエン主義者たちの非宗教的人間観もしくは“Rational Religion”との対決である。

オーエンの結婚論に反対するパウズは、まずオーエンが従来教会によって祝福される結婚制度を人間の自然に反する不合理なものとしたことに反論して、もしオーエ



(図 No. 11) 1840年5月27日にリヴァプールにて行われたロバート・オーエンの結婚論をめぐるロイド・ジョーンズとジョン・バウズの公開討論会の報告。(大英博物館蔵)

表紙実物 14.3×9.5cm

ンの云うように教会の承認を廃して人間が自然の欲求にのみ従うならば、人は獣性にもどり、乱婚や一夫多妻制が行われるであろうと主張する。これに対して、ジョーンズはオーエンを弁護して、理性によって高められた人間がその欲求に従うことは両性の間に真の愛情にもとづく結合をもたらすものであり、それこそが人間の本性にかなうものであると反論する。両者はこのような対立点をめぐって、それぞれ相手への批判やたくみな引例を交えて討論をすすめる。最後に議長が聴衆に両者の討論への判定を求めると、ジョーンズへの賛同者がバウズのそれを上まわり、結局ジョーンズの勝利に終わっている。この記録は当日の討議の忠実な速記録ではなく、新聞報道をもとにオーエン主義者たちがリプリントしたもので、必ずしも正確な再録とは言い難

いかもしれない。しかし、その内容は当日の会場での両者の主張と聴衆の動向を通じて、当時のオーエニズムの生きた姿をうかがわせて興味深いものがある。

今日のイギリスにおける婦人の社会的地位や婦人運動について理解する上で、私は産業革命下の婦人労働や家庭の問題にふれたオーエンの先駆的な発言とその影響を確かめることは必要であり、かつ有意義なことであろうと考えている。<sup>9)</sup>

〔注〕

1. F. Engels, *Die Entwicklung des Sozialismus, von der Utopie Zur Wissenschaft*, 1882, Werke, Bd. S. 200., 『マルクス・エンゲルス全集』第20巻、273頁。大月書店刊

F. Engels と Manchester のオーエン主義者との関係については次の論文を参照。

cf. 150th Anniversary of Engels's Birth., Frederick Engels and the English Working Class movement in Manchester, 1842-44 by J. Smethurst, E. & R. Srow, *Marxism Today*, Nov. 1970.

日本では《季刊・社会思想》1-4, 1971に古賀秀男氏によるこの論文の紹介がある。

2. B.M. のゲルツェン関係の資料について、ゲルツェンのロンドンでの亡命生活を中心にロシアの亡命家たちの生活を描いた *The Romantic Exiles* (1933年初版) の著者 E.H. Carr 教授にケムブリッジ大学トリニティ・カレッジの研究室でお会いした時に、教授は B.M. にはソ連の学者たちも知らないようなゲルツェン関係の資料があり、かつて教授の著書の資料としたと語っておられた。
3. A. Герцен, Полн. Собр. Соч. том. XI, стр. 208—253.  
ゲルツェン『過去と思索』金子幸彦訳、第Ⅱ巻、第9章、p. 349—379
4. 朝日新聞1971年4月15日夕刊、研究ノート欄、都築忠七“オーエンの手紙”・経済学史学会年報、第9号、1971年11月、同氏“オーエン研究資料に関する若干の考察” pp. 23—27.  
Chushichi Tsuzuki “Robert Owen and Revolutionary Politics”. (Sidney Pollard & John Salt, ed. “Robert Owen, Prophet of the Poor” 1971, Bristol. pp. 13—38)
5. Роберт Оуэн. ОБ ОБРАЗОВАНИИ ЧЕЛОВЕЧЕСКОГО ХАРАКТЕРА. (Новый взгляд на общество) перевод с АНГЛИЙСКОГО. МОСКВА. 3-е (полное) издание И.И. Билибина. 1893. Дозволено Цензурою. Москва, 27. Октября 1892 года. これと同じロシア語版を日本では大塚金之助教授がもっておられるのを帰国後知った。
6. Lloyd Jones (1811—1886) とその活動については、J.F.C. Harrion, *Robert Owen and the Owenites in Britain and America* p. 216 参照。なお L. Jones にはオーエンについての伝記がある。*The Life, Times, and Labours of Robert Owen by Lloyd Jones*. Vol. I (1889), Vol. II (1890). その第一巻の巻頭には息子の William Cairns Jones による “Lloyd Jones” と題する父親についての回想が付けられていて L. Jones の人柄を知ることができる(同書 ix—xvi)。それによれば J. Jones は詩の大的愛好家であり、オーエンに似た楽天的で不屈の社会的活動家であった。
7. オーエンは19世紀のはじめのイギリスで当時社会的なタブーとされていた三つの問題に公然たる批判を行った最初の人物といわれる。その三つのタブーとは宗教・私有財産制度・結婚(家族)制度であつた。

産業革命期に激化した社会的諸矛盾を直視して、その社会的悪からの人類の解放をねがったオーエンにとってはこれらの三つのタブーはいずれも人類の解放を妨げている最大の障害にはかならなかった。オーエンとしてはこれらの問題の根本的な再検討を避けることはできなかったである。

宗教の問題については彼はすでに少年の頃から懐疑的で自らの思索の中で既成の教会の權威を否定していたが、ニュー・ラナークにおける改革の過程でその学校教育のなかから宗教の影響を排除した。1817年のシティ・オブ・ロンドン・ターヴァンでの大集会の席では質問に答えて宗教が彼の新社会観の実現にとって最大の障害であることを公言して大きなセンセーションをまき起こした。

教会を媒介とする伝統的な結婚制度についても彼は大胆な批判を展開する。とくに1835年の「旧不道德世界の聖職者の結婚についての講義」から1839年の「結婚と宗教と私有財産について、および物理的の諸悪を防ぐために理性的な社会制度を直ちに実現する必要性について」にかけて、オーエンの一連の論文のなかには結婚制度批判、教会制度批判、私有財産制への批判が目立っている。

これらの論文でオーエンは当時の教会を媒介とする既存の結婚制度がいかに虚偽にみちており、人間の自然に反するものであるかを繰り返えし強調した。彼によればそれは真の愛情

にもとづかず、女性を私的所有物として私的な個々の家庭に縛りつけるものであり、その意味ではそれはすべての売春行為の原因であるとさえ断じた。しかも、そのようにして作られる私有制のもとでの家庭とはその家族構成員を常に利己的目的のみに狩り立て、子供の時からその人間性をゆがめ、彼等を社会の共同の利益の敵対者に仕立てあげる悪しき機構である。このような観点からオーエンは新しい結婚制度として教会の媒介を廃止して両性の合意のみにもとづく自由な結婚を提唱する。オーエンによれば結婚は教会によって承認される必要はなく、社会の全成員に一定期間公示すれば足る制度に改めるべきである。従って離婚についても彼らは一定期間の公示と両性自身の確認を経ればよいことになる。オーエンが私的家庭に代るものとして協同の原理にもとづく共産的な共同社会を志向していたことはいうまでもない。

A.L. Morton. *The life and ideas of Robert Owen* のCh. XIV "Marriage and the Family" (pp.161~168) はオーエンの著作の中の結婚と家族制度についての重要な発言を抜粋したもの。私のこの個所の敘述は主に同書によった。モートンはオーエンの既存の結婚制度批判の極端さにかかわらず、それに代るべき新しい提案においては、まことに穏健なものがあると記している。

オーエンの結婚制度への批判論文として主なものは次の通り。

"Lectures on the Marriages of the Priesthood of the Old Inmoral World, delivered in the Year 1835, before the Passing of the New Marriage Act", 1835.

"Exposition of Mr. Owen's Views on the Marriage Question", 1838.

"The Marriage System of the New Moral World". 1838.

"Robert Owen on Marriage, Religion, and Private Property, and on the Necessities of Immediately Carrying into Practice the 'Rational System of Society' to prevent the Evils of Physical Revolution", 1839.

8. 五島茂「オウエン著作史」第一巻、p.339—340参照。

9. オーエンの婦人解放についての発言は彼と同時代人であった婦人解放運動の先駆者メアリー・ウルストンクラフト (Mary Wollstonecraft) の著書 *A Vindication of the Rights of Woman*, London 1792. やオーエンの同志的な活動家ウィリアム・タムスン (William Tompson) の有名な婦人へのアピール "An Appeal of One Half of the Human Race, Women, against the Pretences of the Other Half, Man, to retain Them in Political and Thence in Civil and Domestic Slavery", 1825. にくらべると目立たないが、この時期に彼が婦人の解放を勤労婦人たちの労働条件の改善や教会と結びつく伝統的な結婚観や家庭からの解放をふくめて極めて徹底した主張をしていたことは特記するべきであろう。1840年といえはわが国ではまだ蚕社の獄の翌年にあたる。

私は留学中、イギリスの婦人の社会的地位やその運動についての研究の手ほどきをケムブリッジ大学のブラッカー女史 (Dr. Carmen Blacker) によって与えられた。同女史の著書『日本の啓蒙主義—福沢諭吉の著作の—研究』(*The Japanese Enlightenment, A Study of the writings of Fukuzawa Yukichi*, Cambridge, 1964) は「天は人の上に人をつくらず」という名言で知られるこの明治の代表的開明主義者がこと婦人の社会的地位に関しては儒教的伝統観念の限界をもっていたことを指摘している。(同書 p.89 その他)



(3) フェイビアン協会員とロバート・オーエン研究

——三人の伝記作者をめぐる——

イギリスにおいて従来もっとも権威のあるオーエンの伝記として知られてきた三つの労作の著者がいずれもフェイビアン協会 (Fabian Society) の有力な会員であることは偶然ではないであろう。

オーエンについての最初の学術的な伝記といわれる *Robert Owen, A biography* (1906) を書いた F. Podmore (1856~1906) はフェイビアン協会の初期の会員であったし、協会の名付けの親でもあった。*The Life of Robert Owen* (1926—初版、1930—第2版、1965—第3版) の著者 G. D. H. Cole 教授 (1889~1959) は1909年からのフェイビアン協会の会員で一時脱会したが後に復帰して第2次世界大戦後は協会の会長をもつとめた。同夫人 Margaret Cole (1893~ ) も古くからの会員であり、*Robert Owen of New Lanark* (1953) を著している。

これら三人のオーエンの伝記作者のオーエンとフェイビアン協会へのかかわり方をたどることは現代のイギリスの知識人におけるオーエンにたいする関心がいかなる形で彼らの社会的活動とむすびついているのかを知る手がかりともなるであろう。それはオーエンと現代のイギリス社会との関連を示す一つの側面を明らかにすることでもあり極めて興味深い問題であるが、私にはまだここでそのような問題について本格的な分析を示す力はない。ここでは、上記の三人の伝記作者のフェイビアン協会とのかかわりを中心にして彼がオーエン伝を書いた時代の状況について簡単にふれることにとどめたい。それは私にとっての今後の研究課題の設定という意味においても重要だからである。

オーエン的なユートピア思想はいろいろなかたちをとってイギリスやアメリカの知識人の間に近年まで生きながらえていたようである。そもそも、1883年にロンドンの一角で開かれたフェイビアン協会の前身ともいえる知識人の小サークル“新生活の仲間”(The Fellowship of the New Life)のイニシアチブをとった Dr. Th. Davidson は欧米各国を放浪した人物でアメリカではオーエン的なコミュニティーにも参加した経験をもっていたし、このロンドンでの最初の会合でも会員の間で小ユートピア社会を南アメリカに建設しようという提案がなされたという。

しかし、Davidson のこの傾向に反対して翌年、このサークルには・ユートピア主義を排して現実的な社会改革の問題に協会の関心を向けようという主張がたかまり、その線で独立したメンバーによって組織されたのがフェイビアン協会であった。その

初期のメンバーのなかには Podmore とともにオーエンの孫娘にあたる Rosamund Dale Owen が加わっていたこともオーエンとフェイビアンとの間接的なつながりを示す興味深いエピソードといえよう。<sup>1)</sup> しかし、この場合より重要なことはフェイビアンが、ユートピア主義とのけつ別をその出発点において確認していることであろう。

この独立した新たなグループの命名に当たって Fabian Society という名を提議したのがはじめにも記したように Podmore であった。Fabian という名は忍耐強い戦略家として知られる古代ローマの將軍 Fabius の名にちなんだものであったが、それは漸進的な社会変化を忍耐強く促進するというこのグループの基本的原則を象徴するものであった。<sup>2)</sup> その他初期の協会の原則としてうち出されたものは協会の活動は個人主義的な完全な自由を建て前とすること、また J.S. Mill が定式化したようなイギリスの伝統的な民主主義に立脚することなどであった。協会のメンバーの間には当初から社会主義への志向はあったが、その内容については必ずしも具体的な一致があったわけではなく、メンバーのなかにはキリスト教社会主義者からマルキストやアナーキストとまでをふくんでいた。

このフェイビアン協会はその成立当初はメンバーは専ら中産階級出身のインテリゲンツィヤであり、労働者の加入を認めていなかった。従ってその性格も “a drawing-room discussion group”<sup>3)</sup> と呼ばれるような知的サークルの性格が強く、80年代のイギリスにたかまりつつあった社会主義復興運動にも積極的な参加をしなかった。その意味でこの協会は当時 H.M. Hyndman にひきいられていたマルクス主義的な団体 S.D.F. と William Morris によってひきいられていた Socialist League (アナーキストや Engels グループをふくむ) と異質なグループとして活動し、成長した。

たとえば初期のメンバーであった作家の Bernard Shaw にしても、Webb 夫妻にしても社会主義には熱心であったが、力や革命によるその実現を現実的なものとは考えなかった。彼らは協会から発行された雑誌 *The Practical Socialism* の紙上で当時のマルクス主義者やアナーキストを批判して彼らとの間に一線を画することに努めた。<sup>4)</sup> S.D.F. などに指導される失業者たちの政治的デモンストレーションとそれに伴った激しい弾圧（‘Black Monday’ と呼ばれた 1886 年 2 月 8 日の官憲による弾圧、‘Bloody Sunday’ と呼ばれる 1887 年 11 月 13 日の弾圧など）に当たっても、フェイビアンはこれに参加しなかった。むしろこれを契機に協会は反革命的な態度を強め、S.D.F. や Socialist League との決裂の方向にむかっている。同時にこれに代ってフェイビアンのなかには現実的な議会活動への積極的な参加をめざす動きが 1886 年の Fabian Parliamentary League の結成となってあらわれている。このような議会活動への傾



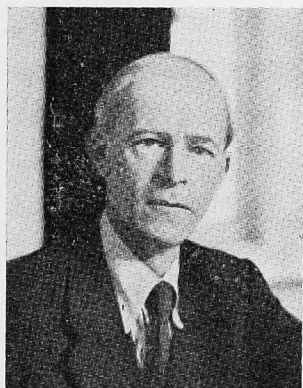
斜についてはその当初から社会主義者の側からの非難があった。Morris はブルジョア的な議会に参加するまえに社会主義についての基本的な理解をめぐって真剣な検討が必要であると提議したが彼のこの主張は黙殺されて協会のなかには議会主義的な傾向が進行した。<sup>5)</sup>

こうしたフェイビアン協会の動きのなかで Podmore はその結成当初からの有力会員であり、1888年まで執行委員の一人であったが、この年に自ら委員を辞して、その後は著述に専念している。執行委員時代に彼自身がフェイビアン協会の動向といかなる関係にあったかについては残念ながら私の手元の資料では明らかにできない。しかし、32才の働ざかりの彼が協会の活動から身を引いたのはフェイビアンの内部の問題にかかわりがあったと思われるが、Podmore 自身の側にあった社会問題への関心がこの頃から晩年のオーエンをとらえた spiritualism に移っていったためでもあろうかとも考えられる。<sup>6)</sup> Podmore がオーエンの伝記執筆にとり組んだのも、社会改革家としての先人オーエンとともにこの spiritualism における先輩としてのオーエンへの関心からであろう。彼のオーエン伝は当時 Manchester の The Co-operative Union の物置で発見された未公開のオーエンの書簡類のコレクションによって資料的に豊かな裏づけをもったことと、オーエンへの彼の幅広い共感とによって今日でも最もすぐれたオーエンの伝記となっている。

G.D.H. Cole 教授や Margaret Cole 夫人はフェイビアンにおける第二の世代といわれる。もともと、W. Morris の影響で社会主義者となったという Cole 教授には社会主義への志向が強く、フェイビアン協会における議会主義的傾向や協会内の Liberals の存在にはかなりの反撥をもっていて、フェイビアン協会との関係は必ずしも常に順調なものではなかった。<sup>7)</sup>

Cole 教授がフェイビアン協会に入会したのは1909年、彼がオックスフォード大学のベイリオール・カレッジ (Balliol College, Oxford) に入学した直後であったが、やがて彼は協会の漸進主義に満足せず、急進的な知識人たちによってつくられていたギルド社会主義 (Guild Socialism) に移っている。後の Cole 夫人 Margaret Isabel Postgate に会ったのはこの時期で当時彼女はフェイビアン協会の調査部門である Fabian Research Department (F.R.D.) の書記長として活躍していた。彼らが結婚したのはロシア革命の翌年の1918年で、この年には F.R.D. はフェイビアンとの関係を絶って Labour Research Department (L.R.D.) と改称している。

ロシア革命のぼっ発はイギリスの社会主義運動にも大きな影響を与えずにはおこな



(図 No. 12) 故 G. D. H.  
Cole 教授

かった。ギルド社会主義もその影響のもとに分裂して、その左派は英国共産党の創立（1920年）に参加し、右派はオーエンとの因縁浅からぬ Manchester を中心とする建築労働者の一種の生産協同組合として National Building Guild を組織した。

この時期の Cole 教授の動向は彼の思想の性格を端的にあらわしていて興味深い。すなわち、彼は「ロシア革命を支持する一方、プロレタリアート独裁をイギリスに適用することに反対する」<sup>8)</sup> といういわば中間的な立場をとったという。事実、彼はその後も左右両派とも関係を保っていたが L.R.D. における共産党の

勢力が強まるにつれてその立場は困難なものとなり、やがて1924年には L.R.D. をはなれ、翌年オックスフォード大学に経済学の講師として復帰している。

Cole 教授がオーエンについての伝記を書いたのはこの時期である。同じ頃に彼は農業労働者出身の急進的政治評論家 William Cobbett (1762—1835) の伝記をも書いている。当時のイギリスは MacDonald を首班とする最初の労働党内閣がわずか8ヵ月後に崩壊しこれにつづく労働運動の急進化と、1926年5月のゼネラル・ストライキなどに示される激動期であった。Cole 教授がこのような状況のなかでオーエン研究にとり組んだのは、おそらく、この時点でイギリスの社会主義や労働運動についての歴史的源流ともいうべきオーエンの時期にまでさかのぼって考察するのを感じたからであろう。事実、Cole 教授が1926年に書いたオーエン伝の特色の一つはオーエンの活動を時代的背景との関連——とくに協同組合運動や労働組合運動の発生とのかかわりのなかで描いていることである。マルクス主義以前のイギリスの土壤に生まれた社会主義の伝統についてこの時点で認識をあらたにすることは Cole にとっては大きな実践的意義をもっていたといえるであろう。

Cole 教授はオックスフォード大学ではアカデミックな著作活動以外にも学生および労働者教育の面に大いに力を注いでいる。彼はオックスフォード大学の労働者学校 Ruskin College の顧問をつとめたし、Margaret 夫人とともに労働者教育協会 (Workers' Educational Association—W.E.A.) のための活動も行った。1926年の労働者のゼネラル・ストライキに当たってはこれを支持して学生の啓蒙のためにオックスフォード・ストライキ委員会をつくって活躍している。今日の労働党の党首 H. Willson やその他の有力な労働党幹部たちの多くがオックスフォード大学で学び当時 Cole 教

授の影響をうけているのである。

Cole 教授は労働党や労働組合の指導者たちとのつながりが深く、彼らにたいする政策上の助言や労働者教育などの面で積極的な協力を惜しまなかったし、第2次大戦直後の1945年には労働党の政策を支持して自らオックスフォード大学地区から総選挙に立候補したほどであった。<sup>9)</sup> しかし、その後与党となった労働党幹部の脱社会主義的傾向にたいする批判をつよめ、また巨大化した労働組合のもとでの「労働運動のテクノクラティックな傾向」にも失望して、彼の両者にたいする関係は次第に冷却していった。<sup>10)</sup> それはかつて1830年代のオーエンが自律化してゆく労働者階級の運動から次第に孤立していった姿にも似た理想主義者と現実主義的な政治や大衆運動との分裂の悲劇を感じさせる。

フェイビアン協会と Cole 教授との関係をみると、1929年に第2次労働党内閣が組織され、左翼の間でも議会主義への関心がたかまるにつれて、彼もそれまでの反議会主義的なギルド社会主義の立場を捨てて1931年には協会に復帰している。1937年から39年にかけては協会の chairman としてその再建にあたり、1952年から1959年までその会長の要職にあった。しかし、朝鮮事変に関連して「アメリカの援助によって支えられた南鮮の『反動的地主政治』よりも北鮮政府による朝鮮の統一を、『きわめて不愉快な状況からの最少不愉快のぬけ道』であると考え」<sup>11)</sup>、その点で協会や労働党と意見を異にし、協会の委員長の職を辞している。

教授はまたその晩年に西欧社会主義とソビエト社会主義との和解と協力を目的とした社会主義者の国際的な連帯による世界的な規模をもつ一種のフェイビアン協会を組織しようと試みて International Society for Socialist Studies (I.S.S.S.) を結成し、自らその会長となっている。この点でも私は晩年のオーエンがその理想主義から実際にはほとんど機能しなかった国際的な協同組合の連合体として International Co-operative Alliance (1841年) を創設した事例を想い浮かべるのである。もちろん、両者の目的と組織には大きな違いがあるのだが、1951年以来「新しい左翼の理想主義」をかかげて、「社会主義は福祉国家以上のものであり、それは階級障壁の打破を意味する」<sup>12)</sup> と主張し労働党の政策を批判しつつけた教授の姿には、生涯の終りまで自己の社会主義的理想を説いてやまなかったオーエンの情熱とあい通ずるものを感じないわけにいかないのである。

Cole 教授はそのオーエン伝以外にも労働運動史や民衆史および社会思想史に関する著作のなかでオーエンとその運動について多くの頁を割いている。<sup>13)</sup> 教授はオーエンを決して理想的な指導者として扱っていない。むしろ、オーエンのもっている思想

的限界やその指導の非民主的性格について率直に指摘している。<sup>14)</sup> しかし、教授の諸研究はオーエンがイギリスの労働組合運動や社会主義の発展の上で果たした客観的役割とその意義について明らかにして、オーエン研究の上で大きな貢献をもたらしたといえるのである。<sup>15)</sup>

Margaret Cole 夫人とフェイビアン協会とのかかわりも深くかつ長い。1935年から1939年には協会の名誉書記、1939年から1953年までと1955年から1956年までの間はその chairman をつとめている。<sup>16)</sup> 夫人はまたその *Robert Owen of New Lanark*, 1953. と題するすぐれた伝記の著者としても知られている。夫人はかなりの高齢（1889年生）にもかかわらず、今年のオーエン生誕200年記念にあたって、同記念協会の副会長の一人として精力的に活躍している。

1969年8月29日に夫人は労働党左派の機関紙 *Tribune* に「われわれがロバート・オーエンに負っているもの」(*The debt we owe to Robert Owen*) と題する論文を寄せている。<sup>17)</sup> この論文のなかで彼女はオーエンが達成し、あるいは啓示した重要な事実を伝記的な形式で紹介した。オーエンの事業として彼女があげている主なことはニュー・ラナークにおける彼の革新的な経営、とりわけそこでの学校教育、さらにニュー・ハーモニー村におけるオーエン的コミュニティーの実験、協同組合的社会主義社会のアイデア、全国的労働組合連合の結成への働きかけなどである。そのなかで彼女が今日的意義を評価するのは、オーエンの都市計画、直接大量購入、教員養成学校、生産の国勢調査、公共事業、グリーン・ベルトなど主に彼の死後に具体化されたものについてである。オーエンの共産的コミュニティー計画については、今日ではわずかにイスラエルのキブツなどに見られるとして、彼の思想が今日のマルクス主義的社会主義もしくは共産主義につながるものとしては評価していない。

Cole 教授の場合でも同様であるが、大衆的運動における客観的役割を評価しつつその「指導者」としてのオーエンの態度について彼女の評価はまことに厳しい。彼女の敘述に従えば、

「オーエンが蹈みにじられた者の革命運動にとってまことによくない指導者であったということを誰も疑う者はない。彼はストライキや話し合いという戦術を理解しなかった。彼のやり方は彼をもっとも尊敬していた人々をもいらだたせた。そして彼は（儀礼的以外には）誰か他の人が言ってやるべきことに決して耳をかさなかった。なぜなら、彼はすでに知っているのだから（傍点は Margaret 夫人による）」。<sup>18)</sup>

ここで彼女が強調しているのはオーエンの「危険な自己確信」にもとづく独善的性

格である。さらに、彼女によればオーエンにとっては協同組合や労働組合はそれ自体には意味がないのであり、それらはただ彼なりの社会主義「新道德世界」の設立のための代理機関 (agent) としかみなされなかったというのである。この厳しい批判にたいしてもしオーエンが答えられるとしたらなんと答えるであろうか。おそらくオーエンは今日のイギリスでそれらの組合が自己目的となって改良主義に陥り社会主義への展望を失っていることを指摘するであろう。性急な彼はあまりにも早く——150 年も前に——共産制的な「千年王国」を夢見たのだが、それ故にこそまた、人類のはるかな未来像を示して今日、社会主義国の人々からも偉大なユートピア的先駆者とみなされているといえるのである。

ここで紹介した三人のオーエン伝記作者のうち Podmore と G.D.H. Cole はオックスフォード大学の出身者であり、Margaret Cole はケムブリッジ大学の出身である。

Podmore がかつて学んだペムブロック・カレッジ (Pembroke College, Oxford) は1624年の創立で、小じんまりしているがオックスフォード大学のなかでもっとも美しいカレッジの一つである。昔ながらの学寮の窓辺の花が咲きみだれる頃はさながら中世の学園や僧院を訪れるような趣きで、いかにも冥想の場としてふさわしいところであった。Podmore の spiritualism への傾向はこんなところで育まれたのではないかと思われるような古い礼拝堂が中庭の芝生に面して建っているのが印象的であった。

Cole 教授が関係したベイリオール・カレッジ (Balliol College, 1263 年創設。現在の学長 Ch. Hill) やラスキン・カレッジ (Ruskin College) はオックスフォード大学では今日も依然として社会主義研究や労働運動史研究のセンターとしての進歩的な伝統を維持しているし、教授が教鞭をとったナフィールド・カレッジは国際政治や国際経済研究の有力なセンターとなっている。とくに、同カレッジの図書館に所蔵されているコール教授の旧蔵書はオーエン研究の貴重資料を集めていて、今日多くの研究に利用されている。

Margaret 夫人が学んだケムブリッジ大学は今日でも J. Robinson 教授のようなすぐれた女性社会学者をもっていて、オックスフォード大学とくらべて一層進歩的な気風に充ちている。

かつてオーエンが Manchester で参加した J. Dalton のサロンが開かれた Unitarian New College が今日では Manchester College としてオックスフォード大学の一角を占めていることは先に記したとおりである (本稿 I、1 参照)。こうしてみ

るとオーエンやイギリスの進歩的社会運動とイギリスの伝統的な大学との関係も決して軽視できないものがあると言えそうである。

〔注〕

1. H. Pelling, *The Origins of the Labour Party, 1880—1900*. Oxford, 1966, pp.33~34.  
M. Cole, *The Story of Fabian Socialism*, London, 1961. pp. 2~9.  
A. M. McBriar, *Fabian Socialism & English Politics, 1884~1918*, Cambridge, 1966.  
pp.1~7.
2. A. M. McBriar. *op. cit.* p.9
3. *ibid.* p.17.
4. *ibid.* pp.18~20.
5. *ibid.* p.21.
6. Podmore がそのオーエン伝を発表する前に書いた次の5種類の書物のうち4つまでが spiritualism に関連するものであった。  
*Apparitions and Thought-Transference*, 1894.  
*Studies in Physical Research*, 1897.  
*Modern Spiritualism*, 1902.  
*A History and Criticism*, 1902.  
*Spiritualism* 1903.
7. G.D.H. Cole 教授の経歴に関する本稿の資料は主として都築忠七 “故 G.D.H. コール教授について” (「一橋論叢」1961年7月号 Vol. XLVI. pp.37~57.) によった。その他同氏の好意で *The Times*, 15th Jan. 1959にのった Obituary “Prof. G.D.H. Cole, Intellectual of the Left” および、同教授への追悼論文集、A. Briggs & J. Saville ed. *Essays in Labour History*, London, 1960. を参照した。
8. 都築、同上、p.44.
9. Cole 教授はイギリス最大の労働組合である運輸一般労働組合の指導者 E. Bevin と1930年代はじめに緊密な協力関係を保ったがやがて離反している。都築、同上、p.49。  
オックスフォード大学選挙区から Cole は労働党の選挙プログラムを条件つきで支持して立候補し、3,000 票以上を獲得したが当選できなかった。都築、同上、p.53.
10. 都築、同上、p.53.
11. “ 同上、p.55.
12. “ 同上、p.53.
13. たとえば、G.D.H. Cole & R. Postgate, *The Common People, 1746-1938*. London. 1938. pp.204~214.  
G.D.H. Cole, *A Short History of the British Working-class Movement, 1789-1947*. London. 1966. pp.52~90.  
G.D.H. Cole, *A History of Socialist Thought, Vol. I. The Forerunners 1789-1850*, London, 1967. Ch. IX~XI. pp.86~131.  
コール教授はオーエン主義者の社会主義の性格について上記の書物のなかで次のように書いている。

「オーエン主義者の Socialism は主として国家的行為、もしくは政治の意味において述べ

られることは決してなかった。それは立法によらないが改宗者たちの自由意志の行為によってもたらされるはずのコミュニティー生活の方法を旨とする Co-operative の形を本質としていた。この点でそれはフーリエの社会主義に非常に近いものであって、サン・シモンの社会主義には全く似ないものであった。

これらの二つの対立する傾向は存続してきた。その一つはアナーキスト・コムニズムあるいはサンジカリズム、あるいは‘国家のなかの別の国家’としての協同組合の現代的形態のいずれかにむかうものであり、他の一つはマルクス主義的コムニズム、あるいは近代の‘民主的社会主義’のさまざまな教義のいずれかにむかうものである」 *ibid* p.131.

14. G.D.H. Cole, "Introduction" to Robert Owen, *A New of Society and Other Writings*, London, 1966. p.xiv.
15. Cole 教授のオーエン伝記はソ連においても 1931 年にロシア語訳されて出版されている。本稿Ⅳ「ソ連の出版物におけるロバート・オーエン、1918～1971」参照。
16. M. Cole, *op. cit.* pp.342～343.
17. M. Cole, "The debt we owe to Robert Owen", in *Tribune*, Aug. 29, 1969. pp.8～9.
18. *ibid.* p.9.

### (3) ロバート・オーエンと協同組合運動および労働組合運動

——ウェールズの協同組合員・建築労働者モウルス氏——

1969年の Aldermaston からの恒例の Easter March で知りあった平和運動家のモウルス氏 (Mr. A. Moulds) はオーエンの生身地ウェールズ地方の工業都市 Swansea の建築労働者で、地元の協同組合の元会長で建築労働組合の幹部でもあった。私はこの老労働者からオーエンにつながる今日のイギリスの労働組合運動や協同組合運動について書物からでは知り得ないことをふくめた多くのことを学んだ。以下はその後の私自身の調査も加えた報告である。

オーエンがイギリスの協同組合運動の創始者と呼ばれる場合は多い。しかし厳密には今日のイギリスの市民の経済生活で欠くことのできない全国的な組織となっている Co-operative Society はオーエンの思想を直接的に受け継いでいるとはいえない。オーエンがニュー・ラナークの労働者の生活条件の改善のために Co-operative Store を設立して成功したことはよく知られているが、当時といえどもこの種の直接購入という方法はオーエンの独創ではなく、すでにイギリスの各地方で民衆の間に存在していた方式をとり入れたものといわれる。<sup>1)</sup>

オーエンの独自のアイディアはこのニュー・ラナークでの協同村の成功をもとにして、協同の原理にもとづく新社会を構想し、協同組合を社会変革の母体としようと考えたことにある。J. Harrison 教授によればそれは今日の社会主義の概念とはやや異質なものであり本来、共同体主義 (Communitarianism) とも呼ぶべきものであった。<sup>2)</sup>



彼はすでにこのプランを1820年に“ラナーク州への報告”のなかで詳細に展開している。その内容はナポレオン戦争後のイギリスの深刻な不況と社会問題を彼の社会改革の「プラン」に従って解決するようにと提案したものであった。この提案はその大胆さによって時の政府や州の政治家たちからは受けいれられなかったが、他方、労働者の側に立つ人々からも悪名高い“work-house”に近いプランとして必ずしも歓迎されなかった。しかし、オーエンの思想に共鳴する熱心な人々によって各地で小規模ながらこの種のコミュニティー (The Village of Co-operation or Owenite Community) が実際に試みられた。

オーエン自身が1825年からアメリカのインディアナ州のニュー・ハーモニーで試みた共産制コロニーも彼の思想の完全な実現を目ざしたものであったし、同じ頃にスコットランドでも Orbiston にオーエン主義者による同種のコミュニティーが建設された (1825～28年)。最近の J. Harrison の研究によればオーエンの影響をうけたこの種のコミュニティーはアメリカには少なくとも16、イギリスでは7、その他3にのぼったという (本稿、Ⅲ、7 参照)。このような運動への参加者は自らを ‘Co-operators’ とか ‘Socialists’ と呼んだ。この運動は1828～34年にかけてさかんになったが1836年に Queenwood における協同村の崩壊を最後に各地で衰退、消滅していった。

ホリヨーク (G.J. Holyoake, 1817—1906) などオーエンにつづく時代の協同組合運動の指導者はオーエンがかかげた理想的未来社会の母体としての Co-operation 観の空想性とオーエンによる協同組合の運営方式の非民主性への批判から出発して、Co-operative Store を消費者としての労働者階級の自助機関として利用する現実的方式に改め、1844年にロッジデイル協会 (Rochdale Society) を設立した。1850年代にはこの方式が定着し、一般化してオーエン的な Communitarianism は完全に払拭されて今日にいたっている。<sup>3)</sup> 従って今日のイギリスにおける協同組合の原型は正しくはロッジデイル方式にもとづくものといえるのであるが、この方式においてもオーエンがはじめに提唱した協会の基本的原則としての協同の精神と教育活動の重視という伝統は受けつがれている。

モウルス氏が労働組合と協同組合の役員を兼ねているように古くから両者の関係は密接でイギリスの協同組合は一面では労働運動の台所ともいえるべき役割を果たしている。このイギリスの伝統ある協同組合も最近のインフレーションや不況のもとで経営はなかなか苦しいと聞いた。都市部では Marks & Spencer などの大資本によるスーパー店形式の全国的チェーン・ストアの進出が著しいが、これらの圧迫も加わって私の滞在中もロンドンのある協同組合の売店は経営不振から閉店の危機に追いやられたと

新聞が報じたことがあった。

当時、そのような経営対策をめぐるロンドンで開かれた協同組合の活動家の代表者会議に出席してきたモウルス氏は「Co-operative の組織を capitalism の添えものとしか考えないものが活動家たちの中にも多い、自分としては capitalism を克服するものとして考えたい」と語っていた。しかし、そのような考え方は今日でもやはり少数派に属するようであった。多くの組合員がそれを既存の体制の中での経済生活の安全をはかる互助組織として利用し、新しい社会体制の実現のための組織としてその意義を再考しようとする人は少ないようであった。

はじめに書いたようにモウルス氏は生粋の建築労働者として Swansea の建築労働者組合の役員を勤めていた。封建的な体質の強く残っているといわれる日本の建築業界に比べてイギリスでは建築工の組合は労働組合としてもっとも古い歴史をもち、その創成期にオーエンとの浅からぬ関係をもっていることによっても知られている。彼らはすでに1830年に建築関係の職人、労務者、技師をふくむ組合的組織を発足させていたが、そのすぐれた指導者であった James Morrison や建築ギルドの指導者 Joseph Hanson などはいずれも当時オーエンの思想に共鳴して彼に手紙を送り、その指導をあおいでいる。<sup>4)</sup> オーエンにとっても彼が労働者階級の組織としての労働組合の存在とその社会的組織的意義にはじめて積極的な関心をもったのはこの建築工組合からの働きかけによるものであった。もっとも、オーエンが労働組合の社会的意義として評価したのはあくまで自らの社会変革の構想——千年王国の早期実現——の手段としての意義であって、その意味では必ずしも組合員たちの目ざすものとは一致しなかった。それが、後にオーエンの Morrison との対立の一因ともなり、また労働組合自体が自らの路線をとりはじめた時にオーエンがこれと遊離してゆく一因となった。とにかく、オーエンは労働組合とのかかわりを一時期深めただけではあったが、その最初に果たした役割は決して小さなものではなかった。それはこれに先だつ協同組合運動における彼の全国組織の実現のための努力ともつながっている。

そもそもオーエンが労働組合に関心をもつようになったのは彼が私財の大半を投じたニュー・ハーモニーでの実験に失敗して1827年6月にイギリスに立ちもどってからのことであった。彼はもうかつてのように自己の社会改革案の実現を求めてすんで支配階級の有力者や議会に働きかけるということもせず、ロンドンでのつましい生活に甘んじていた。彼の新たな関心は当時全国各地にひろがりつつあった Co-operation 運動を彼の理想の実現のために全国的な連合組織に統合しようという試みや、全国衡平労働交換所 (The National Equitable Labour Exchange) の設立に向けられ

ていた。一方、政治的な権利の獲得を目ざして議会にたいする運動にとりくんでいたイギリスの労働者階級は1832年の議会改革法 (The Reform Act) の結果が期待に反して参政権をもたさなかったことに失望して従来の政治的運動から転じて自らの全国的組織の設立の必要を感じはじめていた。このような状況が労働運動の指導者たちにオーエンの試みへの関心を強めさせたといえる。

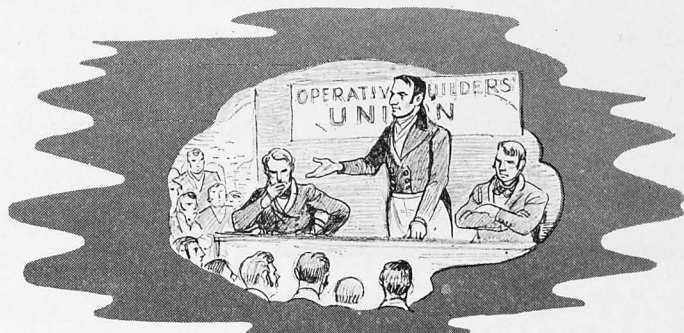
建築工たちの組合 The Operative Builder's Union がオーエンの提案を受け入れて全国的な連合体の形式に向かったのはこのような時期であった。1833年9月に Manchester で行われた建築工組合の代表者会議 Builder's Parliament はオーエンによる全国的な連合組織の結成についての提案を一週間にわたる討論のちに受け入れて、雇用主も含めた建築業関係者のための Grand National Guild of Builders に改組した。この動きはやがて他の職種にも拡大され翌1834年はじめには有名な「全国労働組合大連合会 (The Grand National Consolidated Trade Union)」が結成される。<sup>5)</sup> この全国組織の加盟者は短期間に50万人にたったといわれるが、その後1834年3月の Tolpuddle の農業労働者流刑事件に象徴される支配階級からの苛酷な労働組合運動の弾圧の前に短命に終わっている。オーエンはこの連合の会長におされ一時その地位にあったが、もともと彼にとっては労働組合運動自体が目的ではなく、両者の関係は深まることはなかった。しかし、この最初の全国的労働組合連合の憲章にはオーエンの思想の影響が強く示されている。<sup>6)</sup>

モウルス氏が参考資料にと贈ってくれた『グレイト・ブリテンおよびアイルランド建築労働者組合連合の創立100年記念“建築労働者のたたかい”』(“The Building Workers Struggle” Amalgamated Union of Building Trade Workers of Great Britain and Ireland) はこの組合連合の歴史や現在の活動や将来の課題などを豊富なさし絵入りで解説した啓蒙的なパンフレットであった。発行年度は見当たらないが内容からして1949年か1950年度のものと思われる。

その歴史の部分のはじめのページにはオーエンが Manchester で建築工組合の集会の演壇から呼びかけている姿が描かれている (図 No. 13)。その解説にはオーエンが立ち上った労働者たちに彼の社会主義の思想をもって鼓舞し、彼らに深い影響を与え、それが The Operative Builders' Union につづく Builders Union の結成や全国的な労働組合連合の結成につながったいきさつを述べている。(同書 p. 5)

このパンフレットはさらにイギリスの労働運動が100年以上の長きにわたっているの困難をのりこえ、両世界大戦を経て今日の強大な労働組合にまで発展した歴史

## THE BEGINNINGS OF THE STRUGGLE

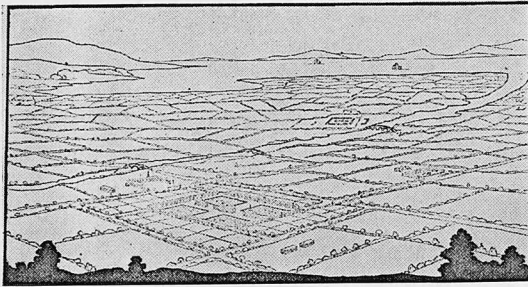


(図 No.13) 1833年9月マンチェスターの建築工組合の大会席上で講演するロバート・オーエン（イギリス・アイルランド建築労働組合連合発行のパンフレットより）

的経緯を解説している。さし絵の中にはこのようなイギリスの労働運動史上の著名な人物の肖像画が多数ふくまれているが、そのうち初期の労働運動に貢献した人物としては Francis Place, Robert Owen, Feargus O'Connor, Ernest Jones とともに Karl Marx, Friedrich Engels の肖像も並んでいる。(同7ページ)

Marx や Engels をイギリス労働運動史のなかで特記すべき人物としてかかげる労働組合はイギリスでは今日必ずしも多いと思われないが、この建築労働組合の100年記念のパンフレットはまさしく二人を「彼らの社会主義思想によって大きく貢献した」人物としてオーエンなどと同列にならべているのである。これなども私にとってひとつの発見であった。そういえば古い労働運動の経歴をもつこのモウルス氏の家の蔵書のなかには同氏の愛唱するウェールズの詩人 Dylan Thomas の詩集などとならんで Webb 夫妻のイギリス労働組合史や、イギリスの労働組合の指導者 Tom Mann の著書や Aneurin Bevan の伝記、それに Marx, Engels, Lenin の英訳選集が並んでいるのを見かけた。モールス氏は短い会話のなかでもよく Lenin の著者からの一節を格言でも語るように引用した。この南ウェールズ地方は炭坑労働組合をはじめ古くから戦闘的な労働組合の伝統が強いと聞いたこともうなずけるのであった。

パンフレットの後半は第2次世界大戦後の破壊のなかからのイギリスの再建にふれているが、いかにも建築労働者の組合らしく戦災をうけた都市の再建と新しい都市の建設のプランについて述べている。とくに私の注意をひいたのはそのさし絵として描かれている未来都市の見取図(図 No.15)があきらかに1817年以来オーエンが提起しているコミュニティーの「プラン」(図 No.14)に似ていることであった。半農・



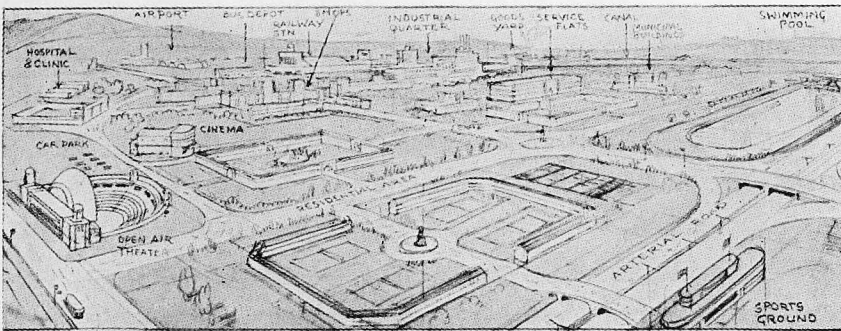
(図 No.14) ロバート・オーエンの「プラン」1817.  
(ロバート・オーエン自叙伝付録より)

半工的な“協同の村”としてのオーエンの当時のプランにくらべて現在の建築労働者の描く未来都市のプランはより多くの工業施設や公共建築物をふくんで大規模な都市計画となっているが、見取図のほぼ中央にある二つの居住区の建物はかつて「オーエン氏の平行四辺形」と呼ばれたものと同じ形を

なしており、広いグリーン・ベルトなどとともにオーエンのアイディアからの影響を明らかに示している。(同、35ページ)

イギリスにおいては労働党政権のもとで戦後いちやくこの種の都市建設の問題がとりあげられ実際に都市および農村計画省 (The Ministry of Town and Country Planning のもとに Stevenage, Crawley, Hemel Hempstead, Harlow, Aycliffe, Easington, Peterlee などにニュー・タウン計画が推進されているということをこのパンフレットは報じていた 同、34ページ)。イギリスでのこのような新しくつくられている町の景観は産業革命期以来の赤レンガ造りの長屋といった感じの旧労働者住宅街とは違って極めて快適な緑地帯をめぐらした近代的な町並みが特色であった。

かつて5年前に私はウクライナの首都キーエフで第2次大戦中にドイツ軍との戦闘で破壊されつくした町を「全市の公園化」を目ざして緑樹の豊かな町にみごとに復興している姿に深い感銘をうけた。イギリスでもドイツ空軍によって徹底的に破壊された Coventry の復興ぶりや工業都市 Nottingham や Sheffield や Swansea などの



(図 No.15) イギリス・アイルランド建築労働者組合連合のパンフレット“建築労働者たちのたたかい”が描いた新都市の設計。(第2次大戦後)

復興とその都市公害対策ぶりに見るべきものがあるのを知った。その点ではわが国の戦後の復興ぶりが都市計画や公害対策といった面ではなほだしく遅れていることをあらためて痛感した。<sup>7)</sup> Swansea でとくに感心したのは Swansea Bay に面した丘陵地に建っている Swansea University の広々としたキャンパスとそれに隣接する市の中央総合病院の壮大なビルディングであった。それらはかつて石炭王と呼ばれた炭坑主の庭園を市が買い上げて戦後建設した学術・教育と社会福祉のセンターともいうべき場所である。この総合大学のゆったりとした建築設計と豊かな花壇や芝生などはウェールズの人々がかつてオーエンが強調した「環境が人間の性格をつくる」という原理に沿った「人間形成」の場としての学校の環境づくりをさらにたかめていることを示していた。オーエンの学校教育についての思想は主として学童教育にあって高等教育についてはほとんど関心を示さなかったという限界をもっていたが、<sup>8)</sup> 今日のウェールズの人々は、この町の最良の土地を大学に提供して、そこに自然とのみごとな調和をもった新らしいキャンパスを実現しているのである。

戦後、労働党政府のもとでの文教政策はいわゆる 地方大学 (red bricks) 拡充と学生への奨学金制度の充実で見べき成果をあげたと伝えられていたが、私はこの Swansea や Nottingham や Sheffield の大学を訪れて教師や学生たちと接するなかでその事実を確めることができた。

私としてはイギリスの伝統的な大学の中で学生として学ぶだけでなく、イギリスのいろいろな社会層の生きた姿に接したいと常々望んでいたが、幸い、モウルス氏の招待で1969年6月にウェールズの首都 Cardiff で行われたウェールズの炭坑労働者組合の年次祭典 (The Gala Day) を見学した。その日は Gala の会場に隣接する旧城内では近づいた Prince of Wales の就任式に備えて古風な服装の儀仗兵による華麗なパレード練習が行われていた。組合旗の林立する労働組合の祭典会場と極めて対照的でいかにもイギリスのもつ二つの側面を集約的に示している感じであった。

この Gala のプログラムは来賓による演説会、ブラスバンドの競演、スポーツ大会、組合員の美術・工芸品展示会、Coal Queen を選ぶ美人コンテスト、各種バザーがふくまれていて多彩で盛大なものであった。バザーでは私は書籍の販売部でたまたま A.L. Morton の “ロバート・オーエンの生涯と思想”、(*Life and Ideas of Robert Owen*, 1962) と Tradeas Union Congress 発行の “組合運動のなかの婦人たち” (*Women in the Trade Union Movement*, 1955) を見つけて購入することができた。前書はもちろん、後書のなかでもイギリスの労働組合運動の初期におけるオーエンの



貢献についてふれられている。<sup>9)</sup>

この Gala の会場ではじめて知ったことの一つは例の Tolpuddle の農業労働者の組合結成弾圧事件を記念して130余年後の今日も事件のあった Dorchester の Tolpuddle で毎年地元の労働組合が中心になって記念行事を行っているということであった。この事件は当時オーエンの呼びかけで結成されて間もない労働組合の全国的組織 G.N.C.T.U. のメンバーがこの地方の地主によって不当な賃下げを受けていた農業労働者たちの労働組合結成をたすけるために赴いたところを彼らとともに官憲に逮捕され政治的な裁判によってオーストラリアに4人の労働者といっしょに7年間の流刑にされたという事件である。この事件は初期のイギリス労働組合運動の発展に大きな打撃を与えたが、この弾圧にたいして当時もっとも活発な抗議運動を起こしたのは建築工組合であった。ロンドンで行われた当時の大規模な抗議のデモンストレーションではオーエンがその先頭に立ったといわれる。<sup>10)</sup>

Cardiff の Gala の来賓として演説したのは労働党政府の元閣僚 J. Griffiths 下院議員とハンガリーの炭坑労働組合代表であった。ウェールズ地方の住民はいまだに民族意識が強く、とくにイングランドへの反発からアイルランドの場合とは比較にならぬにせよ政府は気をつかっていたようであるが、そこの労働組合のなかには国際主義的傾向が強く根づいていて、この炭坑労働組合の Gala には毎年社会主義国からの労働代表を招いて労働組合の国際的連帯を示しているとのことであった。

Griffiths 氏の演説でも、主催者の南ウェールズ炭坑労働組合会長 G. Williams 氏の演説でもインフレーションのもとでの炭坑労働者の生活難問題とならんで当時労働党政府が提出をほのめかしているストライキ規制をふくむ産業関係法案 (Industrial Relation Bill) への非難が目立った。とくに Williams 氏はこの法案の提出を準備している労働党政府の生産性と雇用担当大臣 Babara Castle 女史の意図を非難してさかんな拍手をうけていた。この会場で私はイギリスの炭坑労働者組合の一面と当時彼らが労働党政府の低賃金政策やストライキ規制対策に強い不満をもっていることをつぶさに知ることができた。周知のように、この Gala の一年後の1970年10月に行われた総選挙では大方の予想を裏切って労働党は敗北した。

〔注〕

1. W.P. Watkins, "Robert Owen and the Co-operative movement", in *Robert Owen, Industrialist, Reformer, Visionary 1771—1858*, by Robert Owen Bicentenary Association, 1971, p.20. (本稿Ⅲ. 7 参照)
2. J. Harrison, "Robert Owen and the Communities". 同上, p.27. (本稿Ⅲ. 7 参照)
3. S. Pollard, "Nineteenth-Century Co-operation, From Community Building to Shop-



- keeping", in A. Briggs & J. Saville ed., *Essays in Labour History*, pp.74~90.
- J. Harrison, *Robert Owen and the Owenites in Britain and America*, pp.245~248.
4. A. Morton, *The Life and Ideas of Robert Owen*. p.42.
5. オーエンと O.B.U. および G.N.C.T.U. との関係については下記の文献参照。  
S. & B. Webb, *History of Trade Unionism*, 1920. pp.130~132.  
G.D.H. Cole, *The Life of Robert Owen*, 3rd ed., pp.280~281.  
M. Cole, *Robert Owen of New Lanark*, pp.185~196.
6. cf. G.D.H. Cole, *op. cit. Appendix*, pp.325~335.
7. あるイギリス人が日本のように公害や都市計画に無関心に経済成長を目ざすのだったらイギリスでも高度成長は可能だと言ったということを聞いた。日本の戦後の経済成長の異例な速さが国民生活の上で住民にいかなる犠牲を強いていたかについて最近のイギリスの雑誌 *Observer* は特集し、ミナマタ病や四日市ぜんそくはじめ日本の大都市における空気汚染などの実状を報じている。"Japan begins to count the cost." *Observer*, 3 Oct. 1971. pp.20~30.
- このようなイギリスでの報道を単に彼らの日本経済の高度成長へのひがみとしかうけとれないとすれば、それこそ economic animal の名にふさわしい心の貧しさを自ら示すものといえよう。
8. M. Browning, "Owen as an educator" in J. Butt, ed. *Robert Owen, Prince of Cotton Spinners*. 1971, pp.61~62.
9. Trades Union Congress, *Women in the Trade Union movement*, 1955. p.26.
10. G.D.H. Cole, *op. cit.* p.281.

#### (4) "危険なメッセージをもった親切な男"

##### ——イギリス上院におけるロバート・オーエン生誕200年記念をめぐる討議から——

オーエンが今日のイギリスの政治状況のなかでどのような形で想起されているかを  
知る上での一つの資料として、イギリス上院における産業関連法案 (Industrial Relation Bill) をめぐる審議過程で1971年5月5日にオーエンの200年記念に関連して行われた討議は興味深い。

この法案の提出の原因となったのはイギリスにおける近年の経済の停滞、インフレーションの進行とこれに伴う最近の大規模なストライキの頻発である。イギリス経済が往年の活況から程遠く、失業率の増大がこの国にとって最大の悩みとなっていることは今さら言うまでもない。インフレーションの進行にともなう生活水準の実質的低下に抗議して最近では山猫争議的なストライキが各地で行われたが、それ以外に1969年から1971年にかけて私の記憶するかぎりの大きなストライキを思いつくまにあげれば、フォード自動車会社の長期ストライキ、ロンドンのドック労働者のストライキ、郵便配達夫のストライキ、ゴミ清掃夫のストライキ、教員ストライキ、電気労働者の

ストライキなど大規模で長期にわたる労働争議がつづいてイギリスの深刻な社会・政治問題となっていた。

ウィルソンのひきいる労働党内閣はこの事態を收拾すべく苦慮したが、結局、ストライキ規制法的な性格をもった法案の提出を試みようとしたものの労働組合と党内左派からの激しい非難をうけて失敗し、産業界と多くの市民層の不評を買った。それは労働者の支持をあてにしながら現実的には資本の利益をも擁護しなければならないイギリス労働党のもつ性格的なジレンマを露呈したものであった。このような政策上の行きづまりが1970年10月の総選挙の労働党の敗北につながったと見るむぎが多い。

一方、政権についたヒース党首のひきいる保守党政権はただちにストライキ規制を含む産業関連法案の議会提出にふみ切るとともに、労働党政権のもとですすめられていた一連の教育改革を国費の節約と教育の自由化という名目で停止もしくは後退させた。とくに教育差別を緩和する目的でつくられたコンプリヘンシブ・スクール（従来の職業専門学校と進学学校との総合を旨とする中等学校）の増設をとりやめ、従来の学校給食費の値上げや無料スクール・バスの廃止をはのめかした。私の知る限りでも、このような保守党の政策は労働党のもとでの社会福祉政策の発展にともなう伝統的階級差別の稀薄化や課税負担の増大に不満をもつ保守的な上層や中層市民にとってかなりの共感をもって受けいれられたのである。

選挙に敗れた労働党は選挙後の党大会までも党内左派からの旧執行部への責任追求や批判が見られたが、結局、党大会での役員改選は再びウィルソン氏を党首に選出した。このことは党の方針が総選挙の敗北にもかかわらず大局的には変化をしなかったことを物語っているといえる。しかし、イギリス労働党が今後保守党政権下において次の政権を目指して労働組合や一般市民に新たな働きかけをするに当たっては労働党左派の機関紙 *Tribune* が主張するように党の執行部が従来敢えてとりあげようとしなかった社会化という問題をあらためて本格的に再検討する必要も生まれてくるであろう。

1971年5月5日のイギリスの上院の討議で労働党議員のグリーンウッド卿（ロバート・オーエン生誕200年記念協会長の一人）がとくにオーエンと今日の政治の存り方について発言し、これをめぐって数人の議員の発言が行われたのは以上のようなイギリスにおける政治状況とも関連していたのである。

この日の上院での討議の様子はすぐ翌日の5月6日付の *The Times* と *The Guardian* の二つの全国紙に報ぜられた。イギリスの議会での議事録は政府刊行物として

市販されるので、正確を期すためにはそれを入手すべきなのだが、まず両紙の記事を送られたので、それをもとにして、ここでは当日の討議の概要を紹介するにとどめる。<sup>1)</sup>

*The Times* の5月6日号にはその前日の上院での討議について “The kindly man with a dangerous message” と題して労働党や保守党の議員の発言の要旨が紹介されている。*The Guardian* の同日号では “Peers remember Robert Owen” と題して7人の発言者の発言の要旨が記載されている。両紙の報道の内容は同一発言者の発言についても多少ニュアンスが異なる部分があり、それぞれ切り捨て難い内容を含んでいる場合もあるので、私の以下の紹介では、*The Times* の報道を (T)、*The Guardian* のそれを (G) と略記してそれぞれの出所をあきらかにして相互に補足しながら当日の討議の輪かくをうかがう資料としたい。

まず両紙の書き出しを紹介しよう。

「上院は産業関係法をめぐる彼らの長い暑い夏から一日を割いて 200 年前の次週に生まれたロバート・オーエンの哲学と背景と言説について論じあった。この社会主義的改革者で、その社会主義についての多くをスコットランドで説き実践したウェールズ人はローゼンディルのグリーンウッド卿（労働党）から上院に紹介された」(G)

「グリーンウッド卿はロバート・オーエンの業績に関連して、オーエンの生誕 200 年記念祭への注意を喚起し、目下政府の責任の範囲にある社会的・産業的諸問題を念頭において、彼（オーエン…訳註）は50万人の子供たちの昼食を奪う学校給食の値上げに激しく反対したであろうと語った。（労働党かっさい）」(T)。

グリーンウッド卿はさらにオーエンの最大の勝利は彼の死後に「国家における偉大な勢力の一つとして労働運動を創設したことによって達成された」(G) と述べ、さらに「ある点ではオーエンは愚で非現実的であった。しかし、われわれは彼の失敗ゆえに彼の名の栄光、彼の目的の高尚さ、あるいは彼の達成の偉大さを減ずることを認めることはできない」(G) と語った。また今日のイギリス経済の不況対策に関連して「オーエンは富の過剰 (superabundance) あるいは今日では過剰生産 (overproduction) と呼ばれているものは需要の管理によってのみ、すなわち不況 (slump) の特殊な時期の消費の増加によってのみ可能であるという見解を発展させたのである」(G) とも語っている。

労働党の元閣僚でありオーエンの記念協会の副会長でもあるこの発言者にとって、オーエンの提起した当時の問題はまさに今日につながる問題なのである。

これにつづいて立った大蔵省支払総裁 (Paymaster General) のエクルス卿 (Lord

Eccles, 保守党)の発言もまた逆の立場でオーエンを今日の労働党や自党につながる問題として論ずるのである。

彼は「労働党がいまだにオーエンにいかにも多くを負っているかを知るのは保守党にとって教訓的である」(T)と述べ、彼にとってこの討論に興味を覚えさせたのはそれが「今日労働党のネックとなっているものにかかわるからであり、それは人間性についてのオーエンの見解にもとづいた制度的な干渉主義への巨大な確信であり、それがあまりにも非現実的であるためにオーエンがあればほど高い希望と理想をもって出発した計画のすべてを間もなく失敗させたものなのである」(T)。

エクルス卿は以上のようにオーエンにつながる社会主義的な発想を排斥するが、しかし、保守党の政治家としてのオーエンのもっていた非階級的人間観や確信的指導者としての性格への共鳴を隠さない。

エクルス卿によれば「オーエンはわれわれが雇傭主や労働者を聖者として、また将来の聖者としてのみ、全く掛値なしに扱うべきであるということを、ほれぼれするような天真爛漫さと全くの掛値なしに繰り返し皆さんにその承認を求めるでしょう」(G)ということになり、また善意のみをもってする進歩の夢を決して軽べつしないようにという希望を表明して、全議員の賛同を得たという(G)。

オーエンはこの保守党議員にかかってはヒース首相のひき立て役にもなりかねない。すなわちエクルス卿によればオーエンは本当の靈感をもっていたが「最近10年われわれは公衆の前で説くべき思想をもたず、あるいはそれを半分しか信じていないような政治家たちから被害を蒙っていた」と労働党政権を皮肉ったあと、さらに「ありがたいことに今われわれは妥協主義者でもなく懐疑論者でもない一人の首相をもっている」とウィルソン元首相をひきあいにしてヒース首相をかつぎあげている。

結論的にはエクルス卿によれば「オーエンのメッセージは危険にもなりかねない真理のこわれ易い一片なのである。彼の熱意と親切とをそれが価値あるものならばすべて受け入れよう。しかし、残念ながらわれわれは1970年代の建設的な政治をつくりあげる材料を別のところで探さなければならないと言わざるを得ない」(T)ということになる。

*The Times* の記事の表題が「危険なメッセージをもった親切な男」とつけられているのは、この保守党の有力者エクルス卿の率直なオーエン観をとりあげたものなのである。

かつて1840年1月に同じ上院の席上でエグゼターのビショップはオーエンにたいして激しい非難を行い社会主義者の取締りを要求した。それから130年目の上院でブ

ラックバーンのビショップ (The Bishop of Blackburn) はむしろ好意的な論調でオーエンの事業の今日的な意義を説いている。このビショップは「オーエンの生涯と仕事の変らぬ課題は最大多数の幸福の促進であった。産業関係法に今日心を奪われている時に、上院は産業に従事している人々を幸福にする条件の創造に心を配る必要性をしっかりと念頭に置くべきである」(G) と発言した。

保守党のアルポート卿 (Lord Alport) もこの日の発言者の一人であり、「選挙に破れたこの時期に労働党がその党の哲学の夜明けに頼ってインスピレーションの回復を見出そうと模索していることに同情する」(T) と語ったという。

このような保守党系の議員の一連の発言にたいする反発をこめて次に労働党の議員からの発言がつづく。

ソパー卿 (Lord Soper, 労働党) は「産業関係法案は保守党的思想にもとづいている。すなわち、その主要な目的は個人の利益に関係している。コミュニティが優先権をもたねばならない。なぜならば、ただ公平で平和なコミュニティにおいてのみ個人は真の幸福を見出すであろうというのがオーエンの考え方からする判断であったからである」(G) と語った。

マエロー卿 (Lord Maelor, 労働党) はさらに激しく資本主義体制の歴史的な罪過への批判を試みている。卿は家父長制・奴隷制・封建制そして資本制という歴史を通じての社会制度について語り、長い期間にわたって「資本家制度はもっとも残酷であった」と断じた。そして、奴隷にたいしてすら奴隷所有者は食を与え、衣服を与え、家屋をまかなわなければならなかった、「しかるに、炭坑所有者はかつてこれら三つの要素を支給すべく求められた者はなかったし、また決して支給しなかった」(G) と強調した。

最後に保守党の健康と社会保障の担当国務大臣アバーデアー卿 (Lord Aberdare) がニュー・ラナークにあるオーエンによって創建された学校と性格形成学院についての報告があった。「それらは両方とも不幸にもみじめな状況にあり、その修理のための見積りは約25万ポンドである」そして「政府はつねにそのような建造物への援助の要請を検討する用意がある。スコットランドの歴史的建物のいくつかの修復のために相当額の資金が与えられることになっている」(G)。

こうしてこの日のオーエンをめぐる上院の討議は両党の議員からのそれぞれのかなり対照的な意見が述べられ、特に具体的な結論が得られたわけではなかった。しかし討議のなかにはオーエンのもっていた思想と今日のイギリスの社会や政治とのかかわ

りがいろいろな形であらわれていて、オーエンあるいはオーエンの提起した問題は今日なお生きているという印象を与えるのである。

〔注〕

1. この上院での討議の議事録は次のとおり。

Parliamentary Debates, (Hansard)  
*House of Lords, Official Report*,  
Vol. 318, No.95, Tuesday 4 May, 1971,  
Wednesday 5 May 1971,  
Robert Owen-Bicentenary

この稿でははじめに書いた通り、この議事録は利用できなかった。

### Ⅲ. ロバート・オーエン生誕 200 年記念をめぐる イギリスにおける記念行事と印刷物について

筆者がここでとりあげるのは、もっぱらオーエン 200 年記念のためにイギリスにおいて出版された各種のパンフレットや雑誌、新聞などにあらわれた記事や論説、それに記念行事や記念団体の Bulletin などに限られる。これらの資料は1968年から1970年にかけて筆者がイギリスに留学中に自ら入手し得たもの(1)(2)(3)以外はすべて在英中にの先輩佐藤共子さんの好意で筆者に送られたものである。佐藤さんの筆者宛の手紙(1971年5月22日付)の中で書かれていることであるが、これらの資料はイギリスにおいて彼女がオーエン誕生の5月14日を中心とした限られた期間に収集したものであって、その後も各種の印刷物がひきつづき刊行されているはずである。しかし、それにもかかわらず、これらの資料はオーエンの記念に関して、現地イギリスでなければなかなか手に入り難いものが大部分であって、これらの資料を入手し得た筆者にとってはオーエン記念の状況のみでなく、それを通じ今日のイギリスの一面を知る上で大いに参考になった。ここでその概要を紹介するに当たって私が読者に期待するものその点である。

【記念協会と記念行事について】

#### 1. Robert Owen Bi-centenary Association の application form.

イギリスにおけるオーエン生誕 200 年を記念する各種行事の中心になったのが、この Association であった。入会申込用紙にはこの会の代表メンバーや趣旨が印刷されていて、この会の構成や目的を知る上の案内となっている。その記すところによれ

ば協会の会長はスコットランド卸売協同組合長や国際協同組合連合執行委員を兼ねている上院議員の Lord Taylor of Gryfe, 副会長としては労働組合の総書記 Alfred Allen をはじめ、オーエンの玄孫 Mrs. Caroline Dale Owen Baldwin やオーエンの研究家として著名な Mrs. Margaret Cole, Prof. Sidney Pollard, さらに Michael Stewart, Lord Greenwood のような著名な労働党の政治家など各界からの総数29人が名を連ねている。この協会は1969年の末にオーエン生誕 200 年祭を準備するために結成されたという。

それは、「オーエンの思想とわれわれ自身の時代の諸問題との関連について公衆の関心をひき起こすことを一般的な目的」としてかけ、その方法として、とくに「新聞や雑誌の論文や、ラジオ、テレビジョン、また書物やパンフレットを通じ、また討論会や公開集会、展示会、教育的事業による」としている。このほか、この協会の目的としてニュー・ラナークの建物の近代化をすすめている New Lanark Association の仕事を助けることをあげている。

協会の構成メンバーは、ロバート・オーエンの思想が協同組合、労働組合、労働運動においても、教育、経営、その他の諸領域においてもそれぞれ先駆者的で、強力な影響をもっていたために、この協会の会長、副会長、実行委員会のメンバーなどにそれら各界の代表を網羅していることが特色であるとしている。<sup>1)</sup>

協会の趣意としては「ロバート・オーエンはニュー・ラナークにおける彼の仕事によって、労使関係の改善や産業における共通の目的意識の創出のためになされ得べき何事かを示した。そして、今日の労資関係を特色づけている反目は彼の思想が20世紀の諸要求にあてはまることを暗示している」と述べて主としてオーエンの現代的意義を労資関係の解決という面で示した先例として評価するかのようである。それはイギリスが今日直面している最大の難題であるが、この趣旨書の文面から判断する限りではオーエンを社会主義の先駆者として再評価するよりも、かつての不況と階級対立の激発期に「全階級・全国民的協調」をかかげた労資協調的指導者としてのオーエンやニュー・ラナークにおける「産業の指導者」としてのオーエンの思想の有効性を再評価しようという立場に傾いているようである。

このような協会の性格はこの協会の指導的な立場にある人々の思想傾向を示すだけでなく、その人々が属しているイギリスの労働党や主要労働組合や協同組合および学界の非マルクス主義的グループに共通する傾向をも示していると思われる。これが今日のイギリスのオーエン理解の主流的な傾向をあらわしているとも見ることもできるであろう。



〔注〕

1. この協会の会長と副会長の氏名および称号は次のとおりである。

*President:* Lord Taylor of Gryfe.

*Vice-Presidents:* Alfred Allen, CBE. Mrs. Caroline Dale Owen Baldwin. Professor Asa Briggs. Lord Campbell of Eskan. Lord Clydesmuir of Braidwood, CB, MBE, TD. Mrs. Margaret Cole, OBE. Gwynfor Evans, MP. George Goyder. The Rt Hon Anthony Greenwood, PC, MP. The Rt Hon Mrs. Judith Hart, PC, MP. Bert Hazell, CBE, MP. The Rt Hon Douglas Houghton, CH, PC, MP. Lord Jacques of Portsea Island. Harry Jennings. Jack Jones, MBE. The Hon. Christopher Layton. Leonard Matchan. Lord Moyle of Llanidloes, CBE. Stanley Newens, MP. Kenneth Owen. Professor Sidney Pollard. Lord Ritchie Calder of Balmashannar, CBE. Dr. Suren Saxena. Hugh Scanlon. Arthur Skeffington, MP. Sir Robert Southern, CBE. The Rt Hon Michael Stewart, CH, PC, MP. William P. Watkins. Esmond Wright, MP.

## 2. Bulletin of the Robert Owen Bi-Centenary Association No.2, December 1971, p.11

ロバート・オーエン 200 年祭記念協会から送られてきた会報第 2 号 (図 No.16)。はじめの 4 ページにわたり、英国や世界各地において準備されている各種のオーエン記念行事の予告が報じられている。表紙にはロンドンのラッセル・ストリートにある Congress House (TUC の本部の会議場) において、1971 年 5 月 14 日、オーエンの生誕 200 年の日に催される予定の公開集会や同じ場所での展示会、および Leicestershire, Loughborough の Co-operative College におけるロバート・オーエン Summer school が 1971 年 7 月に行われる旨が記されている。はじめの Congress House での記念集会の弁士としては労働党党首の元首相 Harold Wilson やラナーク州選出の国会議員 Mrs. J. Hart, Co-operative College の学長 R. L. Marshall, 交通一般労働者組合の総書記の J. Jones, Sheffield 大学の経済史学部教授 S. Pollard, オーエン協会会長の Lord Taylor of Gryfe の名があげられている。

佐藤さんからの筆者宛の手紙によれば、記念集会の議長は Taylor 卿がつとめ、弁士としては前記の人々以外に公務員全国組合の Mr. A. Fisher が予定されていた Mr. J. Jackson に代って参加した。また、この集会では日本のオーエン研究家として知られる五島茂博士が出席して席上紹介されたということである。

第 2 ページには同所でのオーエン記念展示会のプランが示されている。(この章の

### 3. 参照)

第 3 ページにはオーエンの生地 Newtown において、1971 年の 5 月 14 日に学童に

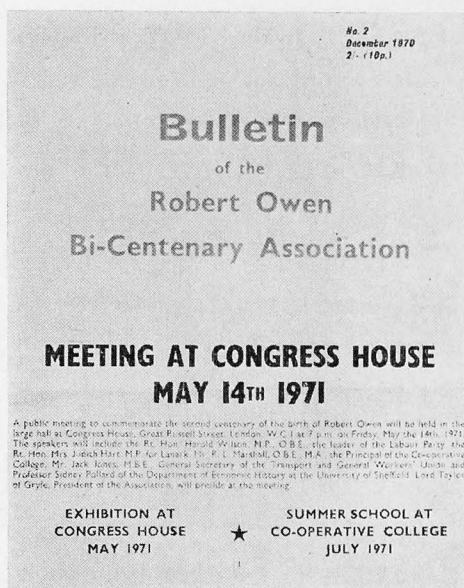
よる記念ペイジェントや同15日には、Sussex 大学の J.F.C. Harrison 教授による Newtown の Memorial Gallery における記念講演が行われることが予告されている。

同ページにはその他の集会として、ロンドンの Charles Street の Dartmouth House で1971年5月15日に予定されている The Society for Democratic Integration Industry によるオーエンのニュー・ラナークでの先駆的な方法による生産の組織化の思想のもつ可能性を現代の諸問題に関連づけて研究する会議について。および Glasgow の Strathclyde 大学で5月22日—24日までに予定されている“the

Victorians and Social Protest” と題する学術討論集会の予告が記載されている。最後に「ロバート・オーエンについての演劇」と題して、Mr.Reg. Groves によるオーエンについての新作の劇が Greenwich Theatre で上演されること、および York の Co-operative Society が Mr. J.R.Gregson 作のオーエンについての劇を再演する予定であることを報じている。

第4ページでは、オーエンが紡績工場の若き経営者としての門出をしたゆかりの地 Manchester で、大学やカレッジや教師たち、ギルド、労組および協同組合などの代表者たちによって、この地域でのオーエン委員会がすでに結成されて展示会や記念講演会がもたれること、Edinburgh では5月14日に Edinburgh 大学の記念の夕べが催され、そこで Strathclyde 大学の経済史学部の Mr. John Butt が講演することが伝えられている。この Butt 氏は最近ニュー・ラナーク時代のオーエンの活動の研究を、オーエン200年記念出版として編集出版した。

第5ページでは、オーエン記念祭をめぐる各地の協同組合や労働組合、労働党、諸学校での記念の催しのプランを掲げているほか海外での動きも伝えている。それによればアメリカのニュー・ハーモニーでは1971年の10月に主な記念行事がもたれる予定で、この日には Indiana 大学で準備されたニュー・ハーモニーの記録フィルムの上



(図 No. 16) イギリスのロバート・オーエン生誕200年協会の紀要 No.2 (1970年12月発行) の表紙

映のほか、前 Indiana 州知事 R.Branigin 氏によって、オーエンが開いたニュー・ハーモニーの事業が Indiana およびアメリカ合衆国におよぼした影響について講演する予定を報じている。翌 16 日には、Indiana 大学で Dr. J.F.C. Harrison や Dr. R.G.Clouse, Dr.M.Curti などのオーエン研究家による報告とパネル・ディスカッションが予定されている。

そのほか(第 6 ページ)、アメリカ合衆国の The Co-operative League, フランスの Co-operative の諸組織、ハンガリーの Co-operative 運動などがオーエン 200 年祭を記念すべく計画中であるということを伝えていた。さらに日本で日本ロバート・オーエン協会による記念の催しが計画されていることも報じられている。この項はつづいてオーエンの玄孫である Mrs.Baldwin が 1970 年の前半にこの 200 年祭への関心をひろげるために、日本をはじめ台湾や香港、東南アジア、セイロン、インドをはじめ、ロンドン、ポーツマス、グラスゴー、ニュー・タウン、ニュー・ラナークをまわり、各地で歓迎され、それぞれの記念行事のプランを聞いたと伝えられている(なぜか彼女の訪問国には共産圏がふくまれていない)。

この第 6 ページには、オーエンの 200 年祭の準備のために精力的に世界各地をたび回った Mrs. Baldwin の近況を伝える記事とオーエンの胸像と並んだ彼女の近影が載っている。オーエンの特徴的な目・鼻はそのまま彼女の特徴となっていて、その楽天的な微笑とともに彼女の血統を明らかに示している。

第 7 ページから第 9 ページにかけては、brief bibliography にさざげられていて、オーエンに関する新刊書をはじめ、旧刊書、オーエン自身の著作、オーエンに関する論文など合計 78 項目が示されていて有益である。

第 10～11 ページには、最近のニュー・ラナークの様子が二枚の写真を添えて伝えられている。そのうち、第 11 ページの写真には Robert Owen's School at New Lanark, December 1970, と記されている。すでに私が同所を訪れた時に危険な状態だった校舎の屋根がまるで爆撃を受けたように大きな穴をあけて無残な姿を示している。解説によれば、9 月 25 日に崩れ落ちたということである。

このページから裏表紙にかけては、1、にかかげた Robert Owen Bi-Centenary Association の趣意書の文面が印刷されている。

〔注〕

1. オーエンはニュー・ラナークを去ってアメリカに渡る時にその 4 人の息子たちを連れて行き、後に渡米した次女とともにアメリカ国籍をとらせている。オーエンがニュー・ハーモニーの経営に失敗してイギリスに帰った後も彼らはアメリカに残って活躍し、この国における政治、教育、労働運動、婦人解放運動の分野に大きな貢献をしている。彼らの子孫の中にもそのよ

うな方面での活動家を多くだしている。オーエンの子供のうち早死した1男2女を除く4人は Robert Dale (1801-77), ニュー・ラナーク時代から父を助け、ニュー・ハーモニーでも父を助けて働いている。後にナポリ王国駐在アメリカ公使。

William Owen(1802-42) スイスで学びニュー・ハーモニーで活躍 David Dale Owen(1807-1860), スイスで科学と数学を学びシンシチナ大学で医学博士の学位を取得。地質学の専門家。その孫が Mrs. Baldwin である。

Richard Owen, 軍人として南北戦争に参加。南軍の捕虜を人道的に遇したという。後にバドゥー大学の初代学長となる地理学者。

Jane Dale Owen, オーエンの次女。婦人運動に従事。

参考文献 越村信三郎「ロバート・オーエンの夢と現実」(『ロバート・オーエン論集』 pp.117-118.)

白井厚「アメリカにおけるオウエンとオウエン主義者たち」三田学会雑誌、64巻9号所収。

### 3. Additional Information to the Bulletin.

2. に示した Bulletin No.2 への追加通知。タイプ印刷のワラ半紙大の印刷 1 枚。両ページ印刷。Bulletin No.2 の印刷された1970年12月前後にイギリスにおける郵便労働者のストライキが長期化して、その発送がひどくおくらされていたためにその後のオーエン生誕 200 年記念行事の準備の新しい進行を知らせるために同協会によってつくられたものと記されている。当時、郵便労働者のストライキの影響は深刻でついには私設郵便配達が部分的に許可されたほどであった。こんなところにもオーエン生誕 200 年記念を迎えるイギリスの社会状況があらわれている。

この追加通知のなかで報じられている新しい事実としては、先ず協会のオーエン記念の小冊子の発行予定に関するものである。この小冊子の内容についてはこの報告の 7. に紹介したので参照していただきたい。

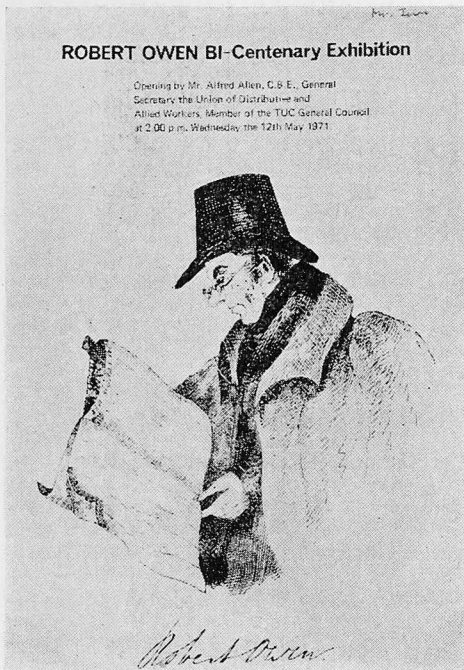
その他、前記のオーエン記念 Summer School における講師の追加の件、1971年4月24日に予定される The Welsh Council of Labour, The Co-operative Party と労働組合の合同による Robert Owen Conference について。および、前記の London, Charles Street の English Speaking Union における1971年5月15日のオーエンに関する集会の行事細目。この会合にはオーエン生誕 200 年記念協会の副会長 Greenwood が出席することや、講演として Mr. W.P. Watkins の労働者の生産協会 (worker's productive societies) による同時代の協同的生産について、Mr. Branko Vuletic によるユーゴーにおける労働者管理について、Mr. R.S.Scott による産業の所有権と労資関係について、などである。

さらに、Edinburgh の会議での講師として Dr. J. Butt が追加されたこと、会議後に参加者によるニュー・ラナークへの旅行が計画されていることが報じられている。

また、海外での記念行事として Prague, Warsaw, Sofia での準備が進んでいるとのことである。

そのほかオーエン記念をめぐる婦人組織や非宗教者組織の動きを示すものとして、この追加通知のなかでは1971年4月27日の Margate での Co-operative Women's Guild の年次会議の席で Lord Taylor の講演が予定されていること。同年5月8日の Swansea における Co-operative Women's Guild の会議でもオーエンの記念について議題とされることが予定されていた。

オーエン研究でも知られるフェイビアン協会員 Margaret Cole 女史はイギリスの非宗教組の組織 The National Secular Society のロンドンでの年次夕食会に招かれ、そこでオーエンと自由思想および非宗教運動の興隆について話す予定であるという。その他前記の Mrs. Baldwin が同年5月12日からイギリスを訪れて協同組合や労働組合その他での講演旅行をすることになっているとも報ぜられている。



(図 No.17) ロバート・オーエン生誕200年記念展示会カタログ。ロンドンの TUC の kongress・ハウスで1971年5月12日から同29日まで行われた。表紙の絵はロバート・オーエンを描いた当時のスケッチとオーエンのサイン。

#### 4. ROBERT OWEN Bi-Centenary Exhibition. "ROBERT OWEN AND HIS TIMES, 1771—1858" An exhibition at Congress House, Great Russell St., London, W.C.1., Wednesday 16 May—Saturday 29 May 1971, Opening by Mr. Alfred Allen, C.B.E., General Secretary the Union of Distributive and Allied Workers, Member of the TUC General Council

このオーエン記念展示会は前出の Bulletin の中で予告されているオーエン記念協会主催、Trade Union, Labour, Co-operative-Democratic History Society の協賛で組織されたもので、これはその展示会の目録である(図 No.17)。この目録はオーエンの生

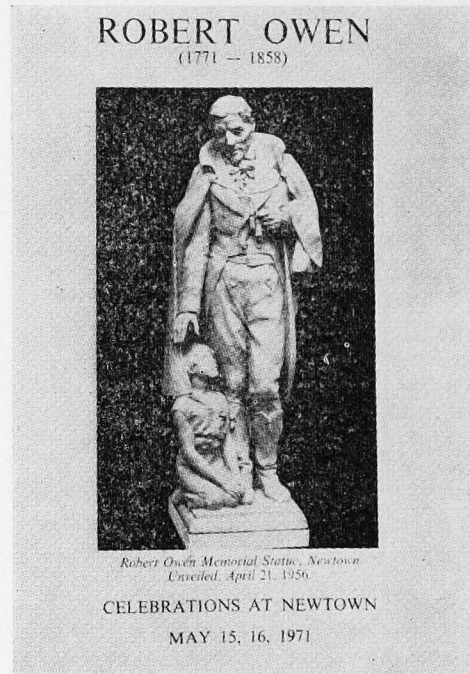


涯の活動と時代的背景をその初期から晩年にいたるまでの30項目について解説を加えている。それは展示会での展示物の解説を兼ねているものであり、オーエンに関する各種の貴重な資料が展示されたことがうかがえる。その中にはオーエン関係の記念メダルのコレクションも含まれている。

5. BI-CENTENARY OF THE BIRTH OF ROBERT OWEN (1771—1858), CELEBRATIONS AT NEWTOWN, MAY 15, 16, 1971. p.4

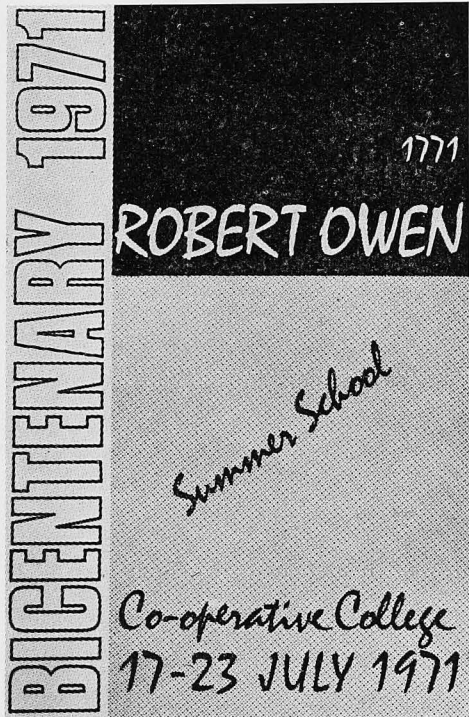
オーエンの生地である Wales の Newtown における記念行事案内。表紙には1956年4月21日にこの町で除幕されたオーエンの記念像の写真が印刷されている(図 No.18)。地上に坐している破衣をまとった幼い少女の頭上に右手を差しのべているオーエンの姿はニュー・ラナークでの学校開設以来児童の救済と教育に情熱を注いだ彼の博愛主義者としての姿をよくあらわしている。行事目録によれば Newtown では、5月15日と16日の両日、Prof. J.F.C. Harrison の講演や展示会、大演奏会、教会による200年祭祈祷および Community Hymn の合唱などが

催されている。(生前あれほど宗教や教会について批判を加えたオーエンにたいして地元の教会は今日でもいざんとして執心している。しかし、それは果してオーエンの心になかったものであるか疑わしい。オーエンの臨終に当たっても、ここの教会は牧師を派遣し、オーエンの友人たちのなかには憤慨して席を立ったものもいたといわれている)。案内書にはこの町にあるロバート・オーエン記念博物館や織物博物館へも立ち寄るようにとすすめている。



(図 No.18) オーエンの生地ニュータウンにおけるロバート・オーエン生誕200年記念祝賀行事のカタログの表紙。(1971年5月15～16日)

6. ROBERT OWEN BI-CENTENARY SUMMER SCHOOL, CO-OPERATIVE



(図 No.19) ロバート・オーエン生誕200年記念にイギリス・レスター州のローバラーにある協同組合カレッジで行われたサマー・スクールの案内書表紙。(1971年7月17日～23日)

COLLEGE, 17-23th July 1971.

前出 Bulletin の中でも予告されていた協同組合学校がオーエンの200年祭を記念して組織した夏期学校の案内状である(図 No.19)。この夏期学校は1971年7月17日から同23日までの一週間開かれたが、この会の講義は Dr. J. Butt による“Owen in his time”を序論として、専門的な研究者によるオーエンの思想と体験の現代の諸問題との関連がとり扱われるということであった。なるほどプログラムによれば、Prof. Pollard による“Owen as Economist”, Mr. H. Scanlon による“Owen as Trade Unionist”, Prof. Armytage による“Owen and the Environment”, Mr. H. Silver による“Owen as Educationist”, Mr. B. J. Rose による“Owen as Co-operator”などの講義とそれにつづく討論が予定されている。最後には、オーエンと現代

との関連についてのグループ討議がセミナーのまとめとして計画されていた。なお、この案内状によれば、この Co-operative College はロンドンから Midland line の列車で行くと Loughborough の近くにある300エーカーの郊外の地に設けられていて、学習上の機能のほか、自己の劇場や水泳プールやテニスコート、球戯用の芝生、クリケット・グラウンドその他の室内・室外のレクリエーション施設をもち、学生たちには個人用の学習室兼寝室とを備えている。その美しい建物と環境の様子は(2)で紹介した Bulletin の第4ページにかかげられた写真によってもうかがうことができる。それは教育活動を重視したオーエンとイギリスの協同組合運動の伝統を生かしているといえる。

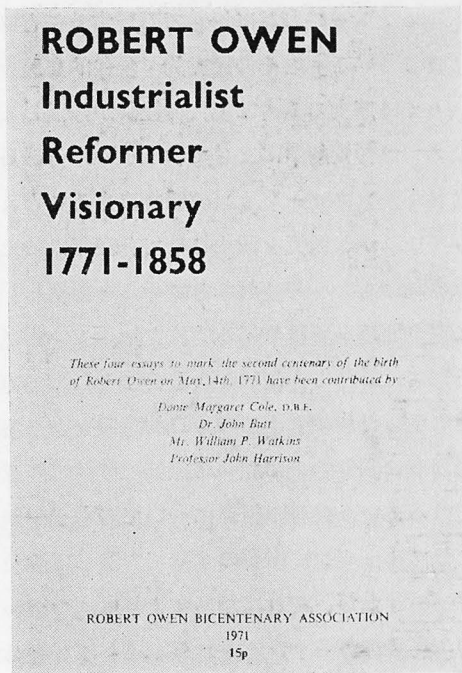


7. ROBERT OWEN: Industrialist, Reformer, Visionary, 1771-1858. Four essays by Dame Margaret Cole, D.B.E., Dr. John Butt, Mr. William P. Watkins, Prof. John Harrison, published by Robert Owen Bi-Centenary Association, May 1971, p.32 (図 No.20).

オーエン生誕200年記念協会が啓蒙用に出版した記念小冊子で執筆者はいずれもイギリスの著名なオーエン研究家と協同組合運動の指導者である。協会の書記 Mr. P. Derrick が付した短い序文ははじめに紹介した協会の趣旨書よりも一層具体的に協会の実行委員としてのオーエンについての評価、とくにその今日的意義についての見解を示している。すなわち、オーエンは教

育、経営、都市計画、その他の領域における先駆者であったとし、とりわけ彼の四分の一世紀以上に及ぶニュー・ラナークにおける仕事を「コミュニティの利益に一致する産業的企業の新しい形態をつくり出すための探求」として高く評価している。筆者によれば、そこで「オーエンは当時の社会を不和にしていた対立が必要ないことを示し、産業革命の結果としての生産の増加にもかかわらず、人々の生活水準は冷酷な経済法則によって下降せざるを得ないのだとした当時の流行経済学説の誤りを示した」のである。

また、この序文の筆者は「オーエンは自分の実例に他の雇主たちが従うであろうとか、“千年王国(millennium)”が二・三年のうちに実現するであろうとか臆測していた点でカール・マルクスその他の人々によって批判をうけているにもかかわらず、彼はよりよい社会についてのヴィジョンによって一世代のすべての労働する人々を勇気づけ、協同組合や労働組合や社会主義運動の基礎を置くことを助けた」と指摘し、彼のニュー・ラナークでの仕事が「150年も前に、コミュニティの真価は生産をそのコ



(図 No.20) イギリスのロバート・オーエン200年記念協会発行の記念パンフレットの表紙。「ロバート・オーエン、産業家、改革家、空想家、1771—1858」(1971年)

コミュニティの利益に沿って組織することによって、産業の中でも実現し得ることを示唆している」とその歴史的・現代的意義を強調している。

とくに序文の筆者は現代の社会が当面している問題状況にふれて、1970年にはイギリスでは労資紛争によって、1,100万労働日にあたるものが失われたことや、現代の世界がインフレーションの掌中にあること、各国政府はその克服に空しい努力をつづけているが、投資を減少させて、長年にわたって高度の失業レベルを導くような諸要求のかせをしょうわされてきていると指摘し、資本家の社会ではインフレーションなしに完全雇用を実現し得る方法を知っているように見える人はないと指摘する。

筆者はこのような状況を改善するための方法として、あらためてオーエンが150年前に示した思想と実践の今日的意義をとりあげるのである。すなわち、オーエンは共同所有の基礎の上に立って産業のすべての成果を肉体労働者と頭脳労働者のために保証するという生産の組織についてのもう一つの道があることを示したという。その道としてオーエンは産業のすべてを通じての所有権の基礎の変革 (transformation) を呼びかけたが、それは筆者によれば、オーエンの先唱したような種類の変化によってのみ可能であろう、とされる。それは、われわれが生産の過程において人々を真の仲間とすることができ、人間による人間の搾取を終らせ、今日われわれを敵対させている諸問題を解決することを可能にするような変革であると。なぜか筆者はそれが具体的には今日のいかなる社会体制を意味するかを語らない。おそらく、広汎な協会のさまざまな立場を配慮してのことであろう。

結論として、序文の筆者はオーエンがよりよき社会を築くための一つの見本を世界に示したこと、労働者や労働組合や協同組合運動はオーエンの生誕200年祭に当って彼の業績を賞讃しているが、しかし、全国民、そして、さらに世界が彼の業績を認知するだけでなく、彼の思想が今日の諸問題にかかわっているということを認める必要があると結んでいる。

この小冊子の本文には表題に掲げられているように4人の執筆者による論文が収められている。

第一の論文は Margaret Cole による “Robert Owen until after New Lanark” と題する11ページにわたるオーエンの生涯と事業に関するスケッチである。われわれはすでに同女史による “Robert Owen of New Lanark” という好著をもっているが、この小冊子でのスケッチはその要約ともいえるべきものである。

第二論文の Mr. John Butt の “Robert Owen and trade unionism” はオーエンが1828年に New Harmony の理想郷の建設に行きづまってイギリスに帰国してから、

当時イギリスでたかまりつつあった労働階級自身による運動のなかで、はからずも指導的地位を与えられて労働運動とのかかわりをもった時点から GNCTU での活躍などによって1830年代初期にはオーエニズムが一時的ではあれ、一つの大衆運動となり、オーエン自身がより急進的になったいきさつをたどっている。この簡単なスケッチによってオーエンおよびその思想がイギリスの労働者運動の中に少なからぬ影響を与えたことを知ることができる。

第三論文は“Robert Owen and the Co-operative Movement”と題する Mr. William P. Watkins の論文である。筆者は1951年から1963年まで The International Co-operative Alliance の理事を勤めた人。彼はオーエンの協同組合運動がその初期に Hazlitt によって、“常識の幹に継木されたオーエン主義の一片”であったと云われたのは、オーエンを“協同組合の父”と呼ぶよりもよほど正確なことだとし、オーエン以前から自発的にイギリスの各地で行われていた地方的で日常的な協同組織がひろく存在したことを認識すべきだとする。しかし、筆者はオーエンとその追従者が新しい社会的組織を信じて、新しい意義づけを与えたことが、労働と小売と住宅とを結びつけることを促進し、その努力によって新しい経済体制としての協同組合を、彼の生前よりむしろ死後の半世紀に実らせていったその歴史的過程を重視しているのである。

筆者はそのような協同組合運動の歴史をオーエンの協同コミュニティーの建設の呼びかけからはじめて、1821年の *The Economist* による共鳴と *The Co-operative Magazine* の出版による協同組合精神の普及、1831年からのオーエンの協同組合の全国的組織の設立のための活動と協同組合会議の会長就任(1832年)、およびその後のこの運動の凋落、オーエンによる The International Co-operative Alliance の組織の試み(1837年)と失敗、Rochdale 方式の台頭などについてふれている。

最後に彼は Co-operative の諸原理は今日なおも、歴史的に継承されているだけでなく、この原則のもとに“人類の進歩と福祉を促進することを目的とする”とした現在の International Co-operative Alliance の特別委員会の声明の中でも生きていと結んでいる。

第四の論文は J. Harrison 教授の“Robert Owen and the communities”と題するものである。オーエン研究家としての著者についてはあらためて紹介するまでもあるまい。この論文にはその最後の注として、教授の1969年のオーエンと、オーエン主義者についての近著にもとづいていることが記されている。論文のはじめの教授の言葉はオーエンの社会主義について大切な指摘を含んでいるのでそのまま引用しよう。

「ロバート・オーエンは彼の生誕 200 年後も依然として“イギリスの社会主義の父”と一般的にみなされている。しかしながら、彼が唱えた社会主義とは協同組合的あるいは共同体的社会主義 (Co-operative or Community Socialism) であった。オーエンは1880年代の後期の社会主義の線に沿って考えていたのではない。彼の方法は基本的には非政治的であり、彼は階級闘争を社会的変化の方法として認めることを拒否した。その代り、彼は社会改革の方法として共同体主義 (Communitarianism) を信じた。彼は社会が実験的な諸共同体という方法によって根本的に変形されると主張した。そして、彼はこれを革命や立法のような他の有効な変化の方法に代り得る正しい方法であるとみなしていた。共同体の創設とは多少とも偶然的な性格の一連の事件のことでなしに、社会的変化の筋道の通った理論を実践に移そうという試みであった。」

(p.27)

教授はオーエンがこの共同体論者 (Communitarian) になった理由として、四つのことを挙げている。第一に彼が同時代の他の人々と同様に、共同体の精神がいかなる社会においても満足すべき人間関係のための基本的な要素であると感じていたこと。当時19世紀初めのイギリスでは社会が分裂し、それ自体に敵対するようになっていたので、オーエンは社会に調和をもたらそうという努力のなかで社会主義者となり、人間を個別化するすべての制度を非難するようになった。第二にオーエンの性格形成の教義と教育的影響の重視からの論理的帰結として、当時の初期産業資本主義よりもよりよい環境を求めることが合理的であったこと。第三に共同体の創設は他の大部分の社会改革のタイプと違っていかなる暴力、あるいはいかなる大衆的支持、あるいは国家の瓦解なしに直ちに着手し得ると考えたこと。オーエンにとって、それはラディカルであり、かつ实际的であった。第四には、オーエンは支持を求めるアピールのなかでイギリスとアメリカの両方でさまざまな形で知られている共同体の伝統を引用できたこと。その意味で、彼の社会に関する新しい見解は新奇だが、しかし、乱暴なものとは思われずにすんだ。さらに教授はこのようなオーエンの共同体的社会主義論が形成され、オーエニズムの中心的なものとなった過程をオーエンのニュー・ラナーク以来の経験と著作のなかでたどっている。1820年に彼が失業者の救済策として提唱した「プラン」は発展して後のオーエンの Community あるいは Village of Co-operative として、オーエン主義の中核をなす制度となってゆくが、当時オーエン主義もしくはその影響のもとにアメリカには少なくとも16、イギリスでは7つと、他に3つの実験的な共同体が創られたという。教授はこれらの短命に終わったさまざまな共同体が組織された場所と時期を挙げ、さらに、それらが作られた目的と性格および解消していっ

た理由を論じている。

以上のようにこの小冊子はロバート・オーエンの生涯やその思想、社会的影響、その今日の意義についての全般的で、最も平易でかつ良心的な啓蒙書となっている。

〔新 聞〕

オーエン生誕記念にちなんでのイギリスの新聞にあらわれた反響をみると、*The Times*, や *The Guardian* のような著名な全国紙では本稿の II.4 に紹介した1971年5月5日の上院におけるオーエンをめぐる討論を報ずる記事が載せられた程度であって特別な記念記事はなかったようである。

左翼系の機関紙のなかでイギリス共産党の新聞 *Morning Star* がオーエンの記念日をめぐる特別な関連記事を載せていないことは、労働党左派の週刊紙 *Tribune* が早くから記念行事を予告し、5月7日号と5月14日号の2回にわたって記念記事をおせていることと対照的である。

8. *Tribune* はイギリスにおける労働組合運動や左翼的な政治グループや平和運動の意見を発表する週刊紙として、イギリスの政治・社会の動向を知る上で貴重な資料であった。私が購読した1969年から1970末にかけてのこの新聞の論調は、労働党政権下でのイギリスの経済的・政治的危機をめぐって、ウィルソンらの政府の内政・外政における妥協的性格を批判し、とくに Mrs. Barbara Castle のスト規制処置の立法化の動きや Mr. G. Brown や Mr. M. Stewart に代表されるアメリカ追随外交を批判し、とくにベトナム戦争支持に反対して強力な論陣を張った。北アイルランドの宗教的差別や南アフリカの人種差別にも反対したし、平和運動家たちの主張を熱心に紹介してきた。また、イギリスの EEC 加盟への動きを非難し、実質を失いつつある各種の社会福祉制度の強化を要求するなど、労働党政府の政策をその社会主義的傾向への強化によってたてなおし、国民の要求に応えるべきだと主張していた。

この新聞では、1970年5月1日号にオーエンの200年記念行事の準備が進められている旨の記事が出ていた。1967年から連載した“The people’s past”と題する、英国の社会主義史上に関係の深い人物の特集シリーズ（たとえば、コペット——A. Arblaster 執筆、ハインドマン——Ch. Tsuzuki 執筆など）でオーエンについては、M. Cole が1969年8月29日号に“The debt we owe to Robert Owen”と題する記事を寄せていた。（本稿Ⅱ．2参照）

# ROBERT OWEN

## the inspiration for modern socialism

ROBERT OWEN, even after the spate of publications which have appeared to celebrate the 200th anniversary of his birth, is still largely an enigma, and there is a good deal of chaff to be removed before one comes to the grain.

His personal achievements flourish fairly early in life. He was a mill manager before he was 20 years old. His circle of friends included Jeremy Bentham, Rowland Hill, William Wilberforce, John Dalton and Edwin Chadwick — all of whom left their mark on one aspect or another of the national life. He told the Manchester Literary and Philosophical Society of the perils of competition, rapid urbanisation, and an unregulated factory system.

He analysed the weaknesses of capitalism very shrewdly and his views carried a good deal of weight because he was an extremely efficient and successful businessman who nevertheless introduced a new spirit of responsibility into the developing industrial scene.

He created a model mill at New Lanark. There he improved the workers' houses, gave them medical treatment, introduced the rudiments of town planning, provided schools for the children on a most progressive basis, sold food at cost price, and refused to have children under ten years of age working for him.

He inspired the campaign to safeguard those whom he described as "the feeble, pale, wretched flax or cotton-spinning children, doomed all the year round to one unvarying occupation for 14 or 15 hours a day." But the Factory Act of 1819 was too weak for him and he left the further work for factory reform to Oastler and Shaftesbury.

Owen developed the labour theory of value and by putting the idea of it across to a working class groping for a solution to its problems and for a cure for their sufferings, gave them self-confidence and knowledge of their own strength.

He himself, however, had

THE celebrations to mark the 200th anniversary of Robert Owen's birth start today (May 14) with a public meeting in London, organised by the Robert Owen Bicentenary Association. Anthony Greenwood assesses here Owen's relevance to modern politics.

by  
**ANTHONY  
GREENWOOD**

no use for class hatred and bitterness and preferred moral regeneration to strike action. Nevertheless, he won the loyalty of workers disillusioned with political action after their exclusion from the benefits of the 1832 Reform Act, and the leaders of the new unions and co-operative societies were largely Owenite in their views.

Co-operators should recall in this bi-centenary year that it was Owen's disciples who gave a new image and a new structure to co-operation, and so influenced events all over the world — including, of course, the developing countries.

In Britain itself, moreover, the Co-operative movement has played a most important part in the wider Labour movement. Trade unionists, too, should remember that the "Tolpuddle Martyrs' offence" was to respond to the urging of Owen's disciples that they should form in Dorset a union for the protection of farm workers.

I think his strength lay in the fact that, in spite of the failure of some of his more Utopian ventures, and in spite of the extreme eccentricity — or eccentric extremism — of some of his views, he got across to the British people as a man who, above all others, pinpointed the failings and dangers of the new industrialism, which he characterised as a "thor-

oughly selfish system."

He argued that under that system there could be no true civilisation, because it meant that men were trained to oppose and often to destroy one another. He became completely tired of partners "who were merely trained to buy cheap and sell dear."

One of the finest tributes to him came from Engels who condemned him in the Communist Manifesto as a Utopian, but had to confess that "all social movements, all real advances in England in the interest of the working class were associated with Owen's name."

His views on the management of the economy are highly relevant to today's conditions, when the unemployed have topped the 800,000 mark and when it appears that to induce unemployment is the Government's only means of dealing with inflation.

He said that over-produc-

tion was the basic problem of an industrial society and the only solution was to manage demand, by raising consumption in times of slump.

He summed up his views in 1857 in his "Letter to the Governed of All Classes in All Nations": "No Government that is incompetent to find good perpetual employment for the working classes in such manner that in return for it they shall be well-placed, fed, clothed, lodged, trained, educated, amused and governed, ought any longer to be allowed by the people to govern them."

One had to admit that Owen was imperious, impatient, intolerant, impatient. But his combined realism and idealism to an impressive degree and his influence over the workers has probably never been exceeded. His humanity shines through everything that he did.

The Labour movement, in his bi-centenary year, would do well to ponder the views of this remarkable man and to reflect upon the way in which he gave the workers the hope of a new society and of relief from the sufferings and injustices that the Industrial Revolution had brought in its train.



(図 No.21) *Tribune* にのったアンソニー・グリーンウッドのロバート・オーエン記念論文。(1971年5月14日)



この新聞がとくにオーエンの200年記念をめぐる二つの記念記事と論説をかかげているのは、その一つが示すようにオーエンの伝統の再評価によって、難局に直面しているイギリス労働党の政策に新たなインスピレーションをもたらそうとする意図につながっている。しかし、イギリス労働党の内部で今日「社会主義」の推進をまじめに主張するほとんど唯一のグループの機関紙でありながら、執筆者の顔ぶれからそれは意外に穏健な論調になっている。

同紙5月7日号はその第7面に“Decay at New Lanark”と題する記事を、ニュー・ラナークの航空写真とともに掲げた。執筆者は Christopher Harrie で Strathclyde University でのオーエンについての研究討論の後に仲間とともにニュー・ラナークを視察した時の報告である、この報告は荒廃しつつあるニュー・ラナークの近況を伝えるとともに、そこで行われたオーエンの社会的実験とその成果を回顧し、この村を再建して博物館とはいわずとも、産業革命期の歴史研究のためのプロジェクト・センターとすることはできるであろうと提案している。

同5月14日号には“Robert Owen, the inspiration for modern socialism”という労働党内閣の元国務大臣 Anthony Greenwood の記念論文がオーエンの肖像とともに載った (図No. 21)。オーエン記念協会の副会長でもある筆者はオーエンの記念をめぐる多数の出版物が出たが、いまだにオーエンの大きな部分が謎であり、穀物を得る前のもみがらがたくさんあると指摘する。彼はオーエンの生い立ちからはじめて、その業績を列挙している。この筆者によればオーエンは資本主義の弱点を鋭敏に分析したが、彼が有能な実業家だったことはその見解に重みを加え、発展しつつある産業に新しい社会的責任感をもちこむことになったという。また、ニュー・ラナークでオーエンが行った多くの先駆的な事業を数えあげるとともに、彼が労働価値説を発展させて、労働者の自己救済の問題への模索にアイデアを与え、彼ら自らの力についての自信を与えたと評価している。筆者がここで強調するのは、この間オーエン自身は階級的憎しみと苦痛とを無用とし、ストライキ行為よりも道德的更生を好んだということであり、それにもかかわらず、彼は1832年の選挙法改正 (Reform Act) の利益からしめ出されて政治的行動に失望した労働者たちの忠誠を勝ち得たし、多くの新労組や協同組合の指導者がオーエン主義者だったという事実である。

さらに筆者はオーエンが協同組合に新しいイメージと構成をもたらしたこと、そして、それは発展途上の国を含めて世界全体に大きな影響を与えたことを協同組合員たちに記憶してもらいたいと記している。

筆者によれば、オーエンの強みは「彼のいくつかのいささかユートピア的な冒険事



業の失敗にもかかわらず、またある種の彼の思想のもつひどい極端さにもかかわらず彼が“完全な利己的体制”と性格づけた新たな産業主義の欠陥と危険を誰よりも摘発した人物として英国の人民の側にあった」点にある。また、「その体制のもとでは真の文明はない。なぜならそれは人間が他人と対立し、しばしばそれを滅すように訓練されることを意味するからである」と指摘して、資本主義体制のもつ反人民的性格を明らかにして、資本主義批判を鋭くうち出した点である。

彼はオーエンが提起した思想が単に当時の歴史状況のもとでの問題にかかわるだけでなく、今日のイギリスの状況にもなお深くかかわっていることに注意をうながしている。すなわち、「オーエンの経済管理についての見解は、失業者が80万人にのぼっており、失業者をもたらしことが政府によるインフレーションに対する唯一の処方であるようにみえる今日の条件に高度に関連している」として、かつてオーエンが生産過剰を産業社会の基本的な問題であるとし、その唯一の解決を不況時における消費の向上による需要の調整であるとしたことを想起せよと述べている。こうした筆者の政治家としてのオーエンの思想のとりあげ方は、論文のしめくくりで、1857年のオーエンの“Letter to the Governed of All Classes in All Nations”をとりあげて、「人民によって存続を認められる政府とは労働階級に恒久的なよい雇用を保証し、その結果、彼らがよい場所で衣食住と訓育や娯楽や政治をうけられるようにする政府である」とするオーエンの言葉を引用しているところにもあらわれている。それは階級闘争を歴史的発展の原動力と認めず主として政府の政策によって完全雇用と社会福祉を徹底させようとする現下の労働党政府の基本的政策目標に合致するように見える。

そのような意味で、筆者はオーエンが威圧的で、熱烈で、不寛容で性急であったことを認めなければならないとしながら、しかし、彼がリアリズムとアイデアリズムをみごとな程度に結びつけていたこと、そして「彼の労働者への影響はおそらくかつて度をすごすことがなかった」(傍点訳者)と強調しているのが注目される。したがって結語として、筆者が「労働運動が彼の200年記念の年にこのすぐれた人物の思想を深め、彼が労働者と新しい社会への希望と産業革命がもたらした災難と不正からの救済への希望を与えた道について、再評価の努力をすべきである」と述べている場合もその意味は自ら限定されたものといえる。

この論文の標題から期待される近代的社会主義のインスピレーションとは、筆者のオーエン論からは今日の労働党の政策の枠を出ていないのであり、おそらく、それはオーエン自身の歴史的限界であるより以上に、この論文の筆者のもつ政治的限界であり、それは同時に今日の英国の労働党の理論と現実政策上のディレンマをも反映して

いるといえるのであろう。たてまえとしては社会主義的理念をかかげながら、現実には私的資本との混合体制に立たねばならぬという労働党政府の矛盾した性格はこの新聞が批判しているところであるが、レーニン 100 年祭やロシア革命 50 周年にかかげたいかにも歯切れの悪い論調には、左派をも含めたイギリス労働党の理論的混迷をうかがえるものがあった。イギリスの根深い保守主義や collectivism に反発する個人主義の伝統の中での資本主義批判はオーエンがかつて現実にあつた最大の難関であったが、それは同時に今日のイギリスの社会主義者にとっての難題でもある。しかし、この同じ新聞の紙面に、中国やラオスの解放区の実情報告が写真入りで報ぜられ、人民公社を含めてそこにこそオーエンの夢見たであろう、働く人々による強靱で新鮮なコミュニティの息吹きを感じられるのは興味深い歴史的現実といえるであろう。

〔雑誌論文・記事〕

次に、オーエン 200 年記念に関するマルクス主義的な立場からの論評を紹介しよう。

9. Ruth and Edmund Frow: "Robert Owen and the Early Socialists" On the Bicentenary of Robert Owen's Birth, *Marxism Today*, May 1971, pp.147 ~152.

イギリス共産党の理論雑誌として知られている *Marxism Today* の 5 月号にオーエンの生誕 200 年記念のために、として載った啓蒙的な論文である。筆者の Edmund Frow 氏は労組 A.U.E.W. のマンチェスター地区委員であり、Ruth Frow 氏は中学校の副教頭である。表題が示すように、この論文はオーエンとそれに先行するかもしれない同時代の英国の初期の社会主義をとりあげて、その中に労働価値説の思想や階級観念や階級闘争の観念がすでに生まれていること、そして、このようなマルクス以前の英国の社会主義や労働運動の歴史のなかの豊かな伝統を学ぶことをマルクス主義者の責任の一つとしている。そのような観点から、筆者がとりあげている先駆的思想家たちは、John Bellers, Charles Hall, Percy Ravenstone, William Thompson, Thomas Hodgskin, John Bray, およびオーエンであるが、とくにオーエンについては、彼が「初期のイギリスの社会主義者として最も偉大であったばかりでなく、労働運動の発展に最も大きな影響をもっていた」人物として、その献身的活動を讃えている。

筆者たちはまた、オーエンが富者や権力者たちへの呼びかけが聞き入れられず、失望した後に労働者たちに向かったことや労働階級の意見にオーエン主義がもっとも影

響を与えた時期としての年代と 1830 年代と 1840 年代のオーエン主義の機関としての The Halls of Science や、1832 年にオーエンがロンドンとバーミンガムに開いた二つの The Equitable Labour Exchange に言及している。筆者はこれらの諸体験を通じてオーエンが労働者階級への尊敬をもちはじめ、それにとまって彼の家父長的態度が緩和されたこと、その彼が後期の労作の中で労働者たちを “the lower classes” と呼ぶことを止めて “the productive classes” と呼ぶようになったことを指摘している。

最後に、オーエンの生誕記念を祝うに当って筆者たちは、Marx が後年築き上げたものの基礎を置いたオーエンやその同時代人の業績を学び、資本主義体制にたいするイデオロギー的なたたかいの武器を磨くことを呼びかけている。その視角はオーエンを Marx に先立つ社会主義史上の歴史的人物の一人として扱う態度が極めて徹底していて、オーエン自身の独自の個性やその今日的な意味を問う調子は見られない。

10. ロンドンにある Marx Memorial Library の *Quarterly Bulletin*, No.57, January-March 1971, も Bi-centenary of the Birth of Robert Owen という解説とオーエンの著作とオーエンに関する著作の簡単なリストをかかげている。

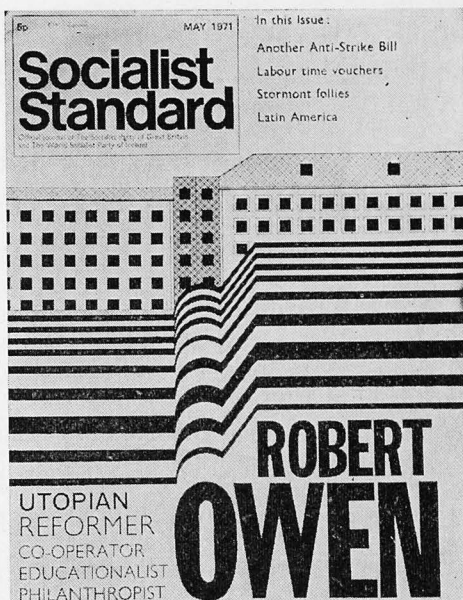
論文の筆者は Mr. Peter Sinclair。ここでもオーエンが、労働階級が自己の階級としての使命を自覚する以前に、自由放任的資本主義の発展が彼らにもたらす不正な結果を拒み、これを変革しようとした偉大な資質を備えた先駆者として、その経歴を描いている。この解説の中で私の興味をひいたのは、オーエンが自らの全く独創と信じていたコミュニー的 “New Moral World” の思想は、マルクスが指摘したように Bentham を通じてオーエンに伝えられたフランスの啓蒙主義期の唯物論哲学者の思想に負うだけでなく、最近ではオーエンがニュー・ラナークに滞在していた時期に吸収した David Hume や Adam Smith などのようなスコットランド人の思想により多く負うと推測されているという筆者の指摘である。(P.10) しかし、それがいかなる研究者による推測なのか、出所が示されていないのが残念である。

読書案内としては、オーエン自身の著作は 8 点と、伝記や研究書が 8 点あげられている。そのうち 10 点はこの図書館で備えているものである。それらには特にめずらしいものは含まれていないが、ここを利用する労働者や学生たちの近代労働史研究のために備えられたものであろう。私はレーニン生誕 100 年記念にこの図書館の展示物や蔵書を調べに通った時に、その廊下にかかげられたイギリスの労働運動史上の人物や文献の写真の中にオーエンの肖像を見たことを思い出すのである。1958 年のオーエンの没後 100 周年記念には、同館でオーエンに因む展示会が開かれたとのことである。

11. Robert Owen Utopian Socialist; *Socialist Standard*, May 1971, pp. 68~69.

Hyndman 批判から出発した純粋マルキストを自称するグループの機関誌 Official Journal of the Socialist Party Great Britain and the World Socialist Party of Ireland と銘うつこの雑誌は5月号の表紙をオーエンの Community Plan をデザインしたと思われる建築物と UTOPIAN, REFORMER, CO-OPERATOR, EDUCATIONALIST, PHILANTHROPIST, ROBERT OWEN という文字を配している。(図 No.22)

論文は Ronald とのみ署名された2ページにわたる短いもので、オーエンの生れた Newtown 時代から Manchester 時代、New Lanark 時代を経て、彼が紡績工場経営者としての手腕をのばすとともに、そこで接した児童や婦女子をふくめた労働者の生活がアメリカの黒人奴隷以下であることを視察し、その改善にとり組みはじめていろいろな成果を生んだ過程がたどられる。それはまず自分の工場で労働時間の短縮を実施することにはじまり、オーエンの児童教育と生産的労働の結合はやがて“工場法”制定へ影響したこと、New Lanark での消費組合方式の売店の開設、児童雇用の廃止、教育と住いの改善。さらには、1820年代の Co-operative Villages の形成の試みや1830年代の労働組合運動への参加や協同組合社会の構想の推進などが語られる。そして、オーエンを今日評価するに当たって念頭におくべきこととしては、彼の時代に彼がすでに都市計画や緑地計画を先唱し、教育面では幼稚園教育の必要を実現し、遊戯の効用を認め、教師の養成の必要を示したこと、産業における人間労働の正しい評価と取扱いを同業者に語り、経済計画を認めたこと、等々。オーエンの多くの計画が失敗していることを考えると、彼への歓声はおどろくべきことだが、しかし彼は自らの試みをすべての社会的病の万能薬としようとせず、単に社会のずっと根本的な変革に向かっての第一歩として考えていたことを心にとどめるべきだと結んでいる。その他この雑誌には、その読書欄でオーエンに



(図 No.22) イギリスの Socialist Standard の 1971 年 5 月号、ロバート・オーエンの生誕200年記念を特集している。

関して、A.L. Morton の *The Life and Ideas of Robert Owen* と Perican 文庫に収められたオーエンの著作集をとりあげて紹介している。(p.p. 76~77)

**12. Who was Robert Owen? by Pat Sloan ; COMMENT, Communist Fortnightly Review, Vol. 9, No. 13. May 8, 1971. p.p. 200~202.**

ロンドンで出版されているコミュニストの隔週刊雑誌の *Comment* もオーエンの生誕 200 年記念をとりあげている。この雑誌の第 1 ページの論文は “U.S. war crimes in Vietnam” と題し、南ヴェトナムでの兵役に服していたアメリカ兵たちの証言を引用して南ヴェトナムにおけるアメリカ軍の犯罪的な行為を列挙して糾弾しているほか、“Drive out the Tories! Britain needs socialism” と題する論説をかかげている。これでもわかるように、この雑誌は「ソーシャリスト・スタンダード」などより実践的なコミュニスト・グループの出版物である。オーエンに関する記事は、はじめに彼の社会進歩への貢献を 8 項目に要約している。すなわち (a) 啓蒙的な経営方法、(b) 労働階級の子どもたちへの教育の導入、(c) 1819 年の最初の工場法、(d) 新しい社会制度 (本質的に社会主義) の思想を開始する、(e) “すべての既存の宗教” を差別と迫害と戦争に導くものとして暴露する、(f) この国の失業問題の部分的解決としての協同組合コミュニティーの計画および不成功に終わったアメリカ合衆国での私財を投入してのより野心的な実践、(g) 生涯の比較的後期における、労働階級の初期の組織への個人的参加、しかし、彼は “boss 階級” のメンバーとしてのある個人的性格を決して失わなかったように見える、(h) 最後に、つけ加えるべきこととして、あらゆる既存の宗教への全生涯にわたる敵視にもかかわらず、オーエンはその晩年熱心な降神術信者 (spiritualist) となったことをあげている。さらにこれらについてのくわしい解説とともに、オーエンの晩年の肖像と彼の発行した *Labour Note* の写真を添えている。

**Ⅳ. ソ連の出版物におけるロバート・オーエン**

——1918年~1971年の概況——

革命後のロシア——すなわちソ連においてロバート・オーエンがどのような評価を受け、どのように研究され、紹介されているかを知ることにはかなり大きな調査と研究を要する問題である。しかし、この問題は今日、オーエンが単にイギリス一國、あるいは西欧、アメリカ、日本などの資本主義諸国においてのみ関心をもたれている思想

家ではなく、とりわけ社会主義諸国において社会主義思想の先駆者の一人としてうけいれられている以上、オーエン研究の上での必要な研究領域の一つといわざるを得ない。

私の知るかぎりではソ連以外では日本ではもちろん、欧米諸国においてもまだここにかかげたテーマでの調査や研究は発表されていない。日ソ文化交流が不完全な今日、東京でしらべ得る資料は限られているが、私は数年前からソ連におけるユートピア社会主義の研究文献の収集に努めてきたし、幸い、1966年夏から秋にかけてモスクワ大学での国際セミナーに参加する機会を与えられて、モスクワおよびレニングラードにおける大学と図書館を利用したり、現地の書店での文献収集も試みることができた。ここではその間に入手した文献目録や数種のオーエン研究書、選集その他学術雑誌、新聞などの資料をもとに革命後のロシアにおけるオーエンに関する出版状況の紹介を中心にオーエンがこの国でいかなる評価を受け、その思想がいかに普及しているかの概況を示した。

ソ連におけるオーエンの基本的な受けとられ方はこの国がマルクス・レーニン主義を建て前とする社会主義国であることから、かつてエンゲルスがその『空想から科学への社会主義の発展』のなかで示した「ユートピア社会主義者」の一人としてのオーエンという評価を前提としていることはいうまでもない。しかし、オーエンをとりあげるソ連の学術書や啓蒙書の内容は著者たちの専門領域や問題意識を反映して一様ではない。そのうえ、国内や世界の状況の変化を反映して自らその問題のとりあげ方の重点や評価の仕方も変わってきていることも見逃せないことであろう。本稿ではソ連における文献リストに助けられて革命以後の出版状況の概要を示し得たものの、それらの文献自体の収集量の不足と私自身の微力のため文献の内容の詳細までをこの紹介のなかで充分明らかにすることはできなかった。この最初の試みがこの領域での今後の研究や調査の手がかりとしてわが国の研究者にとっていささかでも役立てば幸いである。なお、革命前の時期については別の機会にとりあげるつもりである。

## 1. 革命後から第2次世界大戦まで

革命の直後のソ連で最初にあらわれたオーエン関係の書物はヴェー・エフ・トトミアンツの『ロバート・オーエン』という小さな伝記である。4ページというページ数からしてそれはおそらく啓蒙的なパンフレットであったと思われる。しかも1918年に第2版として出版されているので革命以前に出版されたものの改訂版ということであろう。<sup>1)</sup>

1919年には協同組合関係の文庫のシリーズのなかで二種類のオーエン関係の出版物がみられる。そのひとつはカー・アー・パージットノフによる『ロバート・オーエン』<sup>2)</sup>で「協同組合の思想家たち文庫」の一冊として出版された32ページのパンフレット。1918年にもすでに他の版として出版されているとのことである。もうひとつは『協同組合文庫』の一つとして、『協同組合の創始者たちと彼らの精神』<sup>3)</sup>と題して著名な協同組合運動の指導者たちの短い伝記と彼らの論文や演説からの抜粋のロシア語訳とを収録した書物がモスクワで出版されている。その中には、D. Holyoake や J. Gray, C. Kingsley などと並んでオーエンの伝記と彼の『新道德世界の書』からの抜粋が収録されていた。

革命直後に出版されたオーエンについての書物がいずれも協同組合関係の人物として彼をとりあつかっているのは興味深い。それは多分革命前の帝制ロシア時代のオーエンのあつかい方がひきつがれたためであろうが、困難な出版事情のもとでこの種の書物が出版されたのは革命そのものと革命につづく社会主義的改革の性格について一般大衆の啓発をはかるために協同組合方式が広く利用されていたことなどにも関連があるだろう。

オーエンについての理論的研究論文がソ連の出版物に登場するのは1920年代に入ってからマルクス主義の理論雑誌『マルクス主義の旗の下に』が発刊されてからで、1922年から1926年の間に同誌にオーエン関係の四つの論文が発表されている。デー・リャザーノフによる「オーエンとリカウド」<sup>4)</sup> (1922. No.4) とアー・アネクシティーンによる三つの論文「ロバート・オーエンの宣伝と活動からの数頁——（児童と成年労働者の工場における条件の改善についての法律の実施のためのアジテーション）」<sup>5)</sup> (1923. No.8—9) 「ロバート・オーエンの見解における現実的要素と彼の宣伝と活動におけるその影響」 (1923. No.10) および「ロバート・オーエンの学説と宣伝の社会的階級的根源についての問題によせて」<sup>7)</sup> (1926. No.7—8) がそれである。

1925年にはエス・オー・ツェデルバウム（ヴェー・エジョーフ）によるオーエンの伝記（115ページ）が「伝記文庫」の一つとして国立出版所から出版されている。

1926年にはレニングラードの協同組合の出版物のひとつとして、ヴェー・リントヴァーレフの「R. オーエンは協同組合主義者であったか。協同組合史概説第一集」<sup>9)</sup>が出版されている。

この年にはまたオーエンに関する文献目録として「社会主義史に関する書斎のなかのオーエン」<sup>10)</sup>が『マルクス主義年報』のなかに印刷された。これは前年に英文で出版されていたオーエンの文献目録「Bibliography of Robert Owen, the Socialist,



1771—1858, Second edition. 1925.」への増補として発表されたものということである。

以上のようなオーエンの思想や活動についての理論的、文献的な再検討の深まりのなかで、この頃から初期のオーエン—協同組合創始者という評価から労働組合運動や社会主義的思想家としてのオーエンの評価が主流を占めるようになる。すでにそのようなオーエン評価の視点は、F・エンゲルスによる「空想から科学への社会主義の発展」のロシア訳として、またロシア・マルクス主義の先駆者プレハーノフが1913年に書いた論文「19世紀のユートピア社会主義」(1958年にソ連版として国立出版所から再版されている)などによってうち出されていたとはいえ、ソ連におけるオーエンの社会思想についての学術的な研究のはじまりは1920年代の後半まで待たなければならなかった。

ソ連におけるユートピア社会思想史研究の代表的学者として知られる故ヴェ・ベー・ヴォールギン教授<sup>11)</sup>への追悼論文集のなかで「ソビエト歴史記述における西欧ユートピア社会主義研究、1917—1963」(1965年、モスクワ)を書いているヴェー・アー・ドゥナエーフスキーとペー・エフ・ポルシネーフによれば、ヴォールギン教授による1926年の著書『社会主義思想の歴史』をはじめとする一連の社会主義思想史研究におけるイギリス社会思想史への言及をもって革命後のソ連における18世紀イギリス社会主義思想史研究の本格的なはじまりとみなしている<sup>12)</sup>。(図 No.23)

たしかにそこであげられているヴォールギン教授の社会主義思想史研究はその第一巻が1926年に出版されていて、そのなかでは「イギリスにおける社会主義思想」(第九章)でゴドウィンと関連してオーエンについて論じられているが、オーエンが中心にとりあげられているのは1931年に出版された第2巻のなかの「オーエンとその学派；1830—1840年のイギリスの出版物における社会主義思想」という章においてである。<sup>13)</sup>

ヴォールギン教授はまた1931年にソ連でロシア語に翻訳出版された G.D.H. Cole 教授の『ロバート・オーエン』(おそらく、これは G.D.H. Cole の “The Life of Robert Owen” からの翻訳と思われる)に序文を書いている。

ついでながら、オーエンに関する外国語からのロシア訳としてはオーエン自身の著作は別として、そのほかにドイツ語からのリープクネヒトの「ロバート・オーエン」<sup>14)</sup>が1919年にモスクワで出版され、マックス・ペアーの「ウィリアム・オーエンの日記」<sup>15)</sup>が1930年に『K. マルクスと F. エンゲルスのアルヒーフ』第5分冊、の中に印刷されている。

ヴォールギン教授の論文におけるイギリス社会主義思想史のとりあげ方の特色は同教授の専門領域といえるフランス・ユートピア社会思想との比較研究であり、その観

点から同教授はイギリスのユートピア思想におけるフランスとの類似性と独自性について論じているという。

ソ連におけるオーエンに関するモノグラフィーはソ連科学アカデミーの文献目録(1963年)<sup>17)</sup>によるとすでにあげた1925年のエス・オー・ツェデルバウム(ヴェー・エジョーフ)の『ロバート・オーエン』と思われるのだが、しかし、ドナエフスキーとボルシネフによれば、それはアー・イー・アネクシテーインの『ロバート・オーエン、その生涯と学説と活動』<sup>18)</sup>(モスクワ、1937年)ということになる。その解説によれば、アネクシテーインのこのモノグラフィーではオーエンの博愛主義的活動と教育思想に敘述の重点がおかれているという。この書物の著者はオーエンの博愛主義から共産主義への思想的転換をとりあげて、彼の1815年から1820年の間の著作や発言にすでに後の共産主義的世界観の基礎が存在しているとみなしている。またオーエンの社会主義思想の三つの基本的要素として著者は協同、国際主義(国際的連帯の創設)、産業界への宣伝活動、をあげたという。

1940年代に比較的オーエンについての出版物の少ない(3点)のは、この国に大きな災害を与えた第2次世界大戦の影響と考えてよいであろう。1950年代に入るとその数は一挙に3倍(9点)となっている。

#### [註]

1. Тотомианц В. Ф., Роберт Оуэн. Изд. 2-е, испр.—Пг. Мысль. 1918. 24 с.
2. Пажитнов К. А., Роберт Оуэн.—Пг. Мысль. 1919. 32 с.(Б-ка кооперативных мыслителей). Имеется др. изд.: Пг. 1918.
3. Творцы кооперации и их думы. Сб. кратких биографий выдающихся кооператоров с выдержками из их статей и речей.—М. Центросоюз. 1919. 288 с. (Б-ка кооперации).
4. Рязанов Д., Оуэн и Рикардо.—《Под знаменем марксизма》. М. 1922. № 4, с. 4—22.
5. Арк. А—н., Страницы из пропаганды и деятельности Роберта Оуэна. (Агитация за проведение закона об улучшении условий Фабричного труда детей и взрослых рабочих).—《Под знаменем марксизма》. М. 1923. № 8—9, с. 187—210.
6. Арк. А—н., Реалистические элементы в воззрениях Роберта Оуэна и их влияние на его пропаганду и деятельность.—《Под знаменем марксизма》. М. 1923. № 10, с. 163—195.
7. Арк. А—н., К вопросу о социальных и классовых корнях учения и пропаганды Роберта Оуэна и его последователей.—《Под знаменем марксизма》. М. 1926. № 7—8, с. 182—205.
8. Цедербаум С.О. (Ежов В.), Роберт Оуэн.—М. Гос. изд-во. 1925. 115 с. (Биографическая б-ка).
9. Линтварев В., Был ли Р. Оуэн кооператором. Очерки из истории кооперации. Вып. I—Л. Кооперация. 1926. 45 с.

10. Сочинения Р. Оуэна в кабинете по истории социализма [ИМЛ].—《Летописи марксизма》. М.—Л. 1926. № 2, с. 177—179. Дополнения к изданной в Англии Bibliography of Robert Owen, the Socialist, 1771—1858. Second edition. 1925.

11. ヴォールギン教授 (Проф. Вячеслав Петрович Волгин, 1879—1962) はソ連におけるユートピア社会主義思想の研究の最高の権威者として国際的にも知られていた。教授の経歴や研究はイギリスにおける同時代の社会主義思想の研究家 G.D.H. Cole 教授のそれと比べると興味深い。(本稿Ⅱ.2.参照)

ヴォールギン教授はすでに 1890 年代から革命運動に参加していて度々逮捕追放の経験もしている。1897年にモスクワ大学の物理・数学科に入学し、後に歴史・言語学部に移り、1908年に卒業している。在学中の1906年に最初の学術論文を発表した。1908年に「18世紀の革命的共産主義者」(後に1919年に「ジャン・メリエと彼の遺言書」として出版)と題する論文を書き、これがヴォールギン教授のその後半世紀にわたるマルクス以前の社会主義思想研究の出発点となった。

1912年には「フランスにおける18世紀の社会思想」を出版。第1次世界大戦中は作家・マキシム・ゴーリキーの出版した雑誌《レートビーシ》に積極的に参加、1918年には社会主義アカデミー(後の共産主義アカデミー)の組織に参加、1920年に共産党に入党。1919年～30年モスクワ大学教授、1919—29年国家学術会議員、1921—22年教育人民委員部(Наркомпрос)の職業・技術教育中央委員会副議長。1921—23年同高等学校会議議長、1921—25年モスクワ大学総長。また1923—30年に組織されていたロシア社会科学研究諸機関連合(РАНИОН)の歴史研究所や共産主義アカデミー(Комакадемия)の歴史研究所およびマルクス主義歴史家協会の組織者でもあった。

ヴォールギン教授は革命後のこのようなソ連国内の学術団体や教育組織で活躍する一方、国際的な学術会議や交流でもソ連の学会を代表して活躍した。1928年のオスロおよび1933年のワルシャワでの国際歴史家会議の活動に参加。また国際歴史家委員会の会員としてロンドン(1930年)、ハーグ(1932年)、パリ(1934年)、ブカレスト(1936年)の各会期に活躍している。第2次世界大戦後は1947年の全インド学術会議、およびパリにおけるフランスソ連歴史家会議(1958年)にソ連代表団をひきいて出席したのをはじめ、平和建設者世界会議(Всемирный конгресс сторонников мира)の第1次(1949年)と第2次(1950年)会議に参加し、1949～50年は国際平和擁護委員会員を勤めている。

一方、ソ連科学アカデミーにおいて1930～35年に常任書記、1942—53年には副会長の職にあった。1947～51年にはロシア連邦共和国の最高会議の代議員でもあった。

ヴォールギン教授の学問的功績としてはマルクス主義的歴史学者として社会主義思想史研究に新しい領域をつくり出したこととされているが、とくにフランスのユートピア社会思想家を中心とした研究で知られている。この領域での彼の著作は多い。

ヴォールギン教授のイニシアチブで1947年からはじまった『科学的社会主義の先行者たち』(《Предшественники научного социализма》)のシリーズは1962年彼の没年までつづけられ画期的な成果をあげた。同教授はその全巻に序論を書いている。(資料: Советская историческая энциклопедия. Том 3. М—1963) (図 No.24)

12. Дунаевский В.А., Поршнев Б.Ф., Изучение Западноевропейского утопического социализма в Советской историографии (1917—1963). (История социалистических учений, Памяти академика В.П.Волгина, АН СССР. Изд-во «НАУКА» М-1964)



(図 No. 23) 故ヴォールギン教授肖像

13. Волгин В. П., История социалистических идей. Ч. 2. Вып. 1. М.—Л. Соцэкгиз. 1931. 142 с.  
Из содержания: Оуэн и его школа: социалистические идеи в английской публицистике 1830—1840 гг.
14. Кол Дж. Д. Г., Роберт Оуэн. Пер. с англ. С.О. и В.О. Цедербаум. С предисл. В. Волгина. М.—Л. Соцэкгиз. 1931. 200 с.
15. Либкнехт В., Роберт Оуэн [пер. с нем.].—М. 1919. 30 с. (Кому пролетариат ставит памятники).
16. Беер М., Дневник Вильяма Оуэна,— В кн.: Архив К. Маркса и Ф. Энгельса. Кн. 5. М.—Л. Гос. изд-во. 1930, с. 411—414. (Ин-т К.Маркса и Ф. Энгельса).

О деятельности Роберта Оуэна в Америке в 1824—1825 гг. По дневнику сына.

William Owen (1802—1842) はオーエンの次男でその日記はオーエンのニュー・ハーモニーにお

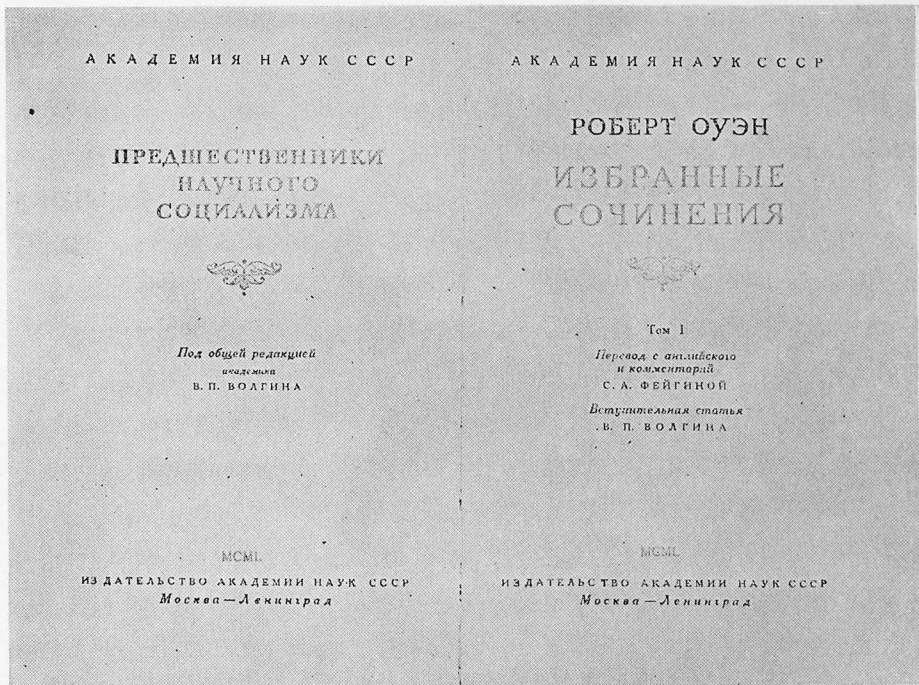
ける活動を伝える貴重な資料として知られている。

17. АН СССР, Фундаментальная библиотека общественных наук, История Англии и Ирландии, библиографический указатель литературы, изданной в СССР за 1918—1962 гг. Составитель А.Н.Байкова. Изд-во М-1963.
18. Анекштейн Я. И., (Арк. А—н). Роберт Оуэн. Его жизнь, учение и деятельность.—[М]. Соцэкгиз. 1937. 287 с., илл.

## 2. 第2次世界大戦以後

1950年代のソ連におけるロバート・オーエン関係の出版物で最も注目されるのは1950年にヴォールギン教授の総監修になるソ連科学アカデミー出版の『科学的社会主義の先行者たち』というロシア語によるシリーズの一環として出版された『ロバート・オーエン著作集』<sup>1)</sup>であろう。(図 No. 24)

このシリーズはヴォールギン教授を中心とするソ連のユートピア社会主義研究の成果の集約ともいうべきもので、その広汎な内容は他に例を見ないものである。ヴォールギン教授は没年の間際まで編集者としてこのシリーズの進行に努力したということであるが、1947年から1962年までの間に次のような思想家たちの著作とその解説が出版された。以下に示す( )内の数字は巻数と出版年度であり、※印のあるものは私自身が入手し得たものを示す。サン・シモンの学説の敘述 (1947、第2版1961)、トマス・モア (1947、第2版1953) モレリ (1947、第2版1956)、カムパネラ (1947第2版1954)、サン・シモン (1948、全2巻)、カペー (1948)、ブオナロッチ (1948



(図 No.24) ソビエト科学アカデミー版“ロバート・オーエン著作選集”第1巻。(1950) 見開  
頁。16.5×11cm

全2巻, 第2版1963\*), オーエン (1950, 全2巻\*), G. ウィンスタンリ (1950), マ  
ブリ (1950), フーリエ (全4巻, 1951~1954\*), ブランキ (1952), メリエ (1954, 全  
3巻), J. ベラーズ (1956\*), T. デザミ (1956\*), ゴドウィン (1958\*), サン・シモ  
ンおよびサン・シモニズム (I—1959. II—1961\*), ワイトリング (1962\*)。

このうちオーエン著作選集の第1巻の巻頭には序論としてヴォールギン教授の約60  
頁におよぶ解説が付けられているほか第2巻の巻末には注としてオーエンの書誌や収  
録論文の注; オーエンの著作目録 (英文)、ロバート・オーエン研究文献目録、人名索  
引などがついている。収録されているオーエンの著作は第1巻は1816年から1820年ま  
でのオーエンの報告や演説を主とし、付録として「ニュー・ハーモニー共同体の憲章」、  
1832年から1834年までのオーエンの雑誌『Crisis』にのった論文・書簡など (オーエ  
ン自身の執筆したもの以外を含む) が収められている。

第2巻にはオーエンの1836年から1849年までの著作を含んでいる。その中にはオー  
エンの『新道徳世界の書』にのった論文からの抜粋も含まれている。これらの収録論  
文のロシア語訳とその注はエス・アー・フェイギーナ女史によるものである。このロシ

ア語訳オーエン著作選集は今日までのソ連における最初の本格的なオーエン著作集である。

第1巻のヴォールギン教授による序論は1950年代のソ連におけるオーエン論の代表的なものといえるであろう。それは全4章からなり、はじめにオーエンの時代的背景としての18世紀末から19世紀はじめにかけてのイギリスの社会事情——労働階級にとつての最も困難な時代としての産業革命期やナポレオン戦争後の不況について解説し、オーエンの生い立ちとその思想形成、ニュー・ラナークとその後の活動をたどる。

ここでは第Ⅱ章を中心としたヴォールギン教授によるオーエンの社会思想の特色づけの概要を紹介するにとどめる。その第Ⅱ章のはじめで教授は次のように記している

「オーエンの社会的学説の基本的諸命題は1820年までに完全に形成されていたものと見られる。彼の1832年から1834年にかけての労働運動への参加は彼の社会的変革の実現方法の理解に若干の新しい点を加えた。しかし、それは人類社会に関する彼の諸観念——社会における支配的な悪の原因についておよび現存する社会制度に代るべき新しい社会制度についての彼の観念——に影響をおよぼさなかった。その後20余年間、オーエンはただすでに彼の意識の中で十分に形成されていた体系に時には若干の小さなヴァリエーションをもちこんだり、新しい議論によって補強したりしながらそれを肥やしたり、通俗化したりしているに過ぎない。

彼のまわりに階級闘争が進展し、数年にわたる彼の労働者組織への接近にもかかわらず、オーエンは生涯の最後まで社会的合理主義としての18世紀の啓蒙主義の忠実な生徒としての自己の理論にとどまった。すでにその最初の有名な著作『人間の性格の形成について』(1813年)のなかで、オーエンは社会が経験している苦難は「われらの祖先たちの迷い」や統治者と同様「被統治者たちの蒙昧さ」によって条件づけられていると信じていた。蒙昧と誤解がオーエンにとってはすべての悪の根源であり、理性と知識が幸福の源であり理性と知識が幸福の源であった。そして彼は結局は蒙昧をすべて人間の道徳の欠如に帰着させている」また、「理性的な社会体制は自然の法則にもとづくべきであり、現存する体制はオーエンは意見によれば自然(または神)の法ではなくて、邪悪な人間の法が支配しているのである」<sup>4)</sup>。

ヴォールギン教授は以上のようなオーエンの思想とその実践的活動との関連性について、彼が啓蒙活動を主な運動の方式として教育活動を重視し、宗教批判、私有財産制度批判などにおける大胆さを発揮しながら、一方では急進的な政治活動にはほとんど期待をかけておらず、むしろ当時激発しつつあった大衆運動を背景に急激な革命の発生をおそれて、それを予防しようと試み、社会的な危機を平和的、方法によって解



決することを自己の課題とみなしたことを指摘している。

ヴォールギン教授によれば「オーエン的な合理主義にとって新しい社会体制へのそのような平和的な移行の可能性は議論の余地のないものである」。<sup>5)</sup> またオーエンにとっては真理はすべての人によって受け入れられ、すべての人々の利益に結びつくことと確信されている。そのために「オーエンの活動が労働運動に密接に結びついていた時期ですら、彼は階級闘争の原則に決定的に反対する発言をしていた」<sup>6)</sup> のであり、その結果として、オーエンは当時のイギリスの労働運動の政治的、階級的な自覚のたかまらなかで、「30年代の終りから40年代のはじめにかけて、自己の理想の実現を目指すすべての国民と“すべての階級の連合”を創設した」<sup>7)</sup>(傍点はヴォールギン)のである。

ヴォールギン教授は以上のようなオーエンの側面を彼の理論や実践における矛盾もしくは限界としてとらえているが、しかし、主としてこれをオーエンの時代の歴史的な状況の反映として理解し、むしろ彼がその実践のなかで多くの矛盾を示しながら長期にわたる運動の過程で資本主義社会のもつ体制的な欠陥を明らかにし、イギリスにおける労働者立法や労働運動や社会主義的運動の発展に大きな貢献をしたことを評価している。結語としてヴォールギン教授は次のように記している。

「とにかく、オーエンの歴史的貢献は偉大である。他の偉大なユートピアンたちと並んで、彼は自己の時代に鮮明で深い資本主義批判を与えた。

40年間も彼は、それがたとえユートピアの形であったにせよ、共産主義の思想を宣伝しつづけた。彼は労働日の法律的制限のために、労働の保護のために、労働者大衆の啓蒙のために、子供たちの社会的教育のために真剣に熱烈に闘った。彼は偉大なユートピアンたちの中で不完全な理論に立脚し、またそのために失敗をしたのだが、社会主義的改革の問題を労働運動と結びつけようと試みた唯一人の人物である。

オーエンは科学的共産主義が自己の先行者とみなす偉大な思想家や活動家たちの中で第一の地位の一つを占める完全な権利をもっている。」<sup>8)</sup>

オーエンをめぐるソ連での出版物としては、このオーエン著作集の後では一層広汎なテーマに及んでいることが注目される。

たとえばオーエンとチャーチズムの関係をとりあげたものとしてアー・エム・デボリーンの二つの論文「ロバート・オーエンの学説」(アカデミー会員アー・エム・パンクラートヴァ記念論文集『労働階級と革命運動の歴史から』モスクワ、1958年所収)および「ロバート・オーエンのユートピア・コムニズムとチャーチスト運動」(『世界文化史年報1959年 No. 6』がある。<sup>9)</sup>これに関連する領域ではさらに1962年にベー・ア



ー・ロジコフによる「オーエン主義とチャーチストたちの間の思想的たたかい」(『社会主義学説史』論文集、モスクワ、1962所収)<sup>10)</sup>が出版されている。

オーエンの教育思想をとりあげた研究としてはアー・オー・セイードフによる「ロバート・オーエンの教育学的思想と活動について(1771—1858年)」(『アゼルバイジャン学校』No. 4 所収1958、バクー)がある。これはソ連でのオーエンの没後100年記念論文の一つでもあろう。<sup>11)</sup>同じく、オー・エヌ・ジケーエヴァによる「ロバート・オーエンの共産主義的コロニーにおける労働教育」(『ソビエト教育学』1959年、No. 5。所収)<sup>12)</sup>がある。1960年には同じ筆者による「ロバート・オーエンの教育学の見解と社会的教育学的活動」(講義報告、レニングラード、1960)<sup>13)</sup>やエヌ・アー・トゥーミム-アリメデングェンによる「R.オーエンの教育学の試みと見解」(モスクワ、教育出版所1960)<sup>14)</sup>がある。

マルクスによるオーエンについての評価をとりあげたものとしては、マルクスと第1次インターの研究で知られるヴェー・エー・クーニナ女史が「マルクスによるロバート・オーエンの活動の評価によせて」(K.マルクス、F.エンゲルス著作部門学術情報報告 No. 3. 1959. モスクワ)<sup>15)</sup>がある。

1958年11月18日、オーエンの没後100年を記念してモスクワではソビエト科学アカデミー哲学研究所と「海外諸国との友情と文化の連携ソビエト連邦社会科学部会」という組織による学術集会が催されている。その集会の概要が『哲学の諸問題』誌1959年 No. 6 の「科学生活」の欄に「R.オーエンの没後百年の日によせて」と題して報じられている。<sup>16)</sup>

その記事によれば、この集会にはソビエト科学アカデミーの通信会員エム・アー・ドウィニークによる「すぐれたイギリスの思想家、改革家」<sup>17)</sup>と題する講演があり、ついで、歴史学博士ヴェー・エム・ラヴロフスキーの「ロバート・オーエンとイギリスにおける産業革命」<sup>18)</sup>と題する報告が行われた。またモスクワ大学の歴史学教授イー・ヤー・シチパーノフによる「ロバート・オーエンと19世紀の先駆的なロシア社会思想」<sup>19)</sup>と題する講演も行われた。この講演ではロシアの18世紀から19世紀にかけての進歩的社会思想の発展は西欧やアメリカにおける社会思想と深くつながっていたとして、オーエンの思想が当時のロシアの思想家たち、ゲルツェン、オガリョーフ、チェルヌィシエフスキー、ドブロリユーボフ、ピーサレフにどのように評価されたかを論じている。

ソ連における今日のオーエン紹介の在り方をしらべるには学術的な文献だけをとりあげているのでは充分ではない。むしろ、この国の学校教科書や副読本などで扱って

いるオーエンをしらべることによって大衆の次元でのオーエンについての理解の内容をうかがうことができるであろう。

そのような意味で、一例として私はエス・ペー・カーンによる上級学校の副読本としてつくられた『社会主義思想の歴史（マルクス主義の形成まで）』<sup>20)</sup>と題する書物に注目したい。この書物は第1版が1963年に12,000部、第2版(改訂)は1967年に20,000部がモスクワの『高等学校』出版所から出版されている。この書物は最近のソ連の歴史学辞典や百科辞典のオーエンの項で僅かにあげられている参考文献のなかにもふくまれていて、いわばソ連の60年代の標準的なオーエン解釈を示すものと考えられる。

この書では16世紀から19世紀までのマルクス以前のユートピア社会主義の歴史が全11章にわけられて記述されている。その第7章がオーエンに当てられた「ロバート・オーエンのユートピア共産主義」という28ページにわたる15項目の記述である。それらの項目を参考までにあげると次の通りである。

「人生行路のはじまり」「オーエン——ブルジョア的博愛主義者。ニュー・ラナーク」「オーエンの工場法のためのたたかい」「ユートピア共産主義への移行」「ユートピア共産主義のオーエン的体系」「オーエンの合理主義の反ブルジョア的傾向・資本主義批判」「オーエン・歴史における個人の役割りについて」「新しい社会を準備する生産力の役割り」「オーエンの思想のなかでの均等化主義の傾向」「合理的社会体制」「共産主義的コミュニオン」「新社会体制への移行」「オーエンの共産主義的実験の失敗」「オーエンの晩年の生活・その個性」「オーエンの思想における神秘主義的要素・神秘主義と社会的ユートピア」「オーエンの共産主義的実験の意義」

その内容も高等学校の副読本とはいえかなり水準の高いもので、ソ連におけるこの種の教育の水準をうかがうことができる。そのすべてにふれることはこの限られた紙面では不可能なので私にとって多少とも興味のあった幾つかの記述の極く一部を一例として紹介したい。

このオーエンの章の敘述が「ロバート・オーエンは人民のなかからでてきた」(p.147)という一行からはじまっているのは印象的である。たしかにオーエンの生涯と思想を考える上でこの事実の指摘は重要であろう。その他著者は「ユートピア共産主義への移行」の項でオーエンのブルジョア的博愛主義者からの転換を1817年とみている。「歴史における個人の役割りについて」の項ではオーエンの歴史認識をカーライルの「英雄と愚衆」の哲学と対比させ、彼があくまでも英雄を歴史的環境の産物とみなしていて、偉大な人物の活動もまた所与の社会的環境に支配されるものでその役割りは社会

環境の合理化にともなって将来その意義を消滅すると考えていたと指摘する。

またオーエンが生産力の社会的意義を重視し、「新しい社会を準備する生産力の役割」を社会変革の保証としてとらえ、自らの体験を通じてその具体的な認識の裏づけをもっていたことでフーリエやサン・シモンにくらべてもすぐれた特色をもっていたという。著者はそもそも「生産力」という用語をはじめて使った人物がほかならぬオーエンであり(1817年)、この用語はその後マルクス主義の基本的概念としてひきつがれたと記している。

「オーエンの思想における均等化主義の傾向」ではオーエンのなかには共産主義への志向と均等化主義への二つの志向が存在していて「衡平労働交換所」の設立はむしろ後者の志向のあらわれとされている。しかし、著者はオーエンのなかでは前者が結局は後者に優越したとみなしている。

カーンはオーエンの活動やその思想の特色をできるだけ多面的に描き出して、社会主義思想の先駆者としての彼の個性やその業績のもつ歴史的意義について明らかにしようとして心をかけている。このような学生向けの副読本からも今日のソ連におけるオーエンの普及の広さと水準の高さがうかがえるのである。

〔注〕

1. Оуэн Р. Избранные сочинения. Т. 1—2. Пер. с англ. и коммент. С.А. Фейгиной. Вступ. ст. В. П. Волгина.—М.—Л. 1950. (АН СССР. Предшественники науч. социализма).
2. ソ連におけるオーエンの著作のロシア語訳としては帝制時代のものを除いては、このフェイギーナ女史訳の2巻選集以外にまとめたものとしては『ロバート・オーエンの教育思想』(R. オーエンの著作からの抜粋集、モスクワ、教育出版、1940年)がある。  
《Педагогические идеи Роберта Оуэна.》 Избранные отрывки из сочинений Р. Оуэна, М., Учпедгиз, 1940.
3. Волгин В.П., Роберт Оуэн. стр. 15~16.
4. Там же, стр. 16~18.
5. Там же, стр. 47.
6. Там же, стр. 47.
7. Там же, стр. 47.
8. Там же, стр. 64.
9. Деборин А. М., Учение Роберта Оуэна.—В кн.: Из истории рабочего класса и революционного движения. Памяти А.М. Панкратовой. М. АН СССР. 1958, с. 605—628.  
Деборин А. М., Утопический коммунизм Роберта Оуэна и чартистское движение.—《Вестн. истории мировой культуры》. М. 1959. № 6, с. 3—16. Резюме на англ. яз.
10. Рожков Б.А., Идеиная борьба между оуэнистами и чартистами. (история социалистических учений. Сборник статей. М., 1962)
11. Сеидов А., О педагогических взглядах и деятельности Роберта Оуэна. (1771—1858гг.).

- 《Азербайджан мектеби》(《Азерб. школа》). Баку. 1958. №4, с. 37—47. На азерб. яз.
12. Зикеева О.Н., Трудовое воспитание в коммунистических колониях Роберта Оуэна.—《Сов. педагогика》. М.1959. № 5, с. 79—89.
- Имеется автореф. дисс. того же названия: Л. 1960. 22 с. (Ленингр. пед. ин-т им. Герцена).
- 北海道大学教育学部、武田晃二氏による邦訳がある。本稿 p.98〔追記〕参照。
13. Зикеева О.Н., Педагогические взгляды и общественно-педагогическая деятельность Роберта Оуэна. Автореф. дисс.—Л. 1960. 22 с. (Ленингр. гос. пед. ин-т им. Герцена).
14. Тумим-Альмединген Н. А., Педагогические опыты и взгляды Р. Оуэна.—М. Учпедгиз. 1960. 164 с.
15. Кунина В. Э., К оценке деятельности Роберта Оуэна Марксом.—В кн.: Научно-информ. бюлл. Сектора произведений К. Маркса и Ф. Энгельса. №3. М. 1959, с. 29—32. (Ин-т марксизма-ленинизма при ЦК КПСС).
16. К столетию со дня смерти Р. Оуэна.—《Вопросы философии》. М. 1959. №. 6, с. 173—177. Подпись: Л. Ш.
17. Дынник М. А. 《выдающийся английский мыслитель и реформатор》.
18. Лавровскиш, В. М. 《Роберт Оуэн и промышленная революция в Англии》.
19. Щипанова, И.Я. 《Роберт Оуэн и передовая русская общественная мысль XIX века》.
20. Кан С.Б., История Социалистических идей, (до возникновения марксизма) Курс лекций. Гос. изд. М-1963, 第2版 М-1967.

### 3. オーエン生誕200年記念をめぐって

ソ連におけるオーエン没後100年記念をめぐる記念行事については前節で記したとおりであるが、1971年生誕200年記念についてはいかなる反響が見られたであろうか。

私が東京の図書館でしらべた限りではソ連の学術雑誌や新聞のなかでは、1971年5月14日を中心とするオーエンの学術的な記念行事の記事は見当たらなかった。同じ5月中にヘーゲル生誕200年記念行事やバリ・コミュニケーションの100年記念の記念集会などについては報じられているのだが、オーエンについての催しは特に報道はないのである。わずかに目にふれたのは教育学関係の定期刊行物『ソビエト教育学』誌1971年5月号に掲載されたアー・イエー・ピスクーノフの論文「ロバート・オーエンの学説における教育の諸問題——生誕200年を記念して——」<sup>1)</sup>と『教育者新聞』1971年5月13日号に載ったユー・ガラヴァーチェンコの記念評論「ロバート・オーエンと彼の社会的教育学」<sup>2)</sup>の二点にとどまった。

私自身の経験からするとソ連ではこのような歴史的イベントや人物の記念日には大学や図書館の一隅でそれに因んだ小展示会や記念の小集会がもたれることが多いので印刷物の上に公示されていないようなオーエンの記念の催しが多分どこかで——たとえば

モスクワのレーニン図書館では各種の記念展示が行われる——もたれたことと思う<sup>3)</sup>。

しかし、今年のソ連でのオーエン生誕 200 年記念が主として教育関係の出版物でとりあげられていることは不思議なことではない。革命前のロシアの進歩的な思想家たちがオーエンの教育活動に注目していたことを別としても、初期のソビエト教育学の創始者の一人とされるエヌ・クループスカヤ（レーニン夫人）がすでにロシア革命の前夜ともいえるべき 1915 年に亡命先で最初のマルクス主義的教育史といわれる『国民教育と民主主義』（1917 年出版）を書いて、そのなかで近代の生産的労働教育の先駆者としてルソー、ペスタロッチ、フェルレンベルクとならんでオーエンの教育活動を取りあげているからである。<sup>4)</sup> 近年のソビエトの教育関係の論文のなかでオーエンについての研究論文が幾つも見られるようになったことは本稿の中でも例をあげたとおりであるが、それもクループスカヤ以来のソビエト教育学の伝統に沿ったものといえよう。

ピスクーノフはモスクワのレーニン名称国立教育研究所に属する教育学者でこのオーエンについての論文はオーエンの教育理論と実践の概要とその歴史的背景や意義について論じたものである。

筆者はオーエンが社会主義の原則の上に立って社会を改革するための有機的な理論をつくり出したばかりでなく、人類の未来の社会組織の見本として共産主義的な共同体をつくり、教育的実践を通じてその理想の実現を試みたという点でマルクス以前の社会主義者たちのなかでも特別に高い評価を与えている。

論文のはじめに筆者はユートピア社会主義思想の生まれた歴史的背景やオーエンの思想形成の過程を概説しているが筆者の力点は彼の教育活動に関する部分にある。

筆者によればオーエンの教育の第一原則は教師を通じて幼児の頃から「個々の人間の利益や幸福と他のすべての人間のそれとの間に存在する明白で不可分なつながり」を教えることであり、この原則はオーエンにとっては「すべての教育の最初にして最後の言葉とすべきものである。<sup>5)</sup>」

またオーエンの教育的方法的特色として筆者は教育における体育（とくに屋外での遊戯や体系的訓練）と労働を通じての実習活動およびダンスや演奏や歌唱を通じての美的感覚の訓練などを不可欠のものとしたこと、幼児教育から成人教育にいたるまでのクラス分けの体系化とそのすべてに徹底した男女共学制などをあげている。しかし、ニュー・ラナークでのオーエンの教育の重点は 10 才までの学童の学校教育にあり、その生産的労働教育についても若い労働者たちに労働のための一般的な準備を与える程度のものにとどまったという。しかも、その内容は必ずしも機械制大工場にふさわしいものではなかったと指摘されている。

筆者によれば、1817年のオーエンの思想の本質的な転換は彼の教育思想にもあらわれている。彼は既存のブルジョア社会における知的労働と肉体的労働の分裂や個人の利益と社会の利益の背反を批判し、両者の結合・調和をはかり、諸国民の力と幸福の同時の実現を旨とする新しい教育理念をかかげる。そして、そのような理念を実現する未来の社会の細胞としての共産主義的なコミュニティの建設に全力を傾注する。

アメリカのニュー・ハーモニーの共産制コロニーはそのような理念の完全な実現を旨として建設されたものであり、そこでは彼の生産的労働教育が実際に試みられたという。また40年代のイギリスにおける同種のコミュニティであるハーモニー・ホールでもオーエンの理念に沿って工場での労働を通じての科学的知識と労働活動の結びつきが試みられたという。このことに関連して、筆者は次のように従来のオーエンの教育活動の研究における盲点を指摘している。

「オーエンの『ニュー・ハーモニー』や『ハーモニー・ホール』における最も興味深い教育学的经验は今日までほとんど分析されていない。だが、それらはおそらく、児童のための学校の教育の中心であったニュー・ラナークの学院の活動よりもはるかに大きな興味のあるものであろうということを確認することが必要である。」<sup>6)</sup>

論文の最後の言葉として筆者はあらためてオーエンの先駆者としての偉大さ（それは同時にイギリスの歴史的経験の先進性であろう）にふれて率直な感想を次のように記している。

「今、ロバー・トオーエンの生誕200年だということを知っても、偉大な思想家、社会主義の予言者オーエンが共産主義の輝かしい姿をはるか彼方に眺め、そして平等な社会、私有財産や人間による人間の搾取のない社会の最初の細胞をつくろうとはじめての試みをしていた時代が、まだ公的に奴隷が存在し、ヨーロッパがナポレオンのまえにおののき、そしてロシアがまだデカブリストたちの出現を準備するだけの時代であったとは全く信じがたく思われる。」<sup>7)</sup>

以上が私なりにまとめたビスクリノフの記念論文の大筋であるが、彼の論文の巻頭にはこの種のソ連の記念論文の定石としてレーニンの著作からの次のような引用がかかげられている。

「『彼ら（サン・シモン、フーリエ、オーエンなどの19世紀のユートピア社会主義者たち……訳者注）はその学説のあらゆる空想性やユートピズムにかかわらずすべての時代のもっとも偉大な頭脳に属している』、彼らは『われわれが今や科学的に証明している真理や真実の無数の可能性を天才的に予言した…』（レーニン全集第6巻26ページ）」<sup>8)</sup>（傍点・訳者）

私はこの引用が筆者にとっては単なる形式主義的なものではなく、彼の論文のモチーフとして引用されたものだと考えたい。そこには、かつてオーエンやその他のユートピア社会主義者たちの夢想し、予言した社会的理想の可能性を今や自国において具体的に実証し、実現しつつあるというソ連の教育関係者の自負と願望とを示しているものと思われる。

そのような調子は同じくオーエンの生誕 200 年記念のために『教育者新聞』に載った前記のガラヴァーチエンコの評論では一層はっきりとうち出されている。日本語訳にして約2000字の短い内容でオーエンの先駆的な教育理論とその実践を簡潔に紹介したあとで、筆者は次のように結んでいるのである。

「オーエンの人生は困難であったが、実りの多いものであった。調和のとれた人間の誕生を倦まず夢見ながら、たたかいつづけたのである。そして、ロバート・オーエンは未来のめでたい勝利への希望を失わずに待ちつづけることができた。

その未来は人類には偉大な10月の実現のなかで、社会主義の世界的な体制の創造のなかで、すべての国と人民へ向けられた全ソ連邦共産党第24回大会の中央委員会の報告の声明の次のような言葉のなかで見られるようになったのである。

『われわれは、社会主義の世界体制が新しい社会を共に建設し、防衛し、お互にそれぞれの経験と知識を豊かにし合っている友好的な諸国民の家族であること——地球上の人々が未来の自由な人民の世界的な共同社会の手本を見るようなしっかりした、力強い家族であることをねがっている。』<sup>9)</sup>

〔追 記〕

すでに原稿の締め切りがすぎたから、上記のソ連文献のうち

オー・エヌ・ジケーエヴァ「ロバート・オーエンの共産コロニーにおける労働教育(1959)」と

アー・イェー・ビスクーノフ「ロバート・オーエンの学説における教育の諸問題——生誕 200 年を記念して——(1971)」の 2 論文が北海道大学教育学部の武田晃二氏によって訳出され解説が付されていることを知った。しかし、私はまだその邦訳を入手していないままにこの稿をまとめるを得なかった。

上記の 2 論文について詳しくは武田氏の翻訳・解説を参照されたい。

なお、ソ連文献の閲覧・収集にあたっては、モスクワのレーニン国立図書館・国際交換部長、カネフスキー氏 (Б.П. Каневский) の御助力を得た、記して感謝に代えたい。

〔注〕

1. Пискунов А.И., Проблемы воспитания в учении Роберта Оуэна (К 200-летию со дня рождения) Советская Педагогика, 1971, No. 5. стр. 129~134.
2. Головатенко Ю., Роберт Оуэн и его социальная педагогика, 《Учительская газета》, четверг, 13 Мая 1971г.



3. 1966年にモスクワのレーニン国立図書館を訪れた時にはグルジアの詩人ルスタヴェーリの生誕 800 年記念、ロシアの作家エム・レシエトニコフの生誕 125 年記念、およびイギリスの作家 H. G. ウェールズの生誕 100 年記念の展示があった。
4. Крупская Н.К., Народное образование и демократия. 1917. (Н.К.Крупская, Педагогические сочинения в десяти томах, Том первый, М-1960. “Роберт Оуэн” стр. 290~297) 邦訳、勝田昌二訳、クルーブスカヤ著“国民教育と民主主義”昭和29年、第1版、岩波文庫。
5. Пискунов А.И., стр. 132.
6. Там же, стр. 134.
7. Там же, стр. 134.
8. Ленин В.И., Полное собрание сочинения. Т.6. стр.26.
9. Гловатенко Ю., Роберт Оуэн и его социальная педагогика. より。

この引用は、1971年3月30日にソ連共産党第24回大会にたいする党中央委員会の活動報告として、中央委員会書記長 L. I. プレジネフが行った報告の1節。

邦訳では刀江書院編集部編「ソ連共産党の目ざすところ」東京、1971. p.36 参照。

## V. 日本におけるロバート・オーエン生誕200年記念

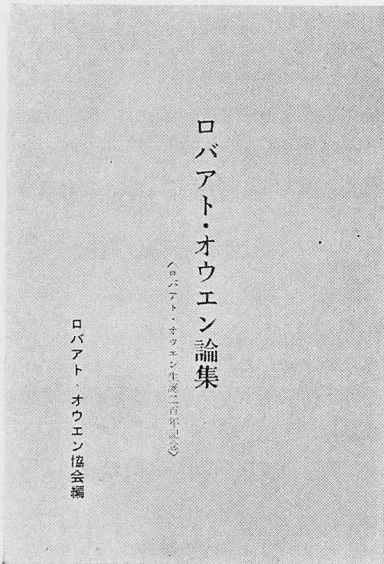
### ——出版物と行事についての点描——

日本におけるロバート・オーエンの生誕 200 年記念をめぐる行事や出版物については、私はとくに網羅的にしらべる期間をもてなかった。したがって、ここでは私の今までに知り得た範囲での行事や出版物について列記するにとどめる。私はこれらの文献からいろいろ教示をうけたが、すでに1958年から日本においてもオーエン研究家を中心に日本ロバート・オーエン協会が結成されているとのことであり、このテーマについての詳しい紹介は私などより適任の方からの発表が期待される。

日本におけるオーエン研究の歴史については土方直史氏による「日本におけるロバート・オーエン研究史」（中央大学経済学研究会発行『経済学論纂』第10巻第3・4号併号所収）がある。その広汎な資料収集と明快な解説によってわれわれは明治期から現代にいたるまでの日本におけるオーエン研究の状況を知ることができる。

オーエンの生誕 200 年記念の出版物としては、日本ロバート・オーエン協会による記念論文集『ロバート・オーエン論集〈ロバート・オーエン生誕二百年記念〉』（ロバート・オーエン協会編、家の光協会出版、昭和46年5月14日発行）がまずあげられるべきであろう。（図 No. 25）

この論集の序に会長堀経夫氏による協会の成立の事情と記念行事の準備について述べられている。またオーエンの玄孫 Mrs. C.D.O. Baldwin からの書簡と1971年5月



(図 No. 25) 日本ロバート・オーエン協会編「ロバート・オーエン論集」1971年。

*The Essays in Honour of Bicentenary of Robert Owen*, ed. by Japan Robert Owen Association, 1971, Tokyo.

松田弘三……オウエン主義成立の意義

——オウエンに対する「新解釈」に寄せて——

白井厚……ウィリアム・ゴドウィンとロバート・オウエン

永井義雄……オウエン主義のセクト的衰退過程

——オウエン生誕百年記念集合のこと——

園乾治……ロバート・オウエン年譜

執筆者はいずれも日本における著名なロバート・オーエン研究家たちである。

この他に大阪府生活協同組合連合会出版の雑誌『都市生活』の Vol. 4, No. 37, 1971が「ロバート・オウエン思想の今日的意味——ロバート・オウエン生誕200年記念に寄せて——」と題する特集を行っている。その執筆者とテーマは次の通りである。

堀経夫……オウエンの主要な業績と我国における代表的な研究書。

永井義雄……オウエンと労働者階級

杉原四郎……オウエンとマルクス

14, 15日のロンドンの kongress・ハウスにおける記念集会での彼女の演説予定草稿「今日私たちの間にあるロバート・オウエン」の邦訳が載せられている。論文の執筆者とテーマをかかげると次の通りである。

本位田祥男……ロバート・オウエンと協同組合

大河内一男……オウエンにおける「人間」の問題

堀経夫……オウエンの「計画」に対するリカードウの批判

五島茂……‘Social System’ (1821) 考

——ロバート・オウエンの一稀観論文について——

越村信三郎……ロバート・オウエンの夢と現実

——ニュー・ハーモニー物語のひとこま——

鈴木祥蔵……ロバート・オーエンの教育  
思想

管沼正久……オーエンと協同組合思想

溝井安太郎……生協思想の父ロバート・オ  
ウエン

執筆者は前書とだぶっているか、この特集  
には現実にわが国での協同組合をはじめとす  
る社会的活動にかかわる問題意識が反映して  
いるのが特色といえよう。(図 No.26)

オーエンの生誕 200 年記念の行事について  
は、私の知る限りでは次のような催しがもた  
れている。

1971年7月3日の国際協同組合デーに東京  
の農協ビルで『ロバート・オウエン生誕 200  
年記念講演会』が催され、五島茂博士の「英  
国におけるオウエン200年祭に出席して」、嶋  
田啓一郎氏の「オウエンと協同組合運動」、

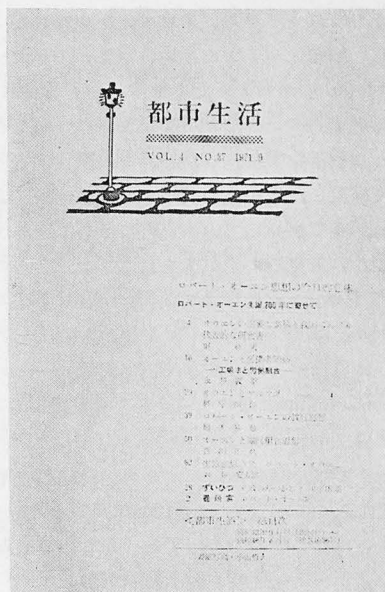
都築忠七氏の「オウエンと政治革命」という講演が行われたということである。また  
神戸においても大河内一男氏らによる同種の講演会があったとも聞いている。

そのほか、東京の中央大学でイギリス研究会が1971年6月26日に例会をもち、その  
席上、同大学の田村秀夫氏の司会で慶応大学の飯田鼎氏による「19世紀イギリス労働  
運動とロバート・オーエン」と題する報告と質疑が行われた。

この飯田氏の報告はその後、経済学史学会の年報第9号に「イギリス労働運動史上  
のロバート・オーエン——生誕200年を記念して——」と題して収録されている(同号  
p.p. 1~10)。なお、この年報には同時に、都築忠七氏による B.M.における新資料の  
発見とそれにもとづく1848年のオーエンのバリにおける動向を紹介した報告「オーエ  
ン研究資料に関する若干の考察」(同号 p.p.23~27) も収められている。

〔追 記〕

1971年11月14日には東京の明治学院大学で経済学史学会の第35回大会が開かれたが、その会場  
の1室で、日本ロバート・オウエン協会によるオウエン生誕 200 年記念に因む展示会があり、堀  
経夫氏所蔵のオーエンの著作物を中心に、貴重な初版本など(記念メダル1点を含む)30数点が  
展示された。<sup>1)</sup> また、五島茂氏が英国のオウエン記念行事に参加されて持ち帰られた記念パンフレ



(図 No.26)『都市生活』Vol.4, No.  
37, Sept. 1971,「ロバート・オーエ  
ン特集」

ット、プログラム、オウエン記念協会の Bulletin (No.1, No.2.)、ニュー・タウンにおける記念行事やオーエンの墓地、ニュー・ラナーク、マンチェスターなどの写真、オーエン Summer School のポスターなど貴重な品々が展示された。この会場では、堀経夫氏、五島茂氏、白井厚氏らのオーエン研究家が展示資料について懇切な説明をされた。私もこの会場で三氏からいろいろとご教示を得た。しかし、この原稿はすでに締切日をはるかに越えていたため、そこでのご教示や拝見した五島氏の英国からの新資料によってこの報告の不足を補うことができず残念であった。私がⅢで紹介している資料のほかに五島氏のもち帰られた記念印刷物の中には、私にとっていくつかの未見のものが含まれていたが、そのうち重要なものは、Bulletin の No.1 (May 1970), Parliamentary Debates Vol. 318, No.95, や *The Glasgow Herald Saturday Extra*, 15 May 1971, その他ドイツ語からのほん訳として、「オーエン思想の19世紀ドイツ社会思潮ならびに協同組合思潮に及ぼした影響」——ロバート・オウエン生誕200年記念論文——Von Erwin Hasselmann, 家の光協会海外資料第83号 1971年11月, その他Ⅳに追記した武田氏によるロシア語論文からのほん訳であった。

その後、白井厚氏のオーエン生誕200年記念論文「アメリカにおけるオウエンとオウエン主義者たち——オウエン生誕200年に寄せて——」(『三田学会雑誌』64巻9号、1971年9月)を寄贈していただいたので追記する。なお、慶応義塾大学図書館ではオーエンの生誕200年記念日を中心に「オーエン文献小展示会」を催したということである。

〔注〕

1. Robert Owen Bicentenary by the Robert Owen Association of Japan. The list of Robert Owen's writings, exhibited at Meiji Gakuin University, Tokyo, on 14 November 1971.

む す び

「それぞれの時代にとって新しいオーエン氏像がある」<sup>1)</sup> J.F.C. Harrison.

産業革命期に巨大な生産技術の発展がもたらす問題を単に経営者としてではなく、むしろそこでの被害者ですらあった労働者階級の立場に立って考察し、万人の幸福を保障する新しい社会の実現を目ざしたオーエンの現代的意義は大きい。オーエンが飽くことなく追求した新しい人間社会の在り方への模索の結果は必ずしも今日現実には受け入れられていないものが多いし、その影響がオーエン自身の意図しなかった結果を生んでいるものもある。しかし、今日までのオーエンにたいする評価の多様さは彼の半世紀にわたる求道者的な探求の過程で彼がもたらしたものの豊富さを反映しているといえる。

かつてオーエンは自らのコミュニティーのプランに「プラトン、ベーコン卿およびトマス・モア卿によって推薦された原理に基づく2000人の共同体のための設計」<sup>2)</sup>と記したことがある。確に、オーエンの人間社会についての理想像はこれらの先人たちの示した理想を集約した面があった。たとえば、オーエンのユートピアにはプラトンやモアのユートピアを特色づける共産制と教育への提言やベーコンの「ニュー・アトランティス」にみなぎる生産技術の重視の思想が結合されているといえる。また、その宗教批判と人間理性への信仰によってオーエンは18世紀啓蒙思想家たちの忠実な弟子の一人であった。

しかし、オーエンはそれらの先人たちが、自らが直面している新しい時代としての産業革命期の課題にとり組まなければならなかった。彼の時代の人類の直面した最大の問題は工業と人間の問題もしくは資本と労働の問題としてまさに現代の問題につながるものであった。オーエンはこの課題の解決のために自ら人道的な経営者としてニュー・ラナークでの「奇蹟」を示すとともに、さらにこれを体制変革の問題としてとりあげ、労働価値説にもとづいて労働階級の救済、ひいては全人類の解放の構想を説いたのである。

当時、ようやく自己の組織的運動をもちはじめたイギリスの労働者階級にオーエンは「生産者階級」としての自覚をもつべきことを説き、また、彼らが直面している社会問題を「資本主義体制」の問題としてとらえることを教えたといわれる。<sup>3)</sup> オーエンの働きかけはイギリスの労働者に最初の全国的な労働組合の結成を促進させた。彼がイギリスのみならず世界中の協同組合運動にとっても偉大な先駆者として認められていることは周知のとおりである。マルクスやエンゲルスは彼を科学的社会主義に先行する空想的社会主義者として評価した。

しかし、G. D. H. Cole 教授も指摘したように、オーエンはその社会改革の指導において同時代の“Radicals”ともちがっていたし、また democratic でもなかった。<sup>4)</sup> 彼は自らの博愛者の信念にもとづいて行動する家父長的な時には教祖的な指導者であった。彼が社会改革に献身した動機は労働者たちの貧窮や隷属状態への深い同情心からであったが、同時にそれは、フランス革命やラッドライト運動に見られた民衆の革命的蜂起による破壊と流血をいかに合理的に回避するかという関心からであった。彼は政治的闘争による解決をほとんど信じなかった。労働者にたいしては、彼はその1817年の訴えのなかで階級的な憎悪や力による解決の無意味さを説き、労資の窮局的な利益の一致を主張した。オーエンにとっては資本家にとっても労働者にとっても真理は一つであり、すべての問題の解決は人々のこの真理への開眼によらねばならず、した

がって啓蒙こそ解決の唯一の方法であった。<sup>5)</sup> とりわけ後半生のオーエンにとってこの真理とは彼によって人々に啓示された「千年王国」にはかならなかったから、彼の活動は発展する労働組合や協同組合の大衆的運動とは次第に遊離せざるを得なかった。しかし、人類社会の合理的改革による調和的な発展を念ずる彼の呼びかけはその死に致るまで続けられたのであった。

オーエンの生誕 200 年をめぐる現代のイギリスやソ連や日本での反響をしらべながら、私はそれぞれの国でのオーエン評価を通じてそれらの国々と、評者たちがかかえている今日的問題についても考えさせられることが多かった。

同じイギリスの国内でもオーエン評価は必ずしも一致していない。1970年に久々に政権の座についた保守党はそれまで労働党政権によって進められてきた社会福祉政策をふくめた社会改革の後退を企てているが、これらの人々にとってはオーエンは今日でもなお「危険なメッセージをもった親切な男」<sup>6)</sup> として敬遠されがちである。しかし、総選挙に敗れた後にオーエンの再評価を通じて「現代的な社会主義への新しいインスピレーション」<sup>7)</sup> の発見を提言した労働党の有力政治家によっても、オーエンは必ずしも現代の資本主義体制の根本的な変革の提案者としてとりあげられてはいない。彼はむしろ人気の薄れつつある労働党の経済政策への多少の手なおしと新しい展望を加えるために呼び返えされたにすぎないようである。オーエンが当時かかげた労働者の労働条件の改善や無料義務教育や各種の社会福祉などの必要はその後 150 年の歴史ととりわけ労働党の政策によって大方は実現されており、今日のイギリスの当面している難題はむしろそれをまかなう経済力の発展の問題であるからである。<sup>8)</sup> そこにはオーエンが目ざした私的資本制の止揚という解決の出る余地はないように見える。保守党と労働党の政策上の差は次第に小さくなったし、Cole 教授が批判したように労働党の政策においてすら福祉政策が社会主義にとって代り、伝統的な社会主義化＝国有化の徹底についての関心は政治家たちの間でほとんど見られないからである。<sup>9)</sup>

しかし、この国での経済問題が深刻化するにつれて、一方では炭坑労働者たちを中心とする労働者たちの間に低賃金政策への反対運動や、広汎なストライキがひきつづき繰りひろげられ労資の対立が激化していることも事実である。それは議会主義の徹底したこの国ではなかなか政治的ストライキにまでは発展しないが、イギリスにおける階級対立意識は依然として消えていないことを示している。

オーエンの生誕 200 年の今日、イギリスの経営研究者たちによってあらためてニュー・ラナークにおけるオーエンの経営実践がとりあげられ労資関係を中心とした経営

の在り方をめぐって討議されたのも以上のような状況の反映の一つであった。また、オーエンとオーエン主義の歴史的意義を当時のイギリスの民衆の側の運動のなかであたらしく照らし出した労働運動史家 E. P. T. Thompson が、あらたな反体制運動を提唱して“Out of Apathy” (1960年) を著した時も、また最近、産業資本による大学支配に抗議して“Warwick University Ltd.” (1970年) を著した時も、彼の念頭には今日のイギリスの労働者階級をふくむ市民の間の政治的無関心のひろがりへのいらだちとともにそのあらたな目ざめにたいする期待がふくまれていたといえる。<sup>11)</sup>

イギリスの若い急進的インテリゲンツィヤのなかでの既存の権威や体制に対する反抗は今日いたるところで示されている。それらは大きな運動とはいえぬまでも、極めてセンセーショナルな形で発揮されるのでいやでも目にとまる。一見平穏なイギリスの大学でも時には急進的学生たちの運動がその伝統的な権威をゆり動かすかに見えた。

オーエンについての若い研究者のなかには従来のオーエン像をくつがえして、保守主義者としてのオーエンを強調する者がある。V. A. G. Gatrell が<sup>12)</sup> その一例であるが、彼はオーエンの思想のすぐれた特色としてそれが組織的な社会運動に結びつく点を評価しながら、その思想の性格として、進歩主義とは相容れないラスキン流もしくはカーライル流の保守性もしくは復古主義が貫いていると指摘する。オーエンの思想のもっているさまざまな限界についてはすでに Cole 教授なども指摘していたが、ラスキンやカーライルとオーエンが同列に置かれるのはいかにも一面的な評価といえる。過去の偶像視に批判的なあまりオーエンの歴史的な位置づけを、単に彼の著作のなかにあらわれた思想傾向だけに拠って試みると、そのような結論も生れかねないのであろう。

オーエンの生誕 200 年記念に先だって J.F.C. Harrison 教授が著した大著 *Robert Owen and the Owenites in Britain and America*, London, 1969,<sup>13)</sup> のなかで同教授は、オーエンの社会主義思想というべきものの具体的な内容として、Communism もしくは Co-operative Society の特色を一層明らかにした。また、200年祭の今年になって記念論文集として 2 冊の画期的なオーエン研究がイギリスで出版された。

<sup>14)</sup> その二つの論文集に収められた諸論文の共通の特色は、いずれも近年のオーエン関係の新しい資料の検討にもとづく実証的な研究によって従来のオーエン像にさらに豊かな内容を加えたことである。たとえばすでに本稿のⅠで参考にした、J. Batt 教授による“Robert Owen as a businessman”などはオーエンの経営者としての知られざる側面を明らかにして、古いオーエン像を変更させるに充分であった。また、本稿のⅡ、1 でもふれたように都築教授によるオーエンの手紙の新発見とそれにもとづく



新研究 “Robert Owen and revolutionary politics” によって、Cole 教授がそのオーエン伝のなかでオーエンの現実的な政治活動からの脱落期としてほとんど重視しなかった1840年代以降のオーエンの、とくに1848年の革命期のパリにおける動向が明らかにされた。オーエンがこの時期に自ら政治革命の渦中であってその経過に深い関心を寄せカベーやルイ・ブランなどフランスの急進的思想家たちとの交流のなかで積極的な提言を行っていることやイギリスの友人へ自らの使命を平和革命のための世論の変革であるとしていることなどは筆者も指摘するように従来のたんなる「千年王国の予言者」としての晩年のオーエンの評価を変更する必要を示唆するものである。<sup>15)</sup>

ソ連におけるオーエンの研究の在り方についても私は本稿では僅かに書誌的な概観を試みるにとどまった。しかし、そこでは革命以来、社会主義の建設過程でオーエンに関する出版物が民衆の啓蒙書からはじまって学術的な研究論文にいたるまで数多く出版されてきたことがあきらかにされた。

先にあげた Cole 教授の所説によればヨーロッパの社会主義の二つの流れのなかで、マルクス・レーニン主義をかかげるソ連の社会主義はオーエン流の社会主義とは別の流れに属している。レーニンもまたオーエン主義を批評して、階級闘争を欠くその協同組合主義的な社会主義と自己の社会主義との異質性を強調した。<sup>16)</sup>

たしかに、レーニンは強力な革命政党の創設によって、オーエン主義的な社会改革の方式の限界をうち破り、労働者や農民と結びついた階級的な革命運動によって世界で最初の社会主義国家を実現した。オーエンがかつて人類の幸福のための彼の「プラン」の実現を妨げる最大の障害とみなした三つの悪としての私有財産制度、宗教、ブルジョア的結婚制度の廃止はソ連では基本的には現実化しつつある。レーニンの指導のもとに、この国ではオーエンが唯一の方法と考えた「教育」以外に強力な中央集権的な政府による強権的な処置によってすべての旧体制下の特権の廃止と労働者・農民の権利の拡張が試みられた。

ソ連における社会主義化の最初の過程では、他律的規範の優越、画一化の強制、信仰に代る政治的指導者の偶像化が付随せざるを得なかった。それはかつて機械や工場の労働規律になじめないスコットランドの農民たちを自己のニュー・ラナークの工場での生産活動に適応させようとした時にオーエンが体験した状況に似ている。オーエンの当時の家父長的な上からの指導と強制はニュー・ラナークの半農民的な労働者の教育と再生のためにはまことに効果的であった。<sup>17)</sup> 圧倒的に農業国であり、半封建的な国家であったロシアでの革命後の指導方式が同様に権威主義的であったことは必要

かつ有効であったと思われる。

先にもふれたように Cole はそのオーエン伝のなかでニュー・ラナークの労働管理方式からソ連の第1次5ヵ年計画期の工場を連想している。<sup>18)</sup> おそらく、ソ連の初期の指導者たちがオーエンの実験から学んだものは多かったであろう。クループスカヤをはじめソ連の教育者たちがオーエンの教育実践のなかに労働者の生産教育の先駆的な範例を見たのもその一つであろう。しかも、オーエンがその実践を行ったのは記念論文の筆者ピスクーノフが感嘆したように、実にロシアにとってはまだようやく貴族革命家・デカブリストたちが憲法の施行を皇帝に迫った時期にすぎないのである。<sup>19)</sup>

性急なオーエンは完全な自由の場を求めて、新大陸アメリカにニュー・ハーモニーの共産村を建設し、全人類に理想社会の範例を示そうと試みた。自由に参加したコミュニティの成員の間には期待された調和は生まれず、アナキズム的風潮とそれに伴う生産の低下を経験した。コミュニティの規律と統一を再建しようとしたオーエンの意図は独裁的だとして構成員の反発をかい、やがてコミュニティの分裂と崩壊を招いた。彼の試みを非科学的ユートピアとして批判し、克服しようとしたマルクスの後継者たちの指導する最初の社会主義国家ソ連での困難はやはり例外ではなかったはずである。内外からの反政府勢力の攻勢に耐え、農業の集団化と重工業の建設を強行する過程でソ連式の党独裁と官僚機構が支配したのは当時の状況のもとではむしろ不可避的なことであった。

しかし、かつて教祖的なオーエンの指導から離れて労働階級が自らの運動を自律的に発展させていったように、社会主義社会におけるその構成員の成長は多くの強制や制約を不必要とし、彼らの自由の拡大を求めるであろう。その意味で、革命後50年余のソ連社会における政治の在り方——とくにその民主化の問題があらためて問われ、現状批判が体制の内外から活発化しているのは当然のことといわねばならない。<sup>20)</sup>

ひるがえって日本におけるオーエンの今日的意義を想う時、私は上記のいずれの国におけるよりもオーエンから学ぶべきことの多いのに気づかざるを得ない。生産力の発展を大衆の幸福といかに結びつけ調和させるかという基本的な問題を最も重要な問題としてとりあげる姿勢を欠く時に、生産技術や産業の発展がいたずらに人間を不幸にするという事実をオーエンはすでに産業革命期に強調した。そのような人間的配慮を欠いた高度成長の結果として、われわれは労働条件、社会福祉、教育制度、都市計画、物価、公害などの諸問題——それはすべてオーエンがすでに150年前に提起した問題である——の重要性を今日程痛感させられている時はないのである。

〔注〕

1. J.F.C. Harrison, "A New View of Mr. Owen" in *Robert Owen, Prophet of the Poor*, ed. by S. Pollard & J. Salt. 1971. p.1.
2. J.F.C. Harrison, *Robert Owen and the Owenites in Britain and America*. London, 1969. p.116.
3. E.P. Thompson, *The Making of the English Working Class*, a Pelican Book, 1968. pp.887~888.
4. G.D.H. Cole, "Introduction" to Robert Owen, *A New View of Society and Other Writings*. p. xiv.
5. cf. R. Owen, "An Address to the Working Class." *op. cit.* pp.148~155.
6. 本稿Ⅱ.4参照
7. 同上。
8. cf. B. Lapping. *The Labour Government, 1964~70*.1970,
9. cf. 都築忠七 "故 G.D.H. コール教授について" 一橋論叢, Vol. 46. No.1. p.53. および B. Lapping. 上掲書
10. 本稿Ⅲ. 1,2参照
11. E.P. Thompson. ed. *Out of Apathy*, 1960. (邦訳) 福田・河合・前田訳、『新しい左翼——政治的無関心からの脱出——』東京、昭和38年。  
" ", *Warwick University Ltd. Industry, Management and the Universities*. 1970.
12. V.A.G. Gatrell "Robert Owen and the Twentieth Century" Introduction to Robert Owen, *A New View of Society*. a Penguin Book, 1970.
13. J. Harrison 教授のこの書物については本稿の作成に当って参考にしたが、その要約ともいうべき同教授の論文を本稿のⅢ. 7 のなかで紹介しておいた。
14. S. Pollard & J. Salt ed. *Robert Owen, Prophet of the Poor, Essays in Honour of the Two Hundredth Anniversary of his Birth*. Bristol. 1971. J. Butt ed. *Robert Owen, Prince of Cotton Spinners. A Symposium*. Newton Abbot. 1971.
15. 本稿Ⅱ.1. 注 4 参照
16. V.I. Lenin, *British Labour and British Imperialism, a compilation of writings by Lenin on Britain*. London, 1969. p. 210. Cole 教授の見解については本稿Ⅱ.2注13 参照。
17. オーエンはその自叙伝のなかでも彼がニュー・ラナークの経営に当った頃のスコットランドの民衆の遅れた意識や彼の指導方法について書いている。cf. R. Owen. *Life*. pp. 56~63, p. 228. また、最近の W. Hamish Fraser "Robert Owen and the Workers" や J.T. Ward "Owen as Factory Reformer" (いずれも上掲 J. Butt. ed. の論文集所収) など、その間の事情を明らかにしている。
18. 本稿Ⅰ. (2) 注 7. 参照
19. 本稿Ⅳ. 注 p. 97. 参照
20. ソ連における言論出版の自由の問題について論じた出版物は内外ともに多いが、最近の日本での研究論文の一例として次のものがあげられる。

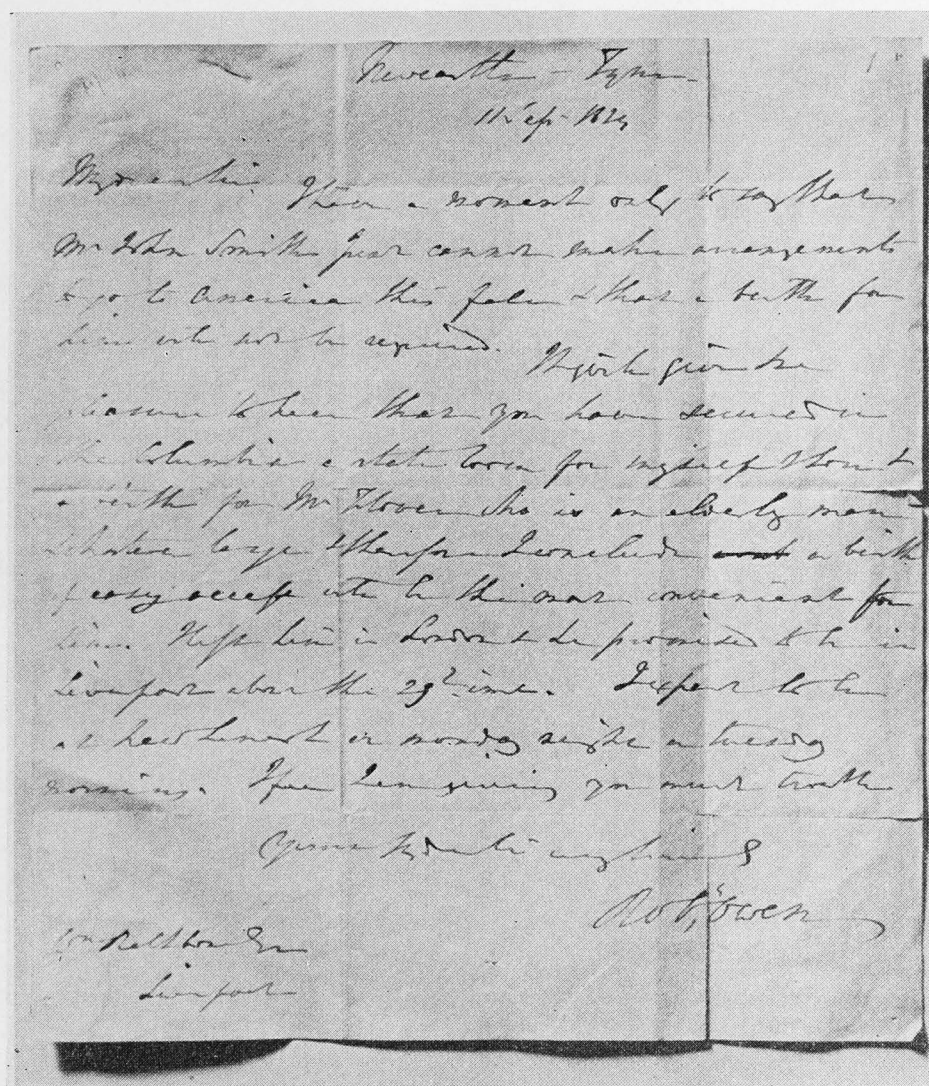
藤井一行、社会主義における言論の自由の問題——初期ソヴェト政権の言論・文芸政策をめぐって。『現代と思想』No.6. 1971.

〔付録〕

日本におけるロバート・オーエンの自筆文書

東京の一橋大学の図書館にはロバート・オーエンに関するおそらく日本でもっとも豊富な蔵書がある。とりわけ、そのなかにある外池文庫にはオーエンの自筆の手紙2通とオーエンの時代に出版されたオーンの著作や定期刊行物の初版が多数収められている。

このうちオーエンの2通の手紙についてはすでに同大学教授・都築忠七氏によって労働史研究 学会紀要の第7号 (Bulletin of the Study of Labour History, No.7, Autumm, 1963) にその内容が紹介されているが、一橋大学図書館の大橋渉氏の好意で今回その写真をここに収録することができた。また同図書館の蔵書のなかにオーエンが1858年に当時のスウェーデン・ノルウェー王に献呈した彼の自叙伝の初版本があるので、その自署の部分のコピーをあわせてここに収めた。



(図 No.27) ロバート・オーエンの手紙

(一橋大学外池文庫所蔵)

The letter of R. Owen in the Library of Hitotsubashi University, Tokyo.

2

Severock, Resk. 21 Jan 1887

To James L. H. Buck's (same) Esq

My dear Sir

On the 17th of January last L. H. H. had  
a meeting as per the enclosed  
advertisement.

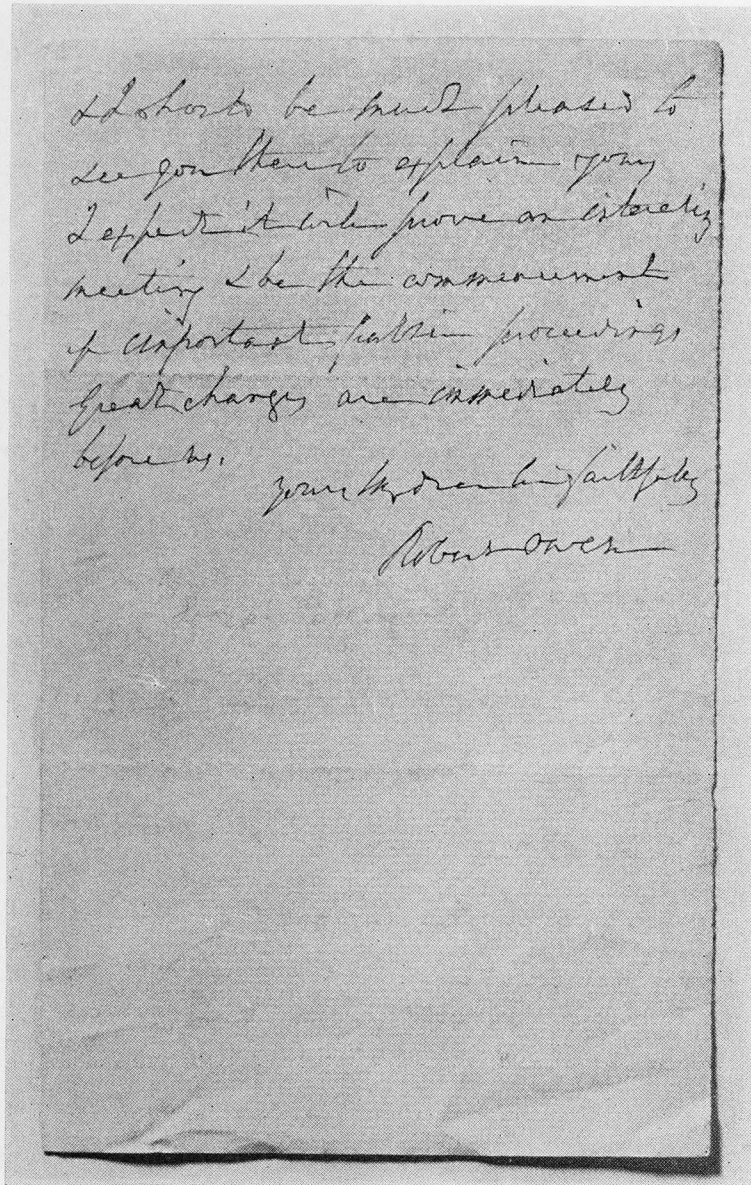
There will be exhibited, large  
painted reproductions of the  
Birds of the proposed  
Along of the Pemberton's Property  
Along of Mr. Atkins' Property  
Along of my proposed property  
Mr. Pemberton who is J. H. L. & Co  
will be there to explain his  
views - Mr. Atkins' Civil Engineer  
of the Town Council of Oxford

(図 No.28) ロバート・オーエンの手紙

(一橋大学外池文庫所蔵)

The letter of R. Owen in the Library of Hitotsubashi University, Tokyo.



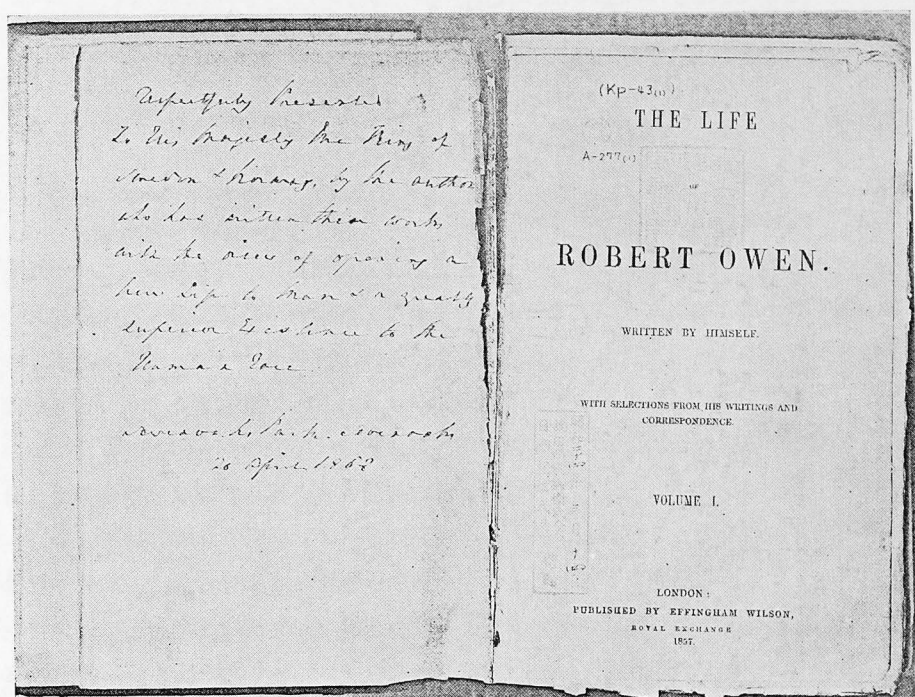


(図 No.29) ロバート・オーエンの手紙

(一橋大学外池文庫所蔵)

Continue from the last page.





(図 No.30)

オーエンがその死の7ヵ月前の1858年4月20日にスウェーデン王兼ノルウェー王・オスカルⅠ世に贈った自叙伝第1巻初版の扉と自署。文面の文字は次の通り。

Respectfully Presented

To His Majesty the King of Sweden & Norway, by the author who has written these works with the aims of opposing a New Life to Man & a greatly Superior Existence to the Human Race.

Sevenoaks Park, Sevenoaks.

20 April 1858.

晩年のオーエンのユートピア思想と spiritualism と終生変らなかった支配階級への期待などがうかがえる。

東京一橋大学図書館蔵

[The First edition of the Life of Robert Owen, written by himself and his autograph for the King of Sweden & Norway. in the Library of Hitotsubashi University, Tokyo.]

(いまい よしお 本学助教授 社会・経済思想史)